
もし青銅が黄金だったら

377

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もし青銅が黄金だったら

【Nコード】

N4612U

【作者名】

377

【あらすじ】

もしも聖闘士星矢の主役が最初から最後まで黄金聖闘士だったら思いつきり無双できるのでは？という妄想をなんとか文章にしてみようと思って書いてみました。初めてなので、読みにくい所も多いですがよろしくお願いします。

第一話 襲来！白銀聖闘士（前書き）

一輝との闘いの後からです。このあたりはかなりうる覚えで書いてるので、原作と違っててもそこはスルーでお願いします。

第一話 襲来！白銀聖闘士

かつて、ギリシャ神話の女神アテナを守る少年達がいた。その蹴りは地を砕き、その拳は空を割くと…もはや神話にもその名が残っていない伝説の闘士…彼らの名を聖闘士セイクトという…

…とある海岸に妙な人影が見える。

遠目からは数人の男達 いや、少年達と言っていていいだろう が争っているようだ。

その中でも、年若いと思われる少年が叫んだ。

「…くっ！あんだ達、一体何のためにここに来たんだ！どうして俺達を殺そうとする！？」

そう叫んだ少年は何故か全身血まみれでその衣服もたった今戦争でもしてきたのかと思われるほどにボロボロである。

「フツ…そんなことも分からないのか、お前達は聖闘士であるにもかかわらずその掟を破り私闘を行なったのだ。だからこそ、この私が教皇の勅命をうけてお前達を処刑するために派遣されたのだ！この白銀聖闘士シルバハリザド蜥蜴星座のミスティがな！」

相手であるう青年が、そう答えた。

先程の少年と違い彼は特に傷ついている様子はない。

それどころか全身を覆うように光輝く白銀の鎧を纏っている。

白銀の鎧 白銀聖衣 クロス それは白銀聖闘士の証である。

アテナを守る聖闘士は3つの階級が存在する、最下級の青銅聖闘士、聖闘士としてある程度の強さに達した白銀聖闘士、そして最高峰である黄金聖闘士 ゴールド。

彼はその白銀聖闘士の中でもかなり上位の実力を持っている、なにしろその掌底ひとつで日本最高峰の富士山を揺るがすことも可能。故に本来は今彼の前に立つ少年 少年もまた聖闘士、その名も青銅聖闘士天馬星座の星矢だ ベガサス などは相手にもならない、青銅と白銀の間にはそれほど強さに差があるのだ。

周りにいる星矢の仲間達である龍星座の紫龍や、白鳥星座の氷河、キクナス アンドロメダ星座の瞬も固唾を呑んで二人を見守っている。

聖闘士の闘いは一対一であることを重視し、複数で一人に対することはおろか武器を持つことさえも禁じられている。

…もつともアンドロメダ星座の鎖など、どう見ても武器にしか見えないものもあるが…。

「確かに俺達は掟を破ったかもしれない。しかし、だからといってここで殺されるわけにはいかない！俺には姉さんを探すという使命があるんだ！そのためなら、あんたと違って戦ってやる！」

星矢はそう叫ぶと相手が自分よりも格上であることなど百も承知で、それでも尚、生き残るために闘うことを選んだ。

自分を探そうと孤児院を飛び出し、行方不明となってしまうた姉ともう一度再会するために…。

「星矢！無茶だよ！僕達はたった今まで兄さんと闘ってたんだ！それに聖衣もないのに！」

星矢の声を聞いて瞬がそれを止めようとして叫んだ。

そう、星矢達はついさつきまで瞬の兄であり、青銅聖闘士の中でも最強といわれた鳳凰星座フェニックスの一輝とその手下の暗黒聖闘士達ブラックと奪われた黄金聖衣をめぐる富土山の地下深くで闘っていたのだ。

かろうじて一輝に勝利した星矢達は、突然襲ってきた地震と激闘の疲労で意識を失ったが、気がつくところの海辺で倒れていた所にミスティが現れたのだった。

「お前達の事情など知ったことか！いずれにせよそんな裸同然の身で私と闘おうというのか、ならばこの場で死ぬがいい！」

そう言うと同時に、ミスティは星矢に向けて拳を放った。

聖闘士の拳は最下級の青銅聖闘士でさえマツハ1の速さである。

白銀聖闘士ともなればその速さはマツハ2〜5に至る。

星矢はその拳を見切ることが出来ずに空中に大きく吹き飛ばされてそのまま地面に叩きつけられた。

「グハアツツ…クツ…さすがは白銀聖闘士だ…俺達青銅聖闘士とは実力が違いすぎる…」

星矢はその衝撃をまともにくらいながらも、なんとか耐え凌ぎ立ち上がるうと気合を込めて叫んだ！

「だが！たとえどれだけ勝ち目がなくても、俺は負けるわけにはいかないんだ！くらえ！ペガサス流星拳！！」

こうして星矢とミスティの絶望的な闘いが始まるうとしていた…

第一話 襲来！白銀聖闘士（後書き）

時々ここで聖闘士星矢の考察（というよりも、自己流の解釈）とか書いてみようと思ってます。たぶん次で主人公の黄金聖闘士が出せると思います。この時点ということでもかなり限定されますが…

第二話 星矢vsミステイ（前書き）

ミステイってこんなキャラだったか？

第二話 星矢vsミスティ

今、目の前の闘いを一般人が見たら間違いなく自分の目を疑うだろう。

対峙する白銀の鎧の男とボロボロの少年の闘いはそれほど常識を越えていた。

鎧の男がほんのわずかにその腕を振るったように見えた次の瞬間、眼前の少年がいきなり何メートルも空高く飛ばされ頭から大地に激突した。

そうかと思うとなんと少年はどう見ても致命的としか思えないような血を流しながらも立ち上がり、それどころか相手に向けて拳を放とうとしている。

二人共明らかに常軌を逸した闘いを続けていた…だがそれも聖闘士にとっては当たり前のことに過ぎないのだ…。

しかしその闘いの気配を感じている者達がいた…

…それは数日前に、星矢達がまだ一輝と闘う前に聖闘士同士でギヤラクシアンウォーズ銀河戦争というトーナメント戦を行なっていたコロシアムの一角。わずか数日前には銀河戦争を開催していたコロシアムは見る影もないほど荒れ果てていた。

壁あちこちが崩れ落ち、中央のリングはズタズタに引き裂かれていた。

そこにいたのは二人の男女だった。

どちらもその場に場違いな姿で静かに佇んでいた。

一人は堂々とした体躯の執事服を着た金髪の男で、その目はコロ

シラム近くの海岸を覗んでいた。

もう一人はいかにも上流階級のお嬢様といった出で立ちで髪の毛の長い美しい少女だった。

何故か手にはその身体に合わない長杖を持つその少女は容貌とはまた違う神々しい美しさであった。

「ふう…どうやら星矢達への追手が現れたようですね。」

そう言っつて少女はため息をつく、傍の男に声を掛けた。

「加勢に行かなくてよいのですか？おそらく追手は白銀聖闘士、星矢達がかなう相手ではありません。」

すると男は星矢達のいる海岸から目を逸らさずに言った。

「確かに星矢達青銅聖闘士と白銀聖闘士の間には大きな力の差があります。しかし、聖闘士の強さは纏っている聖衣だけで決まるものではありません。」

最も大切なのは小宇宙^{コスモ}です。それがあればたとえ最下級の青銅聖闘士でも最強の黄金聖闘士にだって勝つことは出来るのです。私は聖闘士として帰って来た星矢達を見て真の聖闘士であると感じました。そう…たとえ相手が白銀聖闘士でも勝つことが出来ると信じています。」

そう男は力強く言い切った。

「そうですか…でも、それでも私からのお願いです、どうかあなたに加勢に行つてはもらえないでしょうか、私は幼い頃、彼らに酷いことをしてしまいました。星矢達は今でも私のことを恨んでいるかもしれませんが。だからこれ以上彼らに傷付けて欲しくはないの

です。…身勝手なのは分かっています…でも…どうか…お願いします。…」

男はそれを聞いて、初めて少女の方を向いた。

「わかりました。そこまで思っているのなら、私はこれから星矢達の所に向かいましょう。どうも星矢達の方に白銀聖闘士が集まっているようですから。しかし、私にはあなたを守る使命がある。だからこそ、私はあなたの側を離れる訳にはいきません。それに、星矢達にその過去を詫びたいのでしょうか…ならばあなたも一緒に来るべきです。」

男の真剣な眼差しを見た少女は、少し躊躇うような表情を見せたが、それを振り切ってはつきりと言った。

「そうですね…私が一番に彼らに謝らなくてはいけない。なのに、ここで逃げる訳にはいきませんよね。」 「彼らとて真の聖闘士、正直にご自身の事情を話せばきっと分かってくれるでしょう。追手の聖闘士達とは私が闘いますからどうか、ご安心を。それでは行きましょう…アテナ。」

こうして二人は星矢達が闘う地へ向かった…

…星矢はミスティの音速の拳のダメージをうけながらも、その瞳から闘志を失うことも無く小宇宙を燃やして必殺技を放った。

「くらえ！ペガサス流星拳！！」

星矢の拳はその名の通り流星の如くミスティに向かって放たれた。この技は、かつて星矢がペガサスの聖衣を得るための聖闘士候補生同士での闘いの際にみだした、一秒間に百発もの音速の拳を放つ文字通りの必殺技である。

「ハア……ハア……今の攻撃はまともに命中したはずだ……やったか？」

星矢はそう呟いてミスティの方を見た……次の瞬間その顔に驚愕の表情を浮かべた。

「ばかな……！流星拳をまともに受けて倒れないどころかかすり傷ひとつ負っていないだと！？」

「言っただはずだ、お前が私と闘うなど自殺行為に等しいと！無駄な攻撃などしている暇があったら私から逃げることに全力を尽くしていれば、万に一つも生き残れたかもしれないものを……まあいい、次の攻撃で終わりだ！」

再び放たれたミスティの拳は呆然としたままの星矢に襲いかかった。

星矢は咄嗟に目を閉じて防御しようとしたが、予想した衝撃は襲って来なかった。

……おかしい……今の攻撃が外れたわけがないのに……

怪訝な思いで目の前を見ると、そこには見慣れたものが鎮座していた。

「これは…ペガサスの聖衣！」

そう、そこにあったのは先の一輝との闘いで富士山の地下深くに置いてきてしまったはずのペガサスの聖衣だった。

それだけではない、他の三人の聖衣もその所有者の前に出現していた。

「一体、どうしてここに突然俺の聖衣が現れたんだ…？」

「それは私がそれをここにテレポートで転送したからです。」

不意にかけられた声に後ろを振り向くと、穏やかな表情の紫髪の男が立っていた。

「あなたは…ジャミールのムウ！」

驚きの声を上げたのは紫龍だった。

ジャミールのムウ、彼は世界中でも唯一人の破損した聖衣を修復して甦らせることができる聖衣の修復師なのだ。

星矢達の中ではただ一人紫龍だけが聖衣の修復で会いにいったため面識がある。

「そうか…あんたがムウか…でもどうして聖衣を転送してくれたんだ？」

星矢はいきなり現れたムウに戸惑いながらもそう尋ねた。

星矢はムウに会ったことは無く、聖衣を修復してくれたことは紫龍から聞いていたがここまで手助けしてくれることは気になったのだ…気になったのは何故か剃った上に自分で書いたようなムウの磨

眉かもしれないが…

「聖衣だけではありませんよ。あなた達をここへ運んだのも私です。もつとも、一度に聖衣も人間も運ぶのは多少骨が折れるので別々に転送しましたがね。」

それを聞いて星矢達はようやく自分達が何故海岸にいたのか納得した。

「そうか、よく分かんないけど、助けてくれたことには礼を言うぜ！」

そう言つて星矢は聖衣を装着すると再びミステイに向き直つた。

「聖衣装完了！これで俺もお前と闘えるぜ！」

「まったく…そんな傷ついた身体で聖衣を纏つた位で私に勝てるつもりか！？それに、お前は聖衣修復師のムウだな！大人しくジャミールに籠つていればよいものを、何故それほどに青銅聖闘士ごときに肩入れするのだ！勅命でそいつらの処刑を命じられた私の邪魔をするとは、お前は教皇の命令に逆らう気か？」

止めを差す直前で邪魔が入つたことへの苛立ちからか、ミステイは声を荒げた。

しかしムウはまったく動じることなく答えた。

「別に他意はありませんよ。ただ、彼らがあの場で死ぬのは惜しいと思つたから手を貸したまでのこと。聖衣を与えたのは、せめてわずかでも勝つ確率が上がればと思つたからです。」

「フン…ならば二度とそんなことを考えぬよう、こいつらを即座に処刑してやる。いくぞ！」

そう言い放つと、ミスティは再び星矢を攻撃するべく構えた。

「さあ、この技で全員揃って砕け散るがいい！マーブルトリパー！！！」

ミスティが己の必殺技を繰り出した、次の瞬間星矢達は全身に五体が砕けんばかりの凄まじい衝撃を受けて全員がその場から弾き飛ばされた。

「ウツ…この全身がバラバラになるかのような衝撃…まるで大地の底まで揺るがすようだ…これが白銀聖闘士の真の実力なのか…！？」

そのあまりの衝撃と強さの違いに愕然としつつも聖衣を身につけたおかげか、かろうじて意識を失うことも無く星矢は立ち上がった。「このままではやられる…！なんとか攻撃しなくては！ウオオオオツツ！燃え上がれ俺の小宇宙！！！」

渾身の気合を込めて星矢は己の小宇宙をたかめていく。

小宇宙とは全ての人間が根本的に持っているものであり、聖闘士の持つ力の真髄でもある。

聖闘士はそれを燃焼させ、高めることで奇跡を起こす！

「今度こそくらえ！ペガサス流星拳！！！」

先程の流星拳をはるかに凌ぐ勢いで放たれた音速拳に対し、同様

にミスティは回避する素振りも見せない。

「またその技か…私にそんなものが通じると思っな！」

するとミスティは正面に手を構え、マツハの速さで迫ってくる星矢の拳を平然と受け止めた。

「こっ…これは…手のひらを身体の前で高速で旋回させることで空気の壁を発生させて流星拳を防いでいたのか！」

星矢は渾身の流星拳を防がながらも、ようやくミスティの動きを捉えた。

「よく気が付いたな、しかしこれで理解しただろうお前の拳が私に届くことは無いということが！」

そう叫びながらもミスティは己の身体の異変に気付いた。なんと、白銀聖衣の一部にかすかにヒビが入っていたのだ。

「バ…バカな…私の完璧な防御を奴の拳は貫いたのか!？」

予想外の事態に動揺するミスティ。

「どうやらまったく通じない訳じゃないみたいだな!こうなったらお前を倒すまで攻撃し続けるだけだ！」

星矢は追撃をかけようと、拳を振りかぶった。

「…貴様、よくも私に傷を付けたな!この私の美しい身体に傷を

付けるとは許さん！この手で八つ裂きにしてくれる！！マーブルトリパー！！」

己の肉体に絶対の自信を持つミスティはその身体に傷を付けられたことに激怒し再びマーブルトリパーを放った。

「ぐううっ……くそっ……ここで負けてたまるかああ！！」

星矢もそれを受け止めて、さらに跳ね返すべく小宇宙を高めていく。

そしてついに、星矢の小宇宙は格上の白銀聖闘士であるミスティの小宇宙を越えていき、マーブルトリパーをその手で受け止めた。

「そ…そんな…マーブルトリパーを受け止めただど！？それに…この小宇宙…私を越えてまだ高まっていくのか！？」

「いくぞミスティ！ペガサスローリングクラッシュュ！！！」

自分の想像をはるかに上回る小宇宙に恐れを抱いたミスティの一瞬の隙について背後に回り込んだ星矢は、後ろからしがみつくようにしてその動きを封じ、そのまま回転を加え天高く飛び上がったかと思うと相手を自分ごと地面に叩きつけた。

その凄まじい威力によってミスティの纏っていた白銀聖衣は粉々に碎け、大地に巨大なクレーターを作った。

ミスティは致命傷なダメージを受けて己の命の火が消えていくのを感じながら、残ったわずかな力を振り絞って立ち上がり、自分の技の威力の反動で気絶した星矢に向けて静かに告げた。

「見事…私の完敗だ…だが…これで終りだと思っな…お前達青銅聖闘士を抹殺するために日本に送り込まれた白銀聖闘士は私だけで

はない。それをよく覚えておくんだな。」

最期にそう言い残して、ミスティは地面に倒れた。

第二話 星矢vsミスティ（後書き）

一応原作にもある対戦ですね、正直この話は記憶にある星矢の雰囲気の中で自分が思っているキャラの性格で書いているので、どうしてもかなり薄めた原作っぽい何かになってしまいます。アテナって最初はもっと嫌な性格だった気もする…

第三話 さらなる脅威（前書き）

こんな作品でも読んでくれる人に感謝。感想でも批判でも大歓迎です。

第三話 さらなる脅威

ミスティが倒れたのを見た瞬や紫龍は、すぐさま気絶した星矢の元に駆け寄った。相手を倒すことは出来たが、既に重大なダメージを負った星矢の身体は自分の仕掛けた技の反動にも耐えられなかったのだ。瞬は素早く星矢の様子を確認すると、その心臓の鼓動が聞こえたので、星矢が生きていたことにほっと安堵のため息をついた。聖闘士としての誇りのために、敢えて二人の闘いに手は出さなかったが、内心では星矢が殺されてしまうのではないかという不安をこらえて闘いを見守っていたのだ。

……しばらくして、小さな呻き声を上げて星矢がゆっくりとその目を開けた。視界に入った景色を見回すと、ダメージをうけてはつきりしない頭に、元の海岸に倒れたままだということが分かってきた。日が沈んでいないところを見ると、時間もさほど経ってはいないようだ。そしてすぐそばに倒れていたミスティを見て周りの仲間達に尋ねた。

「……俺はミスティに勝ったのか？」

「そうだよ。星矢、君がああの白銀聖闘士を倒したんだ！」

「大したものだ。まさか青銅聖闘士の身で白銀聖闘士を倒してしまうとは……。」

起き上がった星矢を見て、瞬と紫龍が答えた。彼らにしてみれば、あれほどの実力差がありながらもそれを覆して勝利した星矢にまさに奇跡を起こしたように感じられたのだろう。星矢にしても、自分がああの白銀聖闘士と正面から闘って倒したことが未だに信じられな

い様子だった。そこに、後方で三人の様子を伺っていた氷河が話しかけてきた。

「星矢が目を覚ましたのなら、急いでここから立ち去った方がいい。奴の最期の台詞を聞いただろう…じきに奴の仲間の白銀聖闘士が襲ってくるぞ。」

氷河は冷静にそう言って、星矢達に現在の状況を思い出させた。そう、確かにミスティはその死の間際に自分以外の白銀聖闘士も星矢達を狙っていることを告げていた。彼らがさっきの闘いに気付いて、この場に現れないとも限らないのだ。もし再び白銀聖闘士と闘いになってしまったら、おそらく今の傷ついた星矢を庇って三人で闘わなくてはならない。相手がこちらと同数ならばいいが、四人以上でかかってこられると勝ち目はないだろう。ムウもその言葉に賛成した。

「そのとおりです。一刻も早くこの場から立ち去りなさい。」

「ああ…それにしても今回はいろいろと世話になったな、感謝するムウよ。」

紫龍は聖衣の修復を依頼したこともあって、律義にムウに礼を言った。

「構いませんよ…どうせ私が勝手にしたことです。…それに、あなた達に手を貸すのもこれで最後ですから。」

ムウはそう言い残し、レポートで星矢達の目の前から一瞬で消えてしまった。

「よしっ！行くっぜ、ここでいつまでもぐずぐずしている訳には
いかないもんな！」

傷ついた身体でそれでも威勢よく叫んで、星矢は立ち上がったが、
そこで不意に思い出したように他の三人に言った。

「…そういえばたった今まで忘れてたけど、俺達が一輝から取り
返した黄金聖衣はどうしたんだ？取り戻してこい、ってあのお嬢様
に言われてたよな？」

「今更ここでそれを言ってもどうにもならないだろう。それに、
黄金聖衣も置き去りにされていたはずだが、さすがにムウもそれま
では転送してくれなかったからな。」

「あゝあ。あれをあのお嬢様に渡したら、それでももう会うつもり
もなかったんだけど、最後の最後まで嫌味を言われそうだなあ。」

そんなことを呟きながらコロシラムの方へと歩き出した星矢の前
に突然人影が現れた。まさか、もう追手が来たのか！？咄嗟に身構
えた星矢達だったが、そこに立つ人物の正体に気付いたのか星矢が
声を掛けた。

「なんだ、誰かと思ったら魔鈴さんか！追手かと思っつい攻撃
するところだったぜ。」

そう言った星矢の前に立っていた人物は、水着のような独特の形
状をした白銀聖衣を纏った女性だった。名前からして日本人のよう
だが、あいにくとその顔は無機質な仮面に覆われている。何故そん
なものを付けているのかといえば、れっきとした理由がある。そも
そも、聖闘士というのは大抵男性だ。しかし、中には女性の聖闘士

というのも存在する。そうなると彼女達はアテナを守って闘うために女性であることを捨てて、生涯仮面を付け他人に顔を見せてはならない。万が一、顔を見られてしまつとその相手を殺すか、愛さなくてはならないという掟もあるくらいだ。女性が聖闘士になるということはそれほどに厳しいのだ。

「なんだとはご挨拶だね。せっかくわざわざ聖域サンクチュアリから来たつてのに。星矢、あんた一体いつからそんなに偉くなつたんだい!？」

「あはは…ご…ごめんよ魔鈴さん。そんなに怒らなくてもいいじゃないか。」

そう魔鈴は星矢が聖域で修行していた頃の師匠なのだ。しかも、星矢の格上の鷲星座イーグルの白銀聖闘士である。彼女の凄まじい修行で、何度も死にそうな目にあつた星矢は今でも彼女に頭が上がらない。

「その人はお前の知り合いか、星矢？」

「そうだぜ、氷河。魔鈴さんは俺の聖闘士の師匠なんだ。でも何で魔鈴さんがここにいるんだい？」

「あきれたね。あんた達には教皇から抹殺指令が出てるんだ。そんな風にぐずぐずしてたらあつという間にやられちまうよ。」

そう言つて魔鈴は星矢の方に一歩踏み出した。

「そ…そうだった。じゃあね魔鈴さん、また後で！」

今にも次の白銀聖闘士が現れるかもしれない、そんな思いで駆け出した星矢が、魔鈴の横を通り過ぎようとしたその時、いきなり魔

鈴の手刀が星矢の身体を貫いた。

「えっ……ま…魔鈴さん、何を…!？」

魔鈴の手刀がペガサスの聖衣を貫通して胸のあたりに穴を空けている、そして突き刺さった腕を夥しい量の血が赤く染めていた。

「バーカ、あたしだって白銀聖闘士だよ。当然あんた達の抹殺指令はあたしにも下っているのさ。せつかく一人は倒したのに残念だったね。」

星矢の胸から手刀を引き抜くと、魔鈴は低い声でそう言った。目の前で星矢が殺されるのを目の当たりにした瞬が一瞬呆然として、魔鈴に対して怒りの声を上げた。

「そ…そんな、あなたは星矢の師匠でしょう!？」

「確かにそうだけど、まあ、諦めな。指令が出ちまったものはしようがないだろ。それに、命を狙われているにぐずぐずしてるあんた達が悪いのさ。」

言い放った魔鈴は瞬に向けてその拳を飛ばす、それを見た瞬は、自身の聖衣に装備されている二本の鎖の内的一本を自分の周りに渦を巻いて螺旋を描くように展開した。

「守れ！ローリングディフェンス！」

瞬の周りを旋回する鎖は、魔鈴の放った拳を完璧に防いでいた。

「僕のこのアンドロメダの聖衣に付いている鎖は星雲鎖ネビュラチェーンといって、聖衣の中でも最高の防御本能を誇るんだ。残念だけどあなたの攻撃

は僕には通じないよ！」

「そうかい、じゃあこっちも本気でいくよ！」

次に放たれた拳は、先程のものを遙かに上回っていた。その拳を受けた瞬の星雲鎖は、ついに耐えきれずに粉々になつて砕け散つた。

「なつ……僕の星雲鎖が碎けるなんて…それに今は星矢の流星拳！？」

「別におかしくはないだろ。あたしは星矢の師匠だよ…このぐらい出来て当然さ。さあもう一度くらいな！」

弟子である星矢のそれを越える速度で魔鈴の放つた流星拳は、星雲鎖を碎かれ身を守る術を失つた瞬の聖衣を碎いて瞬自身をも大きく吹き飛ばした。そのまま地面に叩きつけられた瞬は、再び起き上がってくることはなかった。

「瞬！おのれ…！たとえ女といえども容赦はしない！いけ！廬山昇龍覇！！」

紫龍の修行地である中国は五老峰に流れる廬山の滝の大瀑布をすら逆流させる程の威力を持った一撃を、紫龍は躊躇うことなく魔鈴へと放つた。だがしかし、龍の闘気を纏つたその一撃を魔鈴は片手をかざして容易に止めてしまった。

「…こんなんでも逆流するなんて、廬山の大瀑布とかいっても高が知れてるね。」

昇龍覇を防ぐことなどどうにでもなる、といった様子で魔鈴は言

うと、紫龍に向けて攻撃の構えを見せた。だが魔鈴も次の攻撃に移ることが出来なかった。ふと気付くと彼女の身体を拘束するかのようにないくつもの氷の輪が宙に浮いていた。

「…カリツォー…お前の動きは封じた…もはや指一本動かすことは出来ん。そのまま凍り付くがいい！このダイヤモンドダストでな…！」

氷河の小宇宙が高まっていくにつれて、氷の輪はどんどん増えていき、動けなくなった魔鈴に対して凍気を込めた拳を放った。氷河の放った拳はまるで、目に見える程に巨大な雪の結晶が迫ってくる錯覚させるような凍気を帯びていた。彼の拳は物質の原子の動きを止めることで相手を完全に凍り付かせる、そしてそれこそが彼をして聖闘士の中でも二人しかいない氷の聖闘士と呼ばれる所以なのだ。

「ちっ！厄介な技を！ハアッ！」

魔鈴は己の小宇宙を高め、気合を込めてカリツォーを破壊したが、襲いかかってきた凍気の拳を避けることは出来ず直撃した氷河のダイヤモンドダストによって全身が凍り漬けになってしまった。

「今だ！二人がかりでやるぞ！舞え白鳥！ホーロドニースメルチ…！」

凍った魔鈴にも尚追撃の手を緩めず、氷河は己の持つ最大の拳を放った。紫龍もそれに合わせて小宇宙を高め、再度必殺技を撃った。

「燃える龍よ！廬山昇龍覇…！」

空高くまでたちのぼる巨大な氷の竜巻と、滝を駆け昇る龍のごとき一撃が、凍り付いた魔鈴を飲み込んだ。互いに全力の攻撃を仕掛けたのだ。これを受けて生きているなど、考えられない。しかし、彼らの背後から聞こえてきたのは非情な声だった。

「やれやれ、今のをまともに浴びたらいくらなんでも危なかったね。」

「なつ……バカな！どうやってあの状況で俺達二人の攻撃を避けただんだ！？」

確かに彼女は自分のダイヤモンドダストで凍り付いて、その後の攻撃を回避出来るはずがなかった。一体何故……？その思いが氷河の動きを止めてしまった。立ち尽くす氷河に向けて、魔鈴がその種明かしをした。

「簡単なことさ。物質はどんなものでも、凍結する温度というのは決まっている。聖衣だつて例外じゃあないんだよ。青銅聖衣なら摂氏・150、白銀聖衣なら・200で完全に凍結する、といった具合にね。あいにくだけど、お前の凍気は私の白銀聖衣を凍らせる温度にはまだ達してなかった、それだけのことさ。」

攻撃を受ける直前、魔鈴は凍結状態からギリギリで脱出し、かろうじて二人の攻撃を避けることに成功したのだ。女性用の聖衣は男性用のそれよりも、ずっと露出部分が多いがそれでも聖衣というだけあって、装備者の命を守りきったようだ。

「これ以上時間をかける訳にはいかないからね。一撃で決めさせてもらおうよ。」

そう言っつて魔鈴は空高く舞い上がり、紫龍と氷河めがけて二人には感知出来ない速度で一気に急降下し、まさに猛禽類が襲いかかるかのように超音速の蹴りを放った。

「イーグル・トウ・フラッシュュ!!!」

その蹴りの信じられない速度に紫龍は魔鈴の動きを見切ることが出来なかった。それでも、なんとか最硬と呼ばれるドラゴンの盾をかざして攻撃を防ごうとはしたのだ。そのおかげで結果的にイーグル・トウ・フラッシュュを盾で受けることは出来た。が、それでもその威力は受け止めきれずに吹き飛ばされ、氷河をも巻き込んで二人共倒されてしまった。

「ずいぶん手間取っちゃったね。でも…なんとか間に合ったか…。」

ようやく四人が倒れたのを見て、そう呟いた彼女の後ろから声が聞こえてきた。

「おおっ！青銅共を倒したか！ミステイの小宇宙が消えてしまったから来てみたが、思ったよりもあっけなかったな。」

その声を掛け近づいてきたのは、魔鈴やミステイと同様に青銅聖闘士抹殺の命令を受けた白銀聖闘士達だった。

「それにしても、ミステイを倒した奴らを四人同時に葬るとはさすがだな、魔鈴。」

近づいてきた四人の白銀聖闘士の中の一人が、そう言っつて魔鈴に目を向けた。

「なんだかんだ言っても、あいつらは結局相手が知り合いだっただけで手加減しちまうような甘ちゃんなのさ。そんな奴らを倒すのなんて、造作もないよ。」

魔鈴はそう告げると、その場を離れるように四人に背を向けて立ち去ろうとした。

「待て。どこへ行くつもりだ？」

「ひよっことはいえ、聖闘士を四人も相手して少し疲れてるんだ。後の処理はあんた達でやっておいてくれないかい？」

さつきとは別の男だったが、その男の方を向くことなく答えた。

「…そうだな、処刑が完了した証にこいつらをここに埋めてしまわないとな。」

白銀聖闘士達は、既に息絶えた星矢達の方へと歩きながら、言った。掟を破った聖闘士への見せしめとして、星矢達が殺されたことを全世界にいる聖闘士に明らかにしなければならぬ。そのためにここに、彼らの墓…粗末な木の十字架でできた…を建てるのだ。だがその時、今まで一言も話さなかった男が突然魔鈴に話しかけた。

「…いい加減に白状したらどうだ？どうせお前がここから逃げることは出来んぞ。」

「…何のことだい。」

「フツ…この俺が気付かないとでも思ったのか？お前はそこの青

銅聖闘士共を殺した、と見せ掛けて俺達が去った後で、再び起こすつもりだったのだろうか？」

その言葉に、周りの白銀聖闘士達も魔鈴を逃すまいと彼女を取り囲むように動いた。

「…そういえば、あなたは聖闘士の中でも特殊な技を持ってたね。あたしの心を読んだってのかい!？」

彼女にしては珍しく声を荒げて言った。

「そうだ。俺はサトリの法によって分かっていたぞ、お前が青銅共を仮死状態にしただけだということがな!」

「……それで…どうするつもりだい？」

「知れたことだ！お前も聖域への反逆罪で処刑する!」

「…バレちゃってたなら仕方ないわね。潔く降参しようかしら…
…なんて、言うと思った？」

「何だと!？」

魔鈴が後ろ向きのまま、微動だにせず不意打ち気味に放った拳は、彼女を取り囲んでいるという状況で精神的に油断していた白銀聖闘士達の意識の外にあった。魔鈴の周囲の全方位に向けられた音速拳は、一時的に彼らの視界を奪った。その一瞬の隙をついたのか彼女は目の前から姿を消していた。

「クソッ！一体、どこへ消えた!」

目前にいなながら、魔鈴を見失ってしまったことに動揺したのか白銀聖闘士の一人が拳を出鱈目に振り回しながら叫んだ。

「落ち着け。頭に血を上らせると、魔鈴の思いつぼだぞ。ここは俺に任せろ。」

そう言っただけ男は、少しの間瞑想すると、突然自分の腕を軽く上げた。次の瞬間まさに男が腕を振り上げたところに、魔鈴の鋭い手刀が男の首を狙って振り抜かれていた。

「気配を消して背後から攻撃しようとしても無駄だ。どれほど気配を消しても、俺にはお前の次の動きが見えている。どこからきてもお見通しだ。この獵犬星座ハウンドのアステリオンの前ではな！」

アステリオンと名乗った男はそう告げると、魔鈴に向けて拳を放った。

「…やっぱりあんたには不意打ちなんて通じないか…アステリオン。」

その反撃を防ぎながらそう呟いた魔鈴は、完全にその気配を絶って攻撃したにもかかわらず、あっさりと止めて見せたアステリオンに対し心中で己の不利を悟っていた。彼女はまず真つ先に、四人の中でも最も厄介なサトリの法を使うアステリオンを排除しようとしたのだが、その目論見も外れた。不意打ちが通用しないなら、いくら彼女といえども四人の白銀聖闘士を倒すことなど出来はしないのだ。

「…仕方ないね。…星矢、もう目覚めてるんだろう!? あんた

達も加勢しな！」

魔鈴が未だに倒れている星矢達に叫んだ。すると、先程まで死体のようにピクリともしなかつた四人がゆっくりと起き上がった。

「…あれ？魔鈴さん？俺は確か魔鈴さんに胸を貫かれて…」

現状を把握していないのか、星矢はそんな緊張感の欠片もない台詞を言つて立ち上がった。そしてハツと気付いて己の身体を確認したが、心臓はおろか聖衣にも傷は付いていなかった。

「それにどうしてあいつが白銀聖闘士と闘っている？」

他の三人も次々と立ち上がり、目の前の状況が理解出来ずに首を捻っている。

「やはり俺達に幻覚をかけていたか…俺達より先にここに向かったのは奴らを殺したと思わせるには、その方が都合がいいからだな？高位の聖闘士は相手に幻覚をかけて眩惑させられると聞くが、魔鈴、お前にそんなまねが出来るとは思わなかつたぞ。」

アステリオンは他の三人と共に星矢達に近づいてきた。魔鈴はまだ混乱している星矢達に、事情は後で伝えるからと言って、全員で白銀聖闘士達に向き直った。

「いいかい…アステリオンの相手はあたしがやる。あんた達は他の三人と闘ってくれ。」

「ああ、分かったよ魔鈴さん。さっさと倒して加勢してあげるよ！」

「そうだね、今度こそ僕も星矢と一緒に闘うよ！」

「相手の数が俺達より少ないからといって油断は禁物だぞ…。」

「俺はたとえ誰が相手だろうとクールに闘うだけだ。」

皆が互いの意思を目で確認すると、目の前に立ちはだかる白銀聖闘士に向けて駆け出した。

第三話 さらなる脅威（後書き）

今回も戦闘メインかな？本来白銀聖闘士と青銅聖闘士にはかなりの差があると思っています。それが表現できていれば幸いです。…あと白銀聖闘士の特徴がよく分からないです、魔鈴とアステリオン以外は作者にも下手すると区別がつきません。どうしたらいいのでしょうか。

第四話 真実

「魔鈴、高が青銅の小僧が四人加わった位で、俺達に勝てるのも思っているのか？」

「さあね。あんた達を倒した後で教えてあげるよ！」

言い終わると同時に、魔鈴は一気にアステリオンの近くまで踏み込み至近距離から拳による攻撃をかけた。

「何度きても無意味だ！俺にはお前の攻撃の軌道やタイミングが全て読めているのだからな！」

魔鈴の拳を読んでいなししているアステリオンだったが、肝心の攻撃の機会が見えなかった。

魔鈴はアステリオンを攻撃する時もほとんど隙を見せない。

だからアステリオンの攻撃も魔鈴に防がれるだけだった。

アステリオンもそれに気付いて攻撃を切り替えた。

軽い音速拳を放ち様子を見ながら、彼女が致命的な隙を晒すのを伺うことにしたのだ。

こうして白銀聖闘士の中でもトップクラスの力を持つ二人が、それぞれの命を賭けて激突した。

一方星矢達は、少し離れた位置で残りの白銀聖闘士と向かい合っていた。

こちらは青銅四人で向こうは白銀三人、正直こちらが有利といえる程の数の差は無い。

それでも彼らは己を奮い立たせて、向かってゆく。中でも真つ先に白銀聖闘士に突進したのは、やはり星矢だった。自分の拳に小宇宙を込めて、相手の中で最も巨体を持つ男にいきなり渾身の流星拳を放った。

しかし、その拳が相手に届くことはなかった。

「だ…誰だ！新しい敵か!？」

星矢がそう驚くのも無理はない、本当に突然の出来事だった。

目の前に現れた男は、星矢の手首を押さえて今まさに放たれようとしていた拳を止めていた………だけでなく何と、星矢の攻撃に対してカウンターを取ろうとしていた相手の白銀聖闘士の拳をも片手で封じていたのだ。

「そう怒鳴るな星矢、私はお前達の味方だ。」

突如目の前に現れた謎の男に、星矢も、いや、その場にいた全員が時が止まっているかのように攻撃の手を止めていた。

見ると、その男は上等な執事服を身に纏っていて、とてもたった今聖闘士同士の闘いを止めたとは思えない格好である。

男は呆気にとられている聖闘士達から目を外して、星矢達の後ろからゆっくりと歩いてくる少女に言った。

「どうやら間に合ったようです。」

それを聞いた少女は、安心した表情で星矢達に話しかけた。

「ご苦労でしたね、星矢。あなた達はもう闘う必要はありません

よ。」

美しい声でそう告げた少女の顔を見た星矢達は、皆一様に驚きの表情を浮かべた。

「あなたは…沙織お嬢さん…でも、どうしてこんなところに…？」

そこにいたのは星矢達に黄金聖衣の奪還を命じた張本人、城戸沙織だった。

信じられない人物の登場に、驚愕しながらも瞬は思い切って尋ねた。

「ええ、それは……」話し出そうとした少女の声を遮って、星矢が大声で叫んだ。

「瞬！そんな奴が来たことなんて、今はどうでもいいだろ！どうせ黄金聖衣が待ちきれなくなったとか言うに決まってるさ！」

心中の怒りを吐き出すかのように叫んだ星矢の目は、やってきた少女 城戸沙織 に対する怒気に満ちていた。

「でも、残念だったな。あいにくと黄金聖衣は富士山の地下深くだ、もう取り出すことは出来ないぜ。」

そう言って、また相手に向かう星矢に俯いていた沙織は、凜とした声を上げた。

「待ちなさい、星矢。私はそんなことのためにここへ来たのではありません。あなた達に、私がしてしまったことを謝るために、そして真実を伝えるために来たのです。」

「謝るだつて！？今更そんなことして、俺達があんたや城戸光政を許すとも思っているのか！？」

その言葉に沙織だけでなく、瞬や紫龍、氷河も言葉を失った。彼らの中にかつての忌まわしい記憶が甦っていた。

星矢はかつて星の子学園という孤児院にいた。

両親はどちらもないが、優しい姉の星華と共にすくすくと成長していった。

ところが、ある日突然現れた男達にさらわれたのだ。

たどり着いたのは、世界でも有数の財閥であるグランド財団の総帥、沙織の祖父である城戸光政のところだった。

ここで暮らすように言われ、光政の屋敷に連れていかれると、そこには同じような年頃の子供がたくさんいた。

皆星矢と同じくどこからか連れてこられた子供で、瞬、紫龍、氷河ともそこで出会った。

そして始まったそこでの生活は、幼い子供にとっては地獄のように辛いものだった。

毎日の食事は粗末で、成長期の子供に耐えられるものではなく、屋敷を脱走しようとする者もいたが、全員子供の監視役の黒服の男達に捕まり罰として立てなくなるまで殴られた。

特に、姉に会おうと度々脱走を繰り返した星矢は目をつけられていた。

たまに沙織が来たかと思えば、まるで家畜をぶつように鞭で子供

達をいじめては笑って帰っていった。

それに抵抗でもしようとするれば、またしても男達に押さえつけられて殴られる、そんな日々の繰り返しだった。

やがて、星矢が八歳になった時、突然屋敷の子供達全員が聖闘士になるために世界中の修業地に行くように言われた。

星矢は聖闘士の証の聖衣を持ち帰ったら姉に会わせることを条件に、修業地であるギリシャの聖域へと旅立ったのだ。

しかし、修業を終えて帰って来た星矢を待っていたのは姉の星華は行方不明という事実だった。

ようやく帰って来た星矢にとってはその知らせはあまりに辛いものであった。

そして、姉の居所を捜してもらったために、不本意ながらも沙織の開催した銀河戦争に参加したのだった。

「…許してもらえとは思っていません……それでも、申し訳ありませんでした、星矢も他の皆にも…。」

そう言っただけで沙織は星矢達に地面に手をついて頭を下げた。

その姿を見た星矢はそれ以上何も言うことが出来なかった。

しばらくして、顔を上げた沙織は、再び星矢達に話し始めた。

「…そしてあの時、何故あなた達が聖闘士となるよう言われたのか…その訳を教えましょう。」

「俺達が聖闘士にさせられた理由？」

「ええ、そうです。お祖父様がどうしても、百人もの子供を引き取

ったのか不審に思いませんでしたか？」

「そ……それは……。」

確かにそのことを考えたことはある。

しかし、どうしてもそんな理由は思いつかなかった。

「あれは私が十三歳になった時のことです、その時もつすでにお祖父様は病気で、おそらく近いうちに自分が亡くなるだろうと思つてそのことを私に話したのかもしれない。」

こうして話されたことは驚くべき真実だった。

十三年前、ギリシャの聖域にて――

一人の男が夜の闇の中ゆっくりと歩いていた。

その顔は飾りのついた兜のようなマスクに覆われていて見えない。その身に纏うゆつたりとした長い法衣は男の全身を包み隠していた。

男が今歩いているのは、古のギリシャ文明を彷彿とさせる荘厳な神殿だった。

長い法衣が男の足音を消し去り誰にもその気配を気付かれることなく奥へと進んでゆく。

やがて男は神殿の最奥に辿り着いた。

見ると、その部屋の中心に置かれている石造りのベッドの上に、まだ生まれて間もないと思われる赤子が眠っている。

その姿を確認した男は、赤子の元へゆっくりと静かに近づいていき、その懐から黄金に輝く短剣を取り出した。

そして、赤子の頭の上で短剣を振りかぶり、その首をめがけて刃を振り下ろす……

「教皇！何をなさるおつもりか！？」

夜の神殿を包む静寂を破り、その部屋に響き渡る声に男の手が止まった。

そして振り返ると、そこに立つのは黄金聖衣を纏った男だった。

「貴様、アイオロスか……。すぐにここから去れ……。これは命令だ。」

「教皇、あなたこそアテナの元から離れよ！一体自分が何をなさっているのか分かっているのですか！？」

教皇と呼ばれた男に向かってアイオロスは言った。

彼は目の前で起きていることが信じられなかった。

教皇は二百年以上前の聖戦を生き残った伝説の聖闘士である。

その教皇が、ついこの間地上に転生したばかりの女神アテナを短剣で刺し殺そうとしている。

どうするべきか一瞬迷って、アイオロスは赤子のアテナの元へ駆け寄った。

「教皇、今のあなたは異常だ。ここでアテナから離れる訳にはいかない。」

アテナの前で教皇に立ちはだかるアイオロスに教皇は無言で拳を

放った。

「!?!」

いきなりの攻撃にアイオロスはアテナの前から弾き飛ばされた。だがすぐさま立ち上がると、教皇と対峙した。

「…なんという拳だ…！教皇、本気でアテナを殺そうというのか！？ならば許せん!!」

激昂するアイオロスに教皇は再び拳を向けるが、その拳は受け止められてしまった。

アイオロスと教皇の間で二人の拳が衝突し、その威力が迸り、周囲の石畳が砕けていく。

「アイオロス、私の邪魔をするなら貴様から殺すまでだ！」

「黙れ！聖闘士でありながらアテナに刃を向けるとは！あなたはそれでも教皇か！」

拳の激突の中アイオロスの小宇宙がわずかに教皇を上回り、教皇はその場から後ずさりした。

そして、今までその顔を覆っていたマスクが大きな音をたてて地面に落ちた。

「教皇……？いや、お前は!!」

「見たな…この顔を見たからには生かしておけん！」

突如教皇の小宇宙が大きく高まりアテナもろとも空間を覆い尽く

した。

アイオロスはその変貌と教皇の正体に驚きながらも、アテナを守るべくすぐに赤子を抱いてその場から逃げ出した。

「逃がしはせんぞ、アイオロス…！アテナと共に宇宙の塵となれ！ギャラクシアンエクスプロージョン…！！！」

背後から迫る巨大な爆発からアテナを守ろうと、咄嗟にその身を盾とするアイオロスだったが、黄金聖衣の上からでも下手に受ければ命を落とそうかという程の威力に全身から血が吹き出していた。

目の前が赤く染まりながらも、頭の中にはたったひとつのことが浮かんでいた。

……アテナを…安全な地へお連れしなければ……

その一念で動かぬ身体に鞭打って、教皇のいる神殿から命からがら脱出した。

一方教皇は、ギャラクシアンエクスプロージョンの余波が消え去った跡にアイオロス達の死体が見つからないのを見て、神殿に仕える従者を呼び出した。

「アイオロスがアテナを連れ去ろうと謀叛を起こした！すぐに黄金聖闘士の追手を出せ！」

……アテナを庇ってギャラクシアンエクスプロージョンをまともに受けたはず、奴の小宇宙を感じる限り動きも遅いし深手を負ったのは間違いない…なら、黄金聖闘士の一人でも倒せるか……

「今から私は瞑想に入る。誰も部屋には入れるな。」

そう従者に告げると、教皇は扉の奥へと消えていった。

その頃アイオロスは、なんとか聖域の追手をかわしながら、外界まであと少しという所まで来ていた。

自分が謀叛人とされても、追ってくる雑兵達を殺してしまう訳にはいかないと、なるべく追手とは闘わないように逃げてきたのだが、そのせいで身体には疲労が大分たまっていた。

血を流し過ぎたためなのか、意識が途絶えそうになるが、それでも前へ前へと進んでいった。

そうして、ようやく追手を振り切ったかと安心しかけたアイオロスの背後から、凄まじい小宇宙が襲ってきた。

まるで触れるもの全てを切り裂くような小宇宙を発していたのは、まだ十歳ほどの少年だった。

しかし、その少年の実力は彼が纏っている黄金聖衣からも窺える。少年もまたアテナに仕える最強の十二人、黄金聖闘士の一人なのだ。

「…アイオロス、俺はあなたを尊敬していた、こんなことになるとは残念だ。」

「待て、シユラ！私の話を聞いてくれ！」

追手となった黄金聖闘士のシユラは、何も言わずに手刀を放った。少年とはいえれつきとした黄金聖闘士、その手刀は大地を切り裂いてアイオロスに迫った。

もはや黄金聖闘士と闘う力など残っていなかったアイオロスは、

その斬撃といつても過言ではない威力の一撃を自身はわずかにくらないながらもアテナだけは無傷のままかわして、崖から海へと飛び込んだ。

ギリシヤ郊外のとある海岸で城戸光政は困惑していた。

偶々夜の散歩で海辺を歩いていたら、胸に幼い赤子を抱えその背に大きな箱を背負った男が倒れていた。

良く見ると、男の全身は傷だらけで、生きているのか分からないほどの血を流していた。

だが、胸に抱えた赤子だけはどこにも怪我をした様子は無く安らかに眠っているようだ。

人を呼ぶか…!?

光政の頭にその考えがよぎったが、実行に移す前に目の前の男が目を覚ました。

「…ここは…!？」

目を覚ましたアイオロスに光政が現在地を教えると、アイオロスは少しほっとした様子で光政に言った。

「私は聖闘士のアイオロスという者だ…突然で済まないが…どうか、この子を守ってやってはくれないか…この子はやがて起こる冥王との聖戦で地上を守るために遣わされたアテナなのだ…。私はこの通りでもうこの子を守ることが出来ないかもしれない。この子が

いなければ地上は冥王に支配されてしまう……頼む……！」

アイオロスの血を吐くような願いに、光政は心を打たれた。

そして彼は、迷いに迷った末に世界中の自分の子供達を聖闘士としてアテナを守ることを誓ったのだった。

話を聞いた星矢達は、目を丸くして言った。

「そ……それじゃあまさか、お嬢さんがそのアテナだっていうのか……!？」

「そのとおりです。私が十三年前に聖域から連れ出されたアテナです。」

そう言つと、沙織……いや、アテナの身体からとてつもなく巨大な小宇宙が放たれた。

その大きさは白銀聖闘士はおろか黄金聖闘士でさえ足元にも及ばない、全世界どころか宇宙すら包み込むような、まさに神としか言い様のない小宇宙だった。

アテナの小宇宙を見た星矢達は悟った……彼女が本当に彼ら聖闘士が守るべき女神アテナであることを……。

その頃、白銀聖闘士と執事服の男との闘いは続いていた。
しかし、それは闘いというにはあまりに奇妙だった。白銀聖闘士達は必死で男に攻撃している、一方男はその場を一步も動いていないように見えない、にもかかわらず彼の身体には傷ひとつなかった。

「なんだ！お前は何者だ！」

ついにしびれを切らして白銀聖闘士の一人が尋ねた。
すると男は呟くように言った。

「私の名はアイオロス………サジタリアス射手座のアイオロスだ……！」

第四話 真実（後書き）

アイオロス復活！！

といっても、別に死んでいた訳ではないですが。ようやく主役の登場です。この作品でのアイオロスはどちらかといえばエピGに近いのかな？原作では出番が少なすぎてわかりません。彼はアテナを託した後、光政に助けられて十三年間城戸家の執事兼居候としてアテナを守っていたと、そんな感じで。

第五話 黄金聖闘士

「そ……それじゃあ、あの人が十三年前にアテナを救ったアイオロスだっていうのか……!？」

「ええ、そうです。私をお祖父様に託して倒れたアイオロスを、お祖父様はすぐに病院へと運んだそうです。そのおかげで彼は一命を取り留めたのです。その後、彼は表向きは城戸家に仕える執事として、私のことを今までずっと見守ってくれていたのです。私はそのことをお祖父様が亡くなってアテナとして目覚めた時に、彼の口から聞きました。」

思いがけない事実には、星矢達は未だ白銀聖闘士達と闘っているアイオロスの方へと目を向けた。

そこで、星矢はふと気付いた。

あれは、星矢が聖闘士となって日本へ帰って来て、聖衣を預けるためにアテナの元を訪れた時だった。

その時アテナの傍に居た見慣れない男が、アイオロスだったのだ。普段アテナの傍で護衛をしているのは、禿げ頭の大男・辰巳だったから、いつもと違っていたことが印象に残っていた。

改めて見ると、白銀聖闘士達が全力の攻撃を繰り返しているにもかかわらず、彼の身体に触れることも出来ていない……やはり本当に黄金聖闘士なのか…。

そう思った星矢達は、再び闘いに加わりようと、アイオロスの方へ行こうとしたが、アテナがそれを押し留めた。

「あなた達が加勢に行く必要はありませんよ。アイオロスのことなら心配は要りません、それにあなた達は傷付きすぎています。今、

闘えば命を落としかねません。」

「でも…アイオロスは聖衣も纏っていないんだ。いくら黄金聖闘士だからって……」

星矢が言い終わる前に、戦場から轟音が響いてきた。

「ハア……ハア……まさか、こんなところにいたとは思わなかったぞ。かつてアテナを連れ去ろうとした逆賊アイオロス！」

荒い息を吐きながら、白銀聖闘士達は口々にそう言った。今まで放った攻撃は全てかわされているが、その闘志は些かも鈍ってはいない。

そんな彼らに対して、息ひとつ乱さずに佇むアイオロスはきっぱりと言った。

「…お前達には勝ち目はない。潔くここで退くがいい。」

「バカな…！逆賊の貴様を前にして退けるか！」

そう言っつて拳を放つも、ことごとく外れてしまう。

取り囲んでいる状態で三人全員で攻撃しているにもかかわらずだ。さらに異常なことに、アイオロスはまるでその攻撃を避けているようには見えない。

どちらかといえば、避けているというより攻撃がすり抜けていると表現したほうがいいだろう。

そしてついに白銀聖闘士の攻撃が止まった。

「……どうして……攻撃が当たらない……！」

「知らないならば教えてやろう。おおよそ聖闘士の力というのは纏う聖衣によって決まっている。青銅聖闘士ならばせいぜいマツハ1、白銀聖闘士でもその速さはマツハ2〜5といったところだ。だが！我々黄金聖闘士は秒速30万km、マツハにして88万以上、そして一秒間に地球七周半という光速の動きを体得しているのだ！」

「……光速だと!？」

「そうだ、そして光速の前では、お前達の音速拳など八工の動きに等しい、ただ身体を緩やかに動かしてかわすだけだ。」

そう、アイオロスは白銀聖闘士の攻撃を避けていたのだ。

……だが、あまりに速すぎるその動きは聖闘士といえども捉えることは出来ず、攻撃がすり抜けているように見えていたのだ。

自分達と相手の力の差がそれほどまでに隔絶していると、白銀聖闘士達はようやく気が付いた。

しかし、彼らにも教皇の勅命を受けたという事実と、聖闘士としての誇りがある。

故に、彼らにその場から退くという選択は存在しなかった。

だからこそ、白銀聖闘士達は再び意を決して、それぞれの必殺技を繰り出した。

「受ける！カイトス スパウティング ボンバー!!」

三人の白銀聖闘士の中でも最も大柄な男が、先陣を切った。

彼の名は白鯨星座のモーゼス。

その巨体から繰り出される受身の不可能な投げ技がアイオロスに襲いかかる。

今までの拳による攻撃と違い投げ技であることから、それまでのようにすり抜けるかのような回避は無理だと見極め、敢えて相手の技に飛び込むようにしてその技をまともに受けることを防ごうとした。

一見そのまま投げられた様子ではあった。

がしかし、本来は一度投げられると受身を取ることも出来ずに、延々と殴られてはまた空高く投げられ、という無限ループを繰り返すその技を、アイオロスは空中高く放り投げられながらも体勢を崩すことなく耐えきっていた。

だがここでアイオロスは自身の油断に気が付いた、いくら黄金聖闘士といえども何も無い空中ではただ落下していくのを防ぐことは出来ない。

……しまった……この瞬間を狙われたらまともに攻撃を受けしま
う！……

そう思った瞬間、アイオロスは急いで攻撃を防ぐべく小宇宙を高めた。

そしてその考えは当たっていた……落下する最中に、二人目の白銀聖闘士が攻撃を仕掛けてきたのだ。

白銀聖闘士ケンタウルス星座のバベルは、相手が落下している今が必殺のタイミングとみて、己の音速拳と空気との摩擦熱により発生させた灼熱の炎を落下中で身動きの取れないアイオロスに向かって叩きつけた。

「フォーティアルフィフトウラ！」

地獄の業火を思わせる、空間を覆い尽くすかのような凄まじい炎

だった。

攻撃の直前、なんとか体勢を整えることは成功したが、今度はやはり回避も防御も不可能だった。

とてつもない炎が彼の身体を焼き尽くしていく。

そして、地獄の炎に包まれながら、アイオロスはようやく地面に着地した。

彼の服は焼け落ちてボロボロだったが、彼自身は小宇宙を高めていたおかげで重傷ではない。

しかしそれでもその身体にはそれなりの火傷の傷が見てとれた。

さらにそこに畳み掛けるように三人目がきた。

自身の聖衣から取り出したのか、なにやら盾を掲げているとその盾から強烈な光が放たれた。

一瞬目が眩んだが、それだけで大したことはないと気を取り直して辺りを見回したところで、アイオロスは気付いた。

何と！己の身体の半分近く、正確には下半身のほぼ全てが動かぬ石と化していたのだ。

先程の盾は、ペルセウス星座の聖衣に装備されているもので、盾には伝説の魔物メデューサの顔が描かれている。

そしてその目から発せられる光線を浴びると全身が石化するといふ恐るべき力が込められているのだ。

「なるほど……黄金聖闘士というだけのことはある。このアルゴルの持つメデューサの盾の光をまともに受けて半身の石化に留めるとはお前が初めてだ……。だが、これで終わりだ！もはやお前に光速の動きは出来まい！」

そう言っつてペルセウス星座のアルゴルは、アイオロスに向かって音速の拳を放った。

他の二人も、それに合わせてそれぞれが拳を繰り出した。

音速拳が迫るなか、下半身が石と化していて動けないアイオロス

は、そのまま攻撃を受ける訳にもいかず、ついに攻撃に転じた。

しかし、それはとても攻撃とは思えぬ構えだった。

指を一本、ただそれだけ……アイオロスが指を一本軽く上げたかと思うと、放たれていた白銀聖闘士達の拳はことごとく撃ち落とされていった。

わずかに彼の指が光ったことにさえ気が付いた者がいるかどうか、まさしく一瞬の出来事だった。

そして次に再びアイオロスの指が光った瞬間、白銀聖闘士達は全員が大地に叩き伏せられていた。

予想だにしない反撃に白銀聖闘士達は驚いたが幸いにして、身体にも聖衣にも傷は負っていない。

しかし、攻撃の瞬間はおろかそれを受けた瞬間すら認識させない黄金聖闘士の底知れぬ力に三人全員が戦慄していた。

だが、ここで再びアルゴルが口を開いた。

「確かに奴の攻撃は俺達には見切れない。だが、俺達も奴の攻撃にはダメージを受けてはいない……もう一度全員で総攻撃だ！」

「フム……それはそうだ。いずれにせよ、奴が動けない内に攻撃を仕掛けるしかないな。あの光速拳ならたとえくらつてもやられる心配はないだろう。」

「よし！今度こそ奴の息の根を止めてやる！」

そう決意した白銀聖闘士達は、未だ動けぬアイオロスに三人がかりで必殺技を繰り出した。

「カイトス スパウディング ボンバー！！」

「フォーティアルフィフトラ！！」

「ラスアルグールゴルゴニオ!!!」

……しかし、彼らは知らなかった、敵であるアイオロスは未だに本気で彼らに拳を放っていたのではないということ……指でなく拳で光速拳を放てば彼らを絶命させることも容易に出来たということ……そもそもアイオロスには最初から白銀聖闘士の命まで取るつもりはなかった、だからこそ始めの内は敢えて反撃せずにその力の差を見せつけ、戦意を奪おうとしたのだ。

彼にとっては、たとえ逆賊と罵られようとも、同じ聖闘士である彼らを殺してしまうようなことはなるべく避けたかった。

そして、出来ることなら彼らに聖域へアテナが覚醒したことを伝えてもらうために、無理に攻撃をかけようとはしなかったのだ。

彼にとつての真の敵とは聖域に潜むあの男なのだから…。

だがしかし、目の前の状況ではともそも言うてはいられない。覚悟を決めたアイオロスは、白銀聖闘士達が迫ってくる前で静かに己の小宇宙を高めていった。

小宇宙が高まるにつれてアイオロスの周囲に黄金に輝くオーラが満ち溢れてゆく。

そしてついに、高まる小宇宙が下半身の石化を打ち破った！

「燃え上がれ我が小宇宙！アトミック・サンダーボルト!!!!」

その瞬間、白銀聖闘士達の視界は黄金の光に包まれた…。

「どうやらあっちも決着がつきそうだね…。」

魔鈴は目の前のアステリオンにそう告げた。

アステリオンも苦々しく仲間達の方へとわずかに目をやって、魔鈴に視線を戻した。

彼は今までのことを思い返していた。

……聖域から命令を受けた時は、楽な任務のはずだった、青銅聖闘士五人に対して白銀聖闘士が六人も向かうのだ、あっさり処刑を完了してすぐに聖域に帰れるものと思っていた。

ところが、いざ蓋を開けてみると、真っ先に青銅聖闘士に闘いを挑んだミスティは死亡、次の魔鈴は寝返り、拳げ句のはてには黄金聖闘士が救援に駆けつける。

目まぐるしい状況の変化に、アステリオンは憔悴しきっていた。せめて自分だけでもこの場から離脱して、聖域に報告すべきかとも思ったが、目の前の魔鈴はそれをさせてくれるほど甘い相手ではない。

少なくとも魔鈴を倒さねば聖域へ戻ることも出来ないだろう。

こうなれば一刻も早く魔鈴を倒し、聖域に帰還するしかない、その気を取り直してアステリオンは魔鈴に構えた。

そして、再び音速拳の応酬が始まった。

しかし、今度の撃ち合いは均衡状態とはならなかった。

アステリオンがその顔を苦痛に歪め、全体的に圧されている。

「…バ……バカな……！心が……魔鈴の心が読めん！」

そう、先程から再びサトリの法を使っているアステリオンだが、魔鈴の動きを読むはずが、まるでその動きが読めなくなったのだ。

突然サトリの法が通用しなくなり、焦って攻撃するもそんな攻撃は魔鈴には届かない、逆に魔鈴の攻撃の餌食となってしまう。

「クツ……魔鈴め、心を閉じているのか……これでは動きが読め

ないはずだ……」

アステリオンはそう呟き、多少の攻撃は受ける覚悟で深く深く瞑想し始めた。

サトリの法は、アステリオンの集中力の深さによってその効果を高めるのだ。

そして、ついに……

……魔鈴は……右だ……！……

深い瞑想によって再び魔鈴の動きを捉えることに成功したアステリオンは、ここぞとばかりに全力の攻撃を仕掛けた。

「ゴーストミリオンアタック……！」

マツハ2を越える速度で、まるで分身でもしているかのようになり、空に無数に現れたアステリオンが魔鈴に向かって一気に攻撃に出る。サトリの法でその位置は把握している、絶対に回避は不可能……！なはずだった。

……魔鈴の蹴りがすぐ後ろから迫ってきていることにアステリオンが気付いた時にはもう遅かった。

「……かかったね、アステリオン！イーグル・トゥ・フラッシュ……！……！」

こうして、己の最高速度をはるかに上回る速さの蹴りを背後から受けたアステリオンは……地に墜ちた。

第五話 黄金聖闘士（後書き）

白銀聖闘士達は頑張った……

アルゴルの盾はあまりにあれなので少し効果を落としましたが、それであそこまでやれば十分でしょう。

さて、今回登場した記念すべきアイオロスの必殺技第一号 アトミック・サンダーボルト一応どんな技なのか設定しておきます。

なにしろ原作に出てこない技なので……

作者は聖闘士星矢のアニメを見たことはないので、詳しくはわかりませんがどうやらアニメでは登場するようです。

調べてみると、主な特徴は次の二つ

- 1．いくつかの光球が飛んでいく
- 2．ライトニングボルトとプラズマの元になった

以上のことからアトミック・サンダーボルトはボルトとプラズマを足して2で割ったような技ということにします。

簡単に言うと光球ひとつひとつの威力はボルトに劣るが、何発か同

時に放てると、そつゆじつまでお願いします。

第六話　そして聖域へ……

今、目の前に広がる海岸の様子はまさに、聖闘士同士の闘い、それはこれほどまでに凄まじいのかという見本のような惨状だった。

元は普通の砂浜であったと思われるが、戦闘の衝撃でその大地は底が見えないほどにひび割れ、かろうじて原型を留めている岩の残骸がほんの少し前までそこに岩場があったことを教えている。

そんな場所に立つ者達こそ、こんな事態を引き起こした張本人達である。

しかし、未だ自分の足で立っているとはいえ、彼らも一人の少女を除き皆一様に傷を負っていて、彼らの足元に倒れている男達とその様子はさして変わりはない。

星矢達の纏っている聖衣には縦横無尽に亀裂が走り、今にも崩れ落ちそうになっているのをギリギリでその型を留めていた。

しかし、その中でただ一人聖衣も纏っていないアイオロスが、最も怪我の少ないようであった。

彼の服の上半身はほとんど焼け焦げていて、もはや服としての機能を果たしていないが、身体に負った傷自体はそれほど酷くはない。むしろ、聖衣を纏っている星矢達の方が、傷ははるかに深い。

というのも、彼らは白銀聖闘士と闘う前から既に、強敵と死闘を繰り返していたからで、その後すぐに白銀聖闘士と連戦になってしまったからなのだ。

特にミスティと一対一で闘った星矢は、一人では立っていられないほどに消耗していた。

頭部に大きなダメージを受け、放っておけば失明に至るほどの重傷だったのだ。

その他のほとんどの白銀聖闘士はアイオロスと魔鈴が倒してくれただが、その闘いの余波でさえも彼らの傷ついた身体にはこたえるも

のだった。

ようやく追手の白銀聖闘士を一掃し、これからすぐに星矢達に適切な治療を施さねばならないというところで、魔鈴が口を開いた。

「あたしはこの辺で失礼させてもらうよ。誰か一人はこの結果を聖域に伝えないと不味いからね。」

「…それで、あなたは大丈夫なのですか？ひょっとしたら教皇に疑念を持たれるかも知れません。」

「なーに心配には及びませんよ。それに、教皇がアテナが日本に居たことを知ったら到底それどころじゃないだろうよ。」

と、そこで一旦口を閉じて足元に横たわる白銀聖闘士達に目をやった。

「…それに、こいつらもいることだしね。」

見ると、白銀聖闘士達が全員目を覚まそうとしていた。

「…俺達は、生きているのか…？」

白銀聖闘士を率いていたアステリオンが、かすかな声で言った。

地面に落ちた衝撃からか、立つことは出来ないようだが、その目は意外にしっかりしていた。

「…そうだ…お前達、アテナに感謝するんだな…。」

「ア…アテナだと！本当に、その女がアテナだというのか！？」

「そのとおりだ。お前も感じるだろう、アテナの持つ偉大な小宇宙を……。」

アイオロスがそう言うと、他の白銀聖闘士達も目を覚ましてきた。アイオロスにやられたアルゴル達も、自分達が未だ生きていることに驚いていた。

覚えている最後の瞬間、三人同時に繰り出した技は、アイオロスの放った光速の拳をわずかに止めることも出来ず瞬時に打ち破られた。

相手の力を見誤ったことを後悔する間もなく、閃光の速さで迫る黄金の光に身体を撃ち抜かれた衝撃が今でも身体に残っている。

そして自分の身体を見る限りでは、白銀聖衣も完膚無きまでに粉碎されており、その状態でとてもあの光速拳に耐えられたとは思えない。

ならば何故……？ そう思ったところで、全身に不思議な暖かみのある小宇宙を感じた。

「この……小宇宙は……俺達を、護ってくれたのか……？」

ようやく彼らは気が付いた。

自分達を護るように大きな小宇宙が身を包んでいることに。

そしてその小宇宙は目前のアテナを名乗る少女から発せられていた。

とても雄大で暖かく慈愛に満ちたその小宇宙は、彼らに彼女が真正銘のアテナであることを確信させるには十分なものだった。

いつの間にか彼らは皆アテナに向かって頭を下げていた。

知らなかったとはいえ、アテナに対して拳を向けていたかもしれないと思うと、そうせずにはいられなかったのだ。

そして白銀聖闘士達が揃って罪を乞おうとした時、アテナが彼らに話しかけた。

「頭を上げて下さい。これはあなた達が命令を受けて行なったことです。私はそれを咎めるつもりはありません。それよりも、あなた達には私達のことを聖域へ、教皇へと伝えて欲しいのです。私がアイオロスと共に聖域に向かうということを……！」

「……わかりました。し……しかし、アイオロスは……」

そう言った白銀聖闘士達は、アイオロスに対して疑いの目を向けていた。

アテナと共にいるからといって、長い間聖域で逆賊だと教えられてきたのだ。

そう易々とは信じられないようであった。

だが、そんな彼らにアテナは肅然と言った。

「今の彼を見ればお分かりでしょう。彼は決して、逆賊などではありません。聖域ですつと信じられてきたことこそが誤りだったのです。ですから、その心配は無用です。わかりましたか？」

「……わかりました。アテナの御言葉に従います。」

「それでは私達のことは宜しく教皇に伝えておいて下さい。いいですね。」

「……ハハツ……！」

こうして白銀聖闘士達は、アテナに忠誠を誓って聖域へと帰っていったのだった。

そして、聖域にて

一人の男が教皇の間へと向かっていった。

身につけているのは聖衣ではなく、聖域において正式な聖闘士ではない者達、所謂雑兵達が着ている雑兵服だが、その目には強い光が宿っている。

彼の名はアイオリア。

れっきとした黄金聖闘士である。

彼の纏うべき聖衣の名は獅子座^{シオ}、その聖衣に恥じぬ勇猛な男で、聖域では仁と勇を備えた聖闘士として雑兵に至るまで慕われている。

そのアイオリアが現在教皇の間に向かっているのは、教皇から呼び出しの命令を受けたからであった。

至急の用と言われたので、普段行なっている聖闘士候補生達の修業を他の聖闘士に任せて教皇の元へと向かっていた。

そして、教皇の間に辿り着いたアイオリアは、自分の他にも教皇に呼ばれた者がいることに気が付いた。

既に聖衣を纏って教皇の傍に立つ男、彼の名は……

「久しぶりだな。ミロ！」

「ああ、そうだな。俺達黄金聖闘士が顔を合わせることなんて珍しいからな、アイオリア。」

そこにいたのはアイオリアと同格の黄金聖闘士、^{スコピオン}蠍座のミロだった。

癖のある長髪を腰のあたりまで伸ばしているミロは、聖域でも明るい性格で知られ、誰とでも気さくに話すのでアイオリアと並んで

雑兵や下級の聖闘士にも名が知れている。

一般に黄金聖闘士と言えば、聖域でもその身分は青銅聖闘士とは比べ物にならない。

黄金聖闘士はそれぞれが守護すべき宮を持っているが、中には自分の守護宮から外に出ない者や、聖域に常駐していない者もいたりして、あまり名前が知られていない黄金聖闘士というのも存在するのだ。

そんな風であるから、黄金聖闘士同士の繋がりというのも様々で、顔を合わせるのが珍しいというのもあながち嘘ではない。

そんな中でも、ミロとアイオリアは割と親しい方である。

ようやく二人が揃ったので、教皇は静かに口を開いた。

「フム……聖域内で黄金聖闘士同士が出会うことも少ないからな……。それはそうと、今日はお前達に話がある。」

教皇からの直接の命令ということで、二人は顔を引き締めた。

「先日、日本で青銅聖闘士共が私闘をしたというのは聞いているだろう。そこで、私は掟を破った連中を処罰するために白銀聖闘士を派遣したのだ。」

「その話なら聞いています。それがどうかしたのですか？」

アイオリアが聞き返した。

確かに、その話は数日前に聖域でも噂になっていた。

白銀聖闘士が派遣されたと聞いてからしばらく経っているが、その後のことが聞こえてこないので不審には思っていた。

しかし、教皇の話はそんな二人を大いに驚かせた。

「全滅！？青銅聖闘士相手に白銀聖闘士が全滅したと！？」

ミロもにはわかには信じられなかった。

普通に考えれば白銀聖闘士の実力は青銅聖闘士の比ではない。まして、白銀聖闘士の方が討伐される青銅聖闘士よりも数が多かったのだ。

なのに、白銀聖闘士が全滅……相手の青銅聖闘士とはそれほどまでに強いのか、とミロは素直に驚いた。

「話は最後まで聞け、ミロ。全滅した訳ではない。命を落としたのは一人だけだ。もっとも、他の全員も敗れたそうだがな。」

教皇は二人に諭すように言った。

教皇もこの報告を聞いた時は、まず耳を疑った。

しかし、段々と話を聞いていくにつれて、驚きよりも戦慄が走った。

確かに報告の通りなら、白銀聖闘士達が全員敗れたのも頷ける。だが、それは教皇に十三年前の出来事を思い出させることだった。

……アイオロスが生きていた……アテナも一緒にいるだと……!?

即座に教皇は報告してきた白銀聖闘士達に拳を放ち、この話が聖域に広まらないよう彼らの記憶を消去した。

そして、アテナ達が聖域に乗り込んでくる前にどうにかしようと黄金聖闘士を二人呼び出したのだった。

「かの逆賊アイオロスが、日本で生きていたようなのだ。」

「……!」

まさに晴天の霹靂と言うべきか、十三年前にアテナを連れ去ろうとして殺されたアイオロスが生きていたというのだ。

特にアイオリアが受けた衝撃は大きかった……それも当然だろう、なにしろ彼はアイオロスの実の弟だ。

それに、聖域では十三年前に逆賊として討伐されたとずっと信じられてきたのだ。

そのせいで、かつては逆賊の弟として聖域の者達に謂れの無い蔑みを受けたこともある。

それを覆すために、彼は今まで聖域から下された指令を全力で遂行してきた、そのおかげで段々と人々の彼を見る目が変わっていったのだ。

その当時、アイオリアは、ずっと慕っていたアイオロスがそんな凶行を行ったとは到底思えなかったが、周囲からの冷たい視線に耐えて兄を信じ続けるには彼はまだ幼すぎた。

そしてやがて彼もまた、自分の兄が逆賊だったのだと思うようになっていった。

「…教皇、それは真ですか。ならば、このアイオリアに逆賊討伐の御命令を！」

「まだ事実と確定した訳ではない……が、事実である可能性は高いだろう。そこでだ、この度はお前達二人に日本に赴いてもらう。」

「二人！？天下の黄金聖闘士を一度に二人も派遣しようというのですか?!」

「当然だ、三口よ。なにしろ相手も黄金聖闘士かもしれないのだ、万全を期すためにな……。」

「わかりました。私は直ぐに日本へと向かいます。」

そう言い放つと、アイオリアは教皇の間を退出していった。後には不機嫌そうな顔をしたミロと、教皇だけが取り残された。

「…よろしいのですか、アイオリアはアイオロスの弟。裏切るかもしれませんぞ。」

「その心配は無用だ。奴もその件で苦い思いをしている。それに万が一寝返ったとしても好都合だ……。」

「は？」

「まあいい。お前も直ぐに日本へと発つのだ。わかったな。」

そう言つて教皇もその場を離れていった。

ミロはその言葉に、内心で最近の教皇に不審な行動の噂があることを思い出していた。

なんでも、聖域の周辺で最近よく死体が見つかるというのだ。

そして、教皇に仕えているはずの従者が、突然行方不明になっているとも聞く。

……あの方にも用心せねばな……

そして、ようやくミロも教皇の間を後にした。

そして、日本

現在、アイオロスとアテナは、共に星矢達が入院している病院に居た。

一度撃退したとはいえ、星矢達の身体が治るまでは、再び追手が襲いかかってこないようにと見張りをしているのだ。

星矢達は重傷だったが、幸いにも命に別状はなく、数日で退院出来るようだ。

…それにしても、岩を砕くような攻撃を全身に受けて、数日の入院で済むとはやはり聖闘士という存在は常識をはるかに超えていた。星矢達も、最初病院に運び込まれた時はそれまでの闘いの緊張の糸が切れたのか、意識を失ってしまったが、次の日には既に皆目を覚ましていた。

そしてある日の深夜、アテナとアイオロスはこの病院に近づいて来る小宇宙を感じとっていた。

アイオロスは近づいて来る小宇宙が二人分だけであることを確認して、様子を探るために病院を出た。

もし、ここにいる聖闘士やアテナを狙って病院内に攻め込んできたら、入院している他の一般人へも被害がでる可能性がある。

病院の前なら大きな広場があり、たとえ戦闘になっても気をつけなければ、一般人への被害は出さずに済むだろう。

そして外へ出たところで、小宇宙を放つ二人の男達が目に入った。

「アイオリア！それにミロ！」

そこに立っていたのは黄金聖衣を纏っている弟と、かつての仲間であった。

互いに互いの存在が信じられず、しばらくの間動けなかったが、やがてアイオリアが静かに近づいて来た。

「本当に生きていたのか……兄さん……」

「十三年前に処刑されたと聞かされた貴様がまさか生きていたとはな。」

そう言いながら、ミロも油断無くアイオロスとの距離を詰めてきている。

二人共黄金聖衣を纏っており、その雰囲気は未だ静けさを保っていたが、明らかに臨戦態勢だった。

アイオロスが、何か言おうと彼らに近づいて行こうとしたが、いきなり猛烈な勢いで吹き飛ばされた。

「覚悟するがいい……兄さん……いや、アイオロス。今こそ逆賊としてお前を討つ！」

先手を打って攻撃を仕掛けてきたのはアイオリアだった。

その顔にはアイオロスへの激しい敵意が浮かんでいる。

そして、さらに拳を繰り出そうとアイオロスの倒れる方向へと駆け出した。

ミロはその様子を後方から眺めている、どうやら二人同時に襲う気は無いようだ。

そして、未だに倒れ伏しているアイオロスに向かって、アイオリアが叫んだ。

「立て！止めを刺してやる！」

だが、アイオロスは立ち上がるうとはしなかった。

立ち上がらないのではない、立てなかったのだ。

先程の攻撃は別に光速拳ではない。

しかし、アイオリア達と違いアイオロスは聖衣を纏っていない、しかも不意討ちに近い攻撃だったせいでまともにくらっている。

そのダメージは決して、軽いものではなかった。だがいつまでも倒れてはいられない。

次の攻撃に備えながら、アイオロスはゆっくりと立ち上がった。

「グッ……アイオリア……私はお前達の敵ではない。」

「黙れ！聞く耳持たん！」

完全に対話を拒絶し、尚も攻撃を仕掛けてくる。

しかし、今度の攻撃がアイオロスを捉えることは出来なかった。

小宇宙を高めたアイオロスは、何とアイオリアの放った拳を受け止めたのだ。

そして、その威力が二人の中間地点でくすぶっている。

互いの小宇宙が拮抗し、このまま互角な状態で闘いが膠着するかと思われたが、くすぶっている拳の威力が段々とアイオロスの方へと近づいていく。

「……元黄金聖闘士とはいえ、聖衣も纏わず俺と闘えると思ったか！」

アイオリアの小宇宙はどんどん高まっていき、ついに押し切られたアイオロスは激しい小宇宙の衝撃に再び地面に叩きつけられた。

しかし、今度はさつきとは違いすぐに立ち上がる。

アイオロスの小宇宙も倒れる前よりもさらに大きく膨れ上がっていた。

アイオリアもそれに気が付いた。

そして、さらに高まっていく兄の小宇宙に背中に冷や汗が流れていくのを感じていた。

「確かに……もうお前は聖衣も無しに闘える相手じゃなかったな。」

「
そう言うとアイオロスはひたすら己の小宇宙を高めていく。
その巨大な小宇宙に、歴戦の勇士であるアイオリアでさえしばし
動くことも出来なかった。」

そして、ついに極限まで高まった小宇宙が弾けるように爆発した！
その瞬間、富士山の山麓から黄金の光が流星となって飛び立つの
が見えたという。

アイオロスの小宇宙に応じたかのように、空から金色の光が舞い
降りてくる。

それを見たアイオリアとミロは同時に驚きの声を上げた。

「あれは！サジタリアスの黄金聖衣！？」

「アイオロスの奴め……聖域から黄金聖衣を持ち出していたのか
！」

そして、オブジェ形態の聖衣がまるで、聖衣自体に意思があるか
のようにひとりでアイオロスの身体に装着された。

射手座サジタリアスのアイオロス、十三年振りに黄金聖衣を装着！

「いくぞアイオリア！」

「望むところだ！」

そして、二人同時に全力の光速拳を互いに叩き込む！

黄金聖衣を纏った者同士の激突は、その周囲に凄まじい衝撃を巻
き起こした。

下手な嵐に巻き込まれるよりもはるかに激しい小宇宙の奔流が、

二人の間から迸っている。

アイオリアとアイオロス、二人の拳の威力は互いの中間で完全に拮抗していた。

くすぶっている小宇宙は微動だにせず、さらに送り込まれていく二人の小宇宙によってどんどんその大きさを増してゆく。

「どうだ……再び中間でくすぶる小宇宙を押し切れるか！」

「黄金聖衣を纏ったことで、小宇宙がさらに増している……このままでは千日戦争サウザンドウォーズに陥ってしまうぞ……！」

千日戦争 それは、実力が等しい黄金聖闘士同士の闘いでは互いが互いに対して決め手が無い状態になってしまい、闘いが延々と千日間も続いてしまう現象のことだ。

この現象が起きると、互いに身動きが取れなくなってしまう。

それに、千日戦争になるほどに拮抗した力を持つ者同士が闘えば、二人共消滅してしまう可能性さえあるのだ。

しかし、だからといって力を抜くことも出来ない。

そんなことをすれば、それまでに溜まった小宇宙が一気に襲いかかってくる。

まさに、動くに動けない状況というわけだ。

だが、ここで二人はほぼ同時に動いた。

アイオロスにしてみれば、相手が二人もいる前ではまるく無防備となってしまう千日戦争を続ける訳にはいかない。

アイオリアにしてみても、相手が突っ込んでくる構えなのだ、そのままでしたら攻撃を溜まった小宇宙ごと受けてしまいかねない。

期せずして、二人は同じタイミングでそれぞれの必殺技を放った。

「アトミック・サンダーボルト……！」

「ライトニングボルト……！」

……アイオロスとアイオリアは兄弟だが、かつては師弟でもあった。

そんな二人であるから聖闘士としての闘法は基本的に似通っていて、どちらも主に光速拳による闘いを得意としている。

アイオリアのライトニングボルトも、元はといえばアイオロスの技アトミック・サンダーボルトから派生したようなものだ。

その二つが真っ向からぶつかり合い、深夜の病院前広場は修羅場と化した。

深く抉れた地面には、まるで爆弾の爆心地とも思える巨大なクレイターが出現していた。

その災害と言っていていいレベルの被害を生み出した原因の二人は、今どちらも地面に倒れている。

黄金聖闘士の全力の攻撃によって受ける衝撃は、最上位の聖衣である黄金聖衣でさえも貫く。

聖闘士とはいえ、身体そのものの強さは常人とそれほどの差は無いのだ。

もし一般人がこんな衝撃を受けたら、身体が粉々になってしまってもおかしくはない。

だが、小さな呻き声と共にまずアイオロスが立ち上がった。しかし、その様子は見るからに重傷でわずかな衝撃でさえ、今にも崩れ落ちてしまいそうだった。

そして、未だ倒れたままのアイオリアを横目に、ミロがアイオロスに立ちはだかる。

「…悪いがこのまま容赦無く討たせてもらうぞ。俺達は貴様と闘いに来たのではない。討つために来たのだからな。」

そう言ってアイオロスに拳を向けたその時、その場に声が響き渡った。

「お止めなさい、ミロ。」

そこにいたのは、病室から今の闘いを見て飛び出してきたアテナだった。

手にはいつもの杖を持ち、傷ついたアイオロスを庇いながらその場に割って入った。

だが、ミロはその言葉を意に介さず、真っ直ぐにアイオロスの方へと向かっていく。

「お前が城戸沙織だな。今回の件ではお前にも責任があるのだぞ。アイオロスを倒したら、その後でお前も教皇の元まで連れていく。分かったら邪魔をするな！」

そう言って激昂したミロは、アテナに対して攻撃を繰り出した。

「リストラクション!!!」

ミロの赤く爪を伸ばした指先が、アテナに向けられた。

次の瞬間放たれる指拳。

だが、それを止めたのはやはりアイオロスだった。

その顔はさつきまでとは違い、怒りに満ちていた。

「この愚か者が！聖闘士でありながらアテナに拳を向けるとは！」

たった今まで立つことも困難だったはずのアイオロスから、突如光速拳が放たれた。

瀕死の身体から放たれたとは思えない拳の威力に、ミロはたたらを踏んで後退しながらもアイオロスを睨み付けた。

「何だと！その女がアテナ！？ふざけるのもいい加減にしる！」
ミロにとって、それはアイオロスが自分をからかっているようにしか思えなかった。

なぜならアテナは既に聖域に降臨しているのだ。

その姿を見たことは無いが、教皇の口からそのことははっきりと伝えられていた。

それを信じるミロにとって、城戸沙織がアテナの名を騙るだけでも我慢ならないことであった。

だがしかし、そんなミロの心を覆すことが起きた。

なんと、一般人のはずの城戸沙織から小宇宙が発せられている。しかもその小宇宙の量は尋常ではなかった。

並みの聖闘士どころか黄金聖闘士でさえ太刀打ち出来ないほどのあまりにも巨大な小宇宙。

宇宙すら飲み込むような圧倒的な小宇宙に、ミロは信じがたい思いで口を開いた。

「ま……まさか、本当にアテナ……なのか…？」

「ええ、その通りです。」

微笑みながらそう言ったアテナに、ミロは一瞬呆けたような顔をしたが、すぐに射抜くような鋭い視線でアイオロス達に向き直った。

「ならばそれを証明して貰おう。もし真のアテナなら、この俺の拳を止めることさえ容易なはずだ！」

そう言って再びアテナに拳を向けるミロ。

アイオロスはそれを止めようとしたが、アテナがそれを遮った。

「分かりました。それであなたが納得するのであれば、敢えてその拳を受けましょう。」

「正気か！？俺の拳を受ければただでは済まないのだぞ！」

てつきり諦めると思っていたが、予想外の返事にミロは面食らった。

だが、目の前で笑ってそう答える少女についてに殺す気で拳を放つ覚悟を決めた。

「……いくぞ！スカーレット・ニードル！！！！！」

小宇宙が込められた指先から、アテナ目掛けて真紅の光線と化した指拳が放たれる。

そして……

「……何のつもりだ、アイオリア。」

アテナに向けて拳を放つ体勢のままミロの腕は、アイオリアの手によって止められていた。

ミロが力を込めて離そうとしても、腕を掴む手は振りほどけなかった。

「もうよせ、ミロ。黄金聖闘士たるものが、少女一人に大人気無いぞ。たとえ城戸沙織がアテナを騙っているのだとしても、それはやり過ぎだ。」

「何だと！」

「俺は目が覚めた。闘ってみてはつきりと分かった。今も兄さんの小宇宙には曇りは感じられん。真にアテナに背く逆賊ならば、いくら兄といえども小宇宙の穢れに気付かぬはずはない。そして城戸沙織がアテナであるというのも、真実だという気がする。」

アイオリアの顔からは憑き物が落ちたように、ついさっきまでの激しい敵意は微塵も感じられない。

それどころか、晴れ晴れとしているようにも見えた。

「お前は教皇を疑うのか？」

「そうかもしれない。だが俺は今、アテナが既に聖域にいるという教皇の言葉が信用できん。」

「アイオリア……分かってくれたか……。十三年間、苦勞をかけたな。」

「兄さん……」

アイオロスも、自分が去った後の弟のことはずっと気になっていたのだ。

しかし、今のアイオリアを見て聖闘士として立派に成長したことが良く分かる。

恐らくは、ずっと逆賊の弟として苦しんできたのだろう。

それでも、その心に歪みも無く育ってくれたのだ。

それだけでも、アイオロスの胸に熱くこみ上げてくるものがある。ようやく二人の間に肉親としての絆が甦った。

その様子を見ていたミロも、やや顔をしかめてはいたが、臨戦態勢を解いた。

これ以上闘う気が失せたのだろう。

そこにアテナが声をかけた。

「ミロ、そしてアイオリア……私達はこれから聖域の教皇に会いに行くつもりです。あなた達はこれからどうしますか？」

この言葉に二人は顔を見合わせた。

アイオリアはもうアイオロスと闘う気は無い。

ミロとしても、教皇に対する不信感が少しだけ高まっていた。

いずれにせよ、既に二人共この場でアイオロスやアテナに拳を向ける気は無いようであった。

「俺は一度聖域に戻る。そして、教皇に真意を問いただしてきます。」

「俺もだ。俺はまだあんたをアテナと認めた訳じゃないが、ここは大人しく引き下がろう。」

「そうか……だが無理はするなよ。そして、教皇には用心するんだ。あいつの正体は……いや、何でもなし。聖域に着いてから話そう。」

そして、日が昇り始める頃に二人の黄金聖闘士はその場から去っていった。

その後ろ姿を見ながらアテナは呟いた。

「いよいよですね、アイオロス。十三年前のあの日に決着をつけるに参りましょう。」

その言葉にアイオロスはそつと頷いた。

数日後、アテナを乗せた飛行機が遠くギリシャに向かって飛び立
った。

第六話 そして聖域へ……（後書き）

ちよつとした聖闘士についての考察（作中設定）〜その1〜

・聖闘士の移動速度について

さて、拙作中でのちよつとした設定について書いて見たいと思います。

聖闘士と言えばその速さが特徴の一つです、なにしろ最低マツ八黄金なら光速が当たり前、そんな世界です。

これを見れば例えばジャンプ作品中でも最速と言ってもいいと思います。

確かに聖闘士は速い、しかし、その速さはあくまで拳や蹴りの速さです。

実際聖闘士が移動するときの速さはどれぐらいなのでしょう。

まあ結論から言えば、恐らく一般人と大差ないと思われれます。

なぜなら、原作での十二宮編や冥界編で、星矢達や黄金の人達が十二宮を突破するとき皆走って移動しているからです。

十二宮はテレポートが封じられているだけなので、このことから考えれば、聖闘士の移動速度は一般人並と考えられます。

つまり黄金聖闘士だからといって本当に一秒で地球7周半出来る訳じゃないということですね。

では別の例を見てみましょう。

アイオリアと星矢が闘ったとき、アイオリアは黄金聖闘士は光速の動きを体得してると言いながら流星拳を《ゆっくりと》かわしました。

のちにアルデバランも同じ方法でかわしています。

この二つの例から言えば黄金なら光速移動も出来てしまいそうです。(そういえばエピGでは本当に十二宮を光速移動して一瞬で突破してました)

しかし、ここでアルデバランの例を見てみましょう。

最初彼は流星拳を遅いと言ってかわして見せました。

しかし、段々小宇宙が高まっていく星矢についにかわせなくなりま

す。
具体的には星矢の拳がビッグバンを起こしたとき、既にかわせなくなっています。

ここから光速移動の限界が見えてきます、つまりどこまでも光速移動が出来るならビッグバンでもかわせばいいのです、かわせなかつた以上はビッグバンの衝撃の範囲より遠くまではいけないということです。

こう考えると例えばギャラクシアンエクスプロージョンのような広範囲爆裂技が有効な理由がわかります。あれは多分光速移動で逃られない位の範囲を吹き飛ばすような技なのでしょう。だから明らかに光速拳ではないのに回避出来ないのです。

以上を踏まえてこの作品では黄金級なら光速移動は自分から半径数m以内では可能、それ以上は普通に走って移動するということになります。

第七話 牡羊座の助力(前書き)

ようやく十二宮編！

期待はしないで下さい。

第七話 牡羊座の助力

燦々と降り注ぐ太陽の光がギリシヤの町並みを照らしている。

観光地としても名高いこの地には、かつて隆盛を誇った古の時代の空気が、わずかに残る当時の建造物と共にそこはかたなく漂っている。

そして、そこに住む人々は現代でも神話に語られる世界を創造した神々への畏敬の念を忘れてはいない。

そして、そんなギリシヤの中でも特に異質な地が存在する。

なんでもそこでは、かつてこの地で広く信仰されていた戦女神アテナが今に至るまで神話の時代の建造物ごと伝えられているという。

古き神話の名残を色濃く残すのはここ聖域。サンクチュアリ

地元ギリシヤに住んでいる人々でさえも、その存在を半ば疑問視している幻の闘士 聖闘士 天空に輝く星座に己の宿命を託し、奇跡の業をもってアテナを守り悪を打ち倒すとされる希望の戦士、その聖闘士達の全てを統括するという教皇がこの地を治めている。

教皇とは全ての聖闘士を司るだけではなく、アテナ不在の折には自らの采配で独自に聖闘士を動かす権限を持つ。

その力をもつてすれば世界を掌握することが出来るほどの絶大な権力を持つが故に、代々教皇の座は先代の教皇が十二人の黄金聖闘士の中から最も仁・智・勇に優れた者を選び、その者に授けられるのだ。

そんな伝説が伝えられるこの聖域に、今、六名の男女が降り立った。

「とうとう着きましたね。あれが、全ての聖闘士達の総本山、教皇が治める聖域です。」

「そんなこと知ってるよ。なにせ聖域は俺の修業地だからね！」

山を切り崩して造られたような建物の群れが広がっている。

その中心地である聖域に向かって進みながら、アテナはその存在を周囲の者達に伝えようとしたが、すぐ横の星矢がそれを茶化すように陽気な声を上げた。

「そういえば、星矢はギリシャに送られたんだっただね。」

「なるほど……ならば、ここはお前の地元といったところか。」

そんな雑談をしながら進んでいくのは、先頭に黄金聖闘士のアイオロス、その後ろにアテナと四人の青銅聖闘士、星矢、瞬、紫龍、氷河が並び、計六名の集団だった。

星矢達は先の襲撃後数日で病院を退院し、真実を知ってそれなりに打ち解けたアテナの護衛として、教皇に会うために聖域へとやって来たのだ。

日本からは、グランド財団の自家用飛行機でギリシャまで飛んでいき、空港からは歩きで聖域に向かっている。

六人の先頭に立って進むアイオロスは雑談には加わらずに真っ直ぐ前を見据え、その足取りは迷うことなく聖域へと進んでいく。

星矢達とは違い、彼はアテナが教皇の元に向かうのはそう容易なことではないと考えていた。

何故なら彼はこのメンバーの中で最も聖域について良く知っている、自分達が立ち向かうものの大きさも……。

それに彼は、まず間違いなくこの先で出会うことになるであろう、かつての仲間達について思いを馳せていた。

彼は自分が聖域の者達にとって、アテナをさらおうとした最悪の逆賊だと思われることは十分に承知している。

直接アテナやアイオロスと会った者達には、少なからずそれが真実ではないということが伝わってくれたと思われるが、やはり大多数の者は自分のことを敵として襲いかかってくるかもしれない。

特に、彼と同格の黄金聖闘士達がどう出てくるか、それによって自身とアテナ達のこの先の命運が決まるだろう。

もしもの時には、自分が盾となってもアテナだけは守りきる、それほどの覚悟でアイオロスは聖域の最奥部、アテナ神像のすぐ前にある教皇の間へと階段状に続く十二宮が徐々に近づいてくるのを黙って見つめていた。

そして、ようやく六人は教皇の元へと続いている十二宮の先頭、白羊宮に辿り着いた。

アイオロスだけはこの宮の守護者を知っているため、まずは星矢達とアテナを残して一人で白羊宮へと近づいていった。

宮の中から伝わってくる守護者の小宇宙は、彼がかつてここに居た頃感じていたものとは比べ物にならない。

思えば彼もまた……………そう思っただけで自分の足元に目をやるアイオロスに、上から声が降ってきた。

「お久しぶりですね、アイオロス。」

アリエス 牡羊座の黄金聖衣を纏って白羊宮から出てきたのは、特徴的な眉

と長い紫髪の男、以前星矢達の聖衣を修復したジャミールのムウであった。

ムウは基本的に聖衣の修復師として知られているが、その正体は十二宮でも先頭に位置する白羊宮の守護者、牡羊座の黄金聖闘士である。

彼は普段ジャミールに住んでいて、聖域に常駐してはならず、聖衣の修復以外の目的で彼に会いに行く者は少ないため、その正体を知る者もそう多くはない。

実際、彼が牡羊座の黄金聖衣を受け継いでからはほとんど白羊宮は守護者不在の状況である。

そんなムウが今回の件でわざわざジャミールから出向いてきたことは、一体何を意味するのか、アイオロスは慎重にムウとの間合いを取った。

「そう構えることもありませんよ。私はあなた達と闘うつもりはありませんから。」

相手の意図を察したのか、ムウは穏やかな笑みを浮かべて己に戦闘の意思が無いことを伝えた。

その言葉に多少の戸惑いを隠せなかったが、意を決してアイオロスはムウに向かって尋ねることにした。

「私達はこれからアテナを連れて教皇の元へと向かうつもりだ。もしお前に闘う気が無いというのなら、何も言わずにこの白羊宮を通してくれないか？」

闘いは避けられるものであるならば、なるべく避けておきたい。

この先に待ち受ける黄金聖闘士達全員と闘って、その守護宮を突破していくなどいくらこちらにアテナがいるとはいえ、無謀過ぎる。恐らくアテナではなく教皇に忠誠を誓う聖闘士もいるだろう、そんな者達との戦闘は避けては通れない。

ならば、そうではない黄金聖闘士との闘いで力を消耗したくはな

いというのが正直なところだ。

沈黙の中でムウの返答を待つアイオロスの耳に、後ろにいる星矢達の方から慌てたような声が聞こえてきた。

アテナと星矢達は、アイオロスがまずは自分一人で白羊宮に向かうと言ったので、その手前の十二宮の入口付近で彼が戻ってくるのを待っていた。

アテナも黄金聖闘士も一緒に行動しているということに対する多少の楽観視が彼らの中にあつたことは否めないだろう。

結果的に、それが取り返しのつかない事態へと繋がってしまったのだ。

その者は十二宮の方を見つめる星矢達とは反対側の、町の方からやって来た。

全身を長いロープで覆い隠し、静かにアテナの元へ近づいていく。最初にそれに気付いたアテナが、近づいて来るその人影の方を向いた。

星矢達もつられてそちらの方向を向くと、その人物は既にアテナの近くまで迫っていた。

「ようこそ聖域にお越しくださいました。私は教皇の使いとして、あなた様を迎えに参った者でございます。」

どことなく慇懃な態度でアテナに話しかけてきた男は、アテナの周りに青銅聖闘士しかいないのを目の端で確認すると、いきなり口ロープを脱ぎ捨てて襲いかかってきた。

「教皇様の命令により、この矢座サジッタのトレミーがお前の命は貰った！ゆけ！ファントムアロー！！」

正体を現したのは、白銀聖闘士だった。トレミーが放つ拳の一つ一つが鋭い矢となって星矢達に襲いかかる。

だが不思議なことに、命中したと思っただけならその矢は星矢達の身体をすり抜けていく。

「な……なんだこの矢は！幻覚か！？」

幻の矢が身体を通り過ぎていくだけで、何のダメージも与えてこないことが、かえって星矢達の不安感を煽る。

しかし、その攻撃の真の意味を知ったのは、後ろに守っていたはずのアテナの呻き声が聞こえてきた時だった。

「さ……沙織さん！」

一番近くにいた瞬がそれに気付いた時には、もう既にトレミーの攻撃は完了していた。

アテナの左胸に小さな黄金の矢が突き刺さっていたのだ。

その後すぐに駆けつけたアイオロスがその矢を抜こうとするが、トレミーは笑いながら言い放った。

「ハッハッハ！残念だったなアイオロス。その矢は俺の矢座の聖衣に装備されているもので全ての聖衣を従える教皇様の力でしかその矢は抜けんのだ！」

「何だと！？」

すぐにアイオロスは矢を抜こうと掴んでいた手を放してトレミーを睨み付けた。

そして、次の瞬間聖域のほぼ中心にあり、聖域内のどこからでも見える十二宮を模した火時計に突如火が灯った。

「そして、その矢はあの火時計の火が消えるまでの約十二時間で完全に心臓を貫くのだ。それまでに矢を抜かなければその女の命は無……！！……グハアッ！」

結局その台詞を最後まで言い切ることなく、アイオロスが怒りを込めて放った光速の拳によって腹部を貫かれたトレミーは、自分の身体に何が起こったのかも気付かず事切れた。

そして、攻撃を受けたアテナは矢が胸に刺さったままで、意識を失って倒れている。

まだ矢はそれほど深くまでは刺さっていないようだが、トレミーの言葉を信じるなら急いでこの矢を抜かなければアテナが死んでしまう。

そして、その力を持つのは唯一人、教皇だけだという。

このままでは命が危険なアテナを連れては行けない、ならば教皇をここへ連れて来なければならぬ。

しかし、ここにアテナを一人残して先に進む訳にもいかない。

そこでアイオロスは、星矢達にアテナを任せることにした。

「星矢……お前達はこの場に留まりアテナを守れ。私は今から十二宮を突破して教皇をここへ連れてくる。」

「アイオロス、俺達も一緒に行くよ！」

「それは駄目だ。お前達まで付いてくればアテナを守る者が居なくなる。まだアテナを狙う者がいないとも限らん。それに、宮を守

るのは黄金聖闘士だ……お前達には闘えん。」

「で……でも、一人で行くなんて……。」

星矢達はアイオロスの力を知っているが、相手も彼と同格の者達なのだ。

たった一人でゆくという彼の言葉は、星矢達には無茶だと思えなかった。

その時、アイオロス達の元へ近づいて来たムウが口を開いた。

「それならば私が同行しましょう。」

星矢達は一斉にムウの方へと振り返った。

牡羊座の聖闘士が彼らも知っているムウだということにまず驚き、そして、彼が言った言葉に再び驚いた。

「どうしてあなたはまた俺達に協力してくれるのだ？」

紫龍はムウが最後に言ったことを覚えている。

あなた達を助けるのはこれで最後、確かに彼はそう言った。

なのに、彼は今度も力を貸してくれるという。

そんな星矢達の心の声を感じ取ったかのように、ムウはアイオロスの方を向いて答えた。

「先程も言いましたが、私は元々あなた達と闘うつもりはありませんでした。それに、私が以前星矢達と別れて日本を離れようとしたとき、懐かしい小宇宙を感じましてね。その時気付いたのですよ、アイオロス、あなたがアテナと共に居るということが。十三年前の事件の真相は私も薄々分かっていました。恐らく今の教皇の正体も……。」

「教皇の正体？」

「そうだ、星矢。聖域の教皇はかつての前聖域の生き残りにして、そこにいるムウの師匠のシオンという方だった。」

「ええ、そして、シオンは十三年前から行方不明なのです。」

「行方不明って、それじゃあ……。」

「私がアテナを聖域から連れ出したあの時、私は教皇のマスクの下顔を見た……それは、私の親友だった。」

アイオロスの顔が一瞬苦悶に歪むのが見えた。

アテナを殺害しようとしたのが、教皇の仮面を着けた自分の親友だと知った時の彼の苦痛は一体どれほどだったのだろうか。

「その男の名は……サガ。双子座の黄金聖闘士だった男だ……。」

「やはりそうでしたか……。アイオロス、あなたは知らないかもしれませんが、サガもまた十三年前から行方不明なのです。」

「そうか……。」

アテナが成長するまでの十三年間、アイツはどんな気持で教皇の仮面を被っていたのだろうか……そんな想いがアイオロスの中に広がっていった。

あの時自分はサガを止めることが出来なかった。

そのせいでムウもまた、幼い頃に師を喪いずっとジャミールで一人暮らしていたのだ。

「そういう訳ですから、私もあなたと共に闘います。」

「……済まない、ムウ。私があの時……。」

「その先は結構です。私もあなたがここへ来ると知らなければ、闘おうとは思いませんでしたから。」

ムウはそう言ってアイオロスから目を離した。

彼の中にもこの十三年間行動出来なかったことへの後悔の念があるのだろう。

そして、今度は星矢達の方を向いて言った。

「それではあなた達の聖衣を出しなさい。」

いきなりそう言われた星矢達は、目を白黒させながらも黙って自分の聖衣をムウの前に置いた。

ムウは差し出された四体の聖衣を一つ一つ見回すと、星矢達にはつきりと宣告した。

「思った通り、あなた達の聖衣には目には見えない程の細かいヒビが入っています。このままでは次に闘いとなれば、これらの聖衣は粉々に碎け散るでしょう。」

「な……何だっけ!?!」

ムウの宣告に星矢達は驚愕した。

彼らの聖衣は白銀聖闘士達との闘いの直後は確かに崩れそうなた位ボロボロだったが、いつの間にかそれも直っているようだったのでそのまま持ってきたのだ。

だが、そんな星矢達の聖衣はムウによると触れられただけで破壊されるといふ。

「いいですか、聖衣というのは多少の傷なら放っておいても勝手にある程度は自己修復します。だからこれらの聖衣は一見直っているようにも見えますが、私がこうして直接触ると細かいヒビが聖衣の奥まで達しているのが良く分かります。」

ムウはそう言うと、どこからともなく金槌や謎の金属、光る粉等を取り出した。

それらはオリハルコンやガマニオンといった稀少な金属で、聖衣を修復するための原料なのだ。

そのまま何も言わずに聖衣を修復し始めたムウだったが、時間が無いと焦る星矢達に静かに告げた。

「私達はこれから教皇の間へと向かいますが、その間アテナを守るべきあなた達の聖衣がこれでは闘うことも出来ないでしょう。幸い聖衣は破損してはいますが死んではいません。時間は然程からず修復出来ますよ。」

こうしてムウは星矢達の聖衣を一つ一つ丁寧に修復していった。

そして、火時計の牡羊座の火が消えかかっているのを見ると、軽く一時間位は経つただろうが、ヒビの入っていた四体の聖衣は見事なまでの輝きと共に形を変えて完璧に甦った。

その様は、まるで聖衣から新たな生命の息吹が感じられる程の素晴らしさであった。

聖衣を修復し終えたムウはアテナの守りとしてこの場に残る星矢達に、小宇宙の神髄についても教えてくれた。

「いいですか。あなた達は小宇宙とは自身の覚悟や生命などから

生じるものと考えているかもしれませんが、それは小宇宙の一面に過ぎません。小宇宙の神髄とは所謂視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚の五感などの一つ先、一般に超能力を司るとされる第六感、それよりもさらに先に存在する第七感すなわちセブンスセンスなのです！黄金聖闘士が何故強力なのか、それは彼らが皆セブンスセンスに目覚めているからに他なりません。だからあなたが皆セブンスセンスに目覚めることが出来ればたとえ黄金聖闘士が相手だとしても互角に闘うことが出来るでしょう。」

そう告げるムウに星矢達は力強く頷いた。

そして、そんな星矢達にアテナを任せて、アイオロスとムウは十二宮へと走り出していった。

第七話 牡羊座の助力（後書き）

仲間第一号はムウです。

師匠の仇だからといった感じですかね。

かなり原作よりも協力的です。

そして、この時点で貴鬼完全に消えました。

第八話 黄金の野牛

アイオロスとムウは、矢を受けたアテナを青銅聖闘士達に任せてたつた二人で教皇の間を目指していた。

彼らが十二宮への一步を踏み出した時黄道十二星座を模した火時計からは、既に白羊宮の火が消えようとしていた。

火時計は約十二時間で消え去り、一時間ごとに火が一つずつ消えていくのだ。

そして、それは同時にアテナの命のタイムリミットでもある。

二人はそんな火時計の様子を気にしながらも、先へと進んでいく。そして、教皇の元へと急ぐアイオロス達が、白羊宮に踏み込んだ瞬間、それは不意に聖域全体に鳴り響いた。

ピキイイイイイン

静かな、それでいて誰の耳にも響き渡るかのような、金属音にも似たその音は、アイオロスとムウそれぞれが纏う黄金聖衣から聞こえてきているようだった。

「これは……？黄金聖衣が共鳴しているのか？」

まさしくその通りだった。

その音は長い年月を経て、黄金聖衣が聖域に再び勢ぞろいしたことを告げていた。

そして、聖衣から発せられるその音を聞いて、聖域の奥にいる教皇だけではなく、他の黄金聖闘士達も現在聖域で起こっている事態に気が付いた。

かつて聖域を逐われることになった、あの男、射手座のアイオロスが今再び聖域に現れたということに。

この聖衣の共鳴音こそ、彼の者が帰還した証。

幾星霜の時を越え、今この聖域に黄金聖衣が集結！！

そして、聖域の奥で教皇の仮面を被った男は一人呟いた。

「とうとうやって来たか……。」

男の顔はうかがい知れないが、その身に纏う空気の温度が急に冷えた気がした。

白羊宮を抜けたアイオロス達は次に待ち構えている金牛宮に向かっていった。

聖衣から発せられていた音はもう止まっている。

しかし、聖衣からは未だにかすかな振動が伝わってくる。

まるで、本来アテナのために共に闘うはずの黄金聖闘士同士が、これから争うことになるのを知っているかのように。

やがて金牛宮が見えてきた。

「妙だな……。」

「…ええ、何の気配も感じませんね。この宮はアルデバランが守っているはずですが。」

ムウの言う通り遠くから見た金牛宮は何の気配も無く、その様子はがらんとしていてまるでそこに誰もいないように見える。

そこで近づいて神経を研ぎ澄ましてみると、宮全体を押し包むような強大な小宇宙が伝わってきた。

だが、小宇宙は漂ってきているものの、肝心の本人の姿が一向に見えないのだ。

普通に考えれば、何か罫でも仕掛けられているのかと疑いたくもなるが、それについてはアイオロスもムウも良く知っている。

この宮の主、アルデバランは、決してその様なことはしない。

彼はいかなる時でも、どんな相手にでも常に真つ正面から小細工など弄することも無く全力で挑んでいく、それこそ愚直なまでに突進を繰り返す、まさに牡牛座タウラスを体現したかのような男なのだ。

だがそんな杞憂を振り払うように、宮へと近づく二人の前にいきなり一人の男が現れた。

それは、気が付いてしまえば何故これほどの男の気配が感じられなかったのか、と不思議に思う程の巨軀を持つ大男だった。

ムウもアイオロスも決してその背は低くは無い、見方によっては大柄であるともいえる。

しかし、二人の前に立ちただかる男はそんな彼らと比べても頭一つ分以上大きい。

優に2mはありそうなその男は、もちろんただ背が高いだけではなかった。

その身体つきは逞しく、相当な剛力を宿しているであろう太い両腕は腕組みの状態で組まれており、雄々しさすら感じさせる小宇宙によって実際よりもはるかに巨大に見える。

この男こそ、十二宮の二番目の宮である金牛宮の守護者、牡牛座タウラス

のアルデバランなのだ。

腕を組んで立つその姿は、見る者にそそり立つ壁を思わせる。
やがてアルデバランは目の前の二人に低い声で言った。

「どこへ行くつもりだ、アイオロス。……それにムウも……まさか
お前が聖域に刃向かおうとはな……。」

アルデバランは黄金聖闘士二人を前にしても全く動じることは無い。
い。

長い間一つ前の白羊宮が無人だったので、実質的に彼の宮が先頭
になっていたこともあり、敵との闘いでは真つ先に先陣を切るアル
デバランにとって相手が黄金聖闘士、それも二人が同時に挑んでき
たとしても些かも動揺することは無いのだ。

そんなアルデバランに向かってアイオロスが答えた。

「アルデバランよ、私達は今アテナを救うために教皇の間へと急
いでいる。この宮を通らせてくれ。」

「ならん。俺は金牛宮を守るのが使命、お前達を通す訳にはいか
ん！」

断固とした口調だった。

アルデバランはそう言ったまま、二人の前を微動だにしないで立
ちはだかっている。

俺はお前達を通さない、その全身を包む威圧感からはそんな意思
が透けて見える。

アルデバランはその膂力、体力等こと肉体的な力に関しては聖闘
士の中でも随一である。

彼が戦闘において小細工を好まないのは、そんなことをせずとも
正面から闘って相手を打ち破ることが出来るだけの実力を備えてい

るからに他ならない。

そのアルデバランが本気で二人を止めようとしているのだ。

その強固な意思を見せられては、到底言葉で説得できる相手ではなかった。

そして、互いに睨み合う三人の間には必然的に緊張感が高まっていく。

こうなったらアイオロス達はアルデバランと闘って宮を通り抜けるしかない、そのことは三人が三人共分かっていた。

こうして三人の間の緊張感が極限まで高まり、ついに臨界を超えた。

それにつられるかのように、突然アイオロスの足元の石畳が弾ける。

弾けた床は抉れ、やや深い穴となっている。

それでもアイオロスとアルデバランは、互いに視線を外さずピクリとも動かない。

「それ以上近づくなら今度は容赦しないぞ。」

「何だと……！」

緊張を破って先に口を開いたのはアルデバランだった。

彼はその場から一步も動くことなく、アイオロスの足元へと牽制の拳を放っていたのだ。

二人の間の距離はおよそ数m、通常手を伸ばしても届く距離ではないが、聖闘士はその拳に衝撃波を伴うのでその位の距離なら無いに等しい。

まして黄金聖闘士なら、数m離れた位置から放つ手加減した拳でさえ、その衝撃で石を砕く程の威力を出すなど造作も無いのだ。

だが、ここでアルデバランの様子にムウが反応した。

「構えないのですか、アルデバラン？」

そう、何とアルデバランは先程からずっと、拳を放った時ですら腕を組んでの体勢を崩さない。

それは別にムウでなくても疑問に思うところだろう。

普通なら、誰も腕を組んだまま闘おうとは思わない。

相手に闘う気が無いと思われても仕方がないような構えだ。

しかし、そんなことは気にも留めずアルデバランは答えた。

「気にする必要は無い、これが俺の構えだ。」

腕を組んだ状態のままこれが構えだと言い放つアルデバラン。

彼はその構えが自身にとって最も適している構えだと理解している。

だからこそ敵を前にしてもずっと不動の体勢を保っているのだ。

「腕組みのまま闘うだ！？舐めるのもいい加減にしろ！」

「お前達がどう取ろうと結構だ。俺はこの構えを崩すつもりは無い。」

そんなアルデバランにアイオロスは無数の光速拳を繰り出した。

打ち出された光速拳は一つ残らずアルデバランの巨体に命中する。

だが、次の瞬間アイオロスの顔に驚愕が走る。

何とアルデバランはその場から一步も動かなかった。

黄金聖衣の上からとはいえ、まともに光速拳を受けても微動だにせず平然としているどころか、その状態から間髪を入れずに反撃の拳を放ってきたのだ。

丁度その拳がカウンターとなってアイオロスに襲いかかる。

命中する寸前でなんとかアイオロスは身体を捻りそれを回避して事なきを得たが、それでもその背中には冷や汗が伝っていた。

アイオロスの脳裏に今の攻防が浮かんでいた。

アルデバランは自分の攻撃を受けても平気だが、自分がアルデバランの攻撃を受ければただでは済まない。

少なくとも体力の面では到底敵いはしないということを、嫌が応にも感じてしまう。

アルデバランの持つ黄金聖闘士の中でも並ぶものの無い剛力とタフネスが遺憾無く発揮されていた。

一方でアルデバランは自らは動くことなくアイオロスからの攻撃を待ち受けていた。

その巨体から、アルデバランは自分からパワーに任せて突っ込んでいくタイプに見られがちだが、彼は決してそんな単純なタイプではない。

むしろ相手の攻撃を冷静に待ち構え、その攻撃に耐えつつ反撃するカウンターこそが彼の最も得意とする攻撃だ。

もともとパワーに優れている彼が、その力をカウンターとして放つ時、その威力は計り知れない。

そしてそれを可能にするのがアルデバラン自身の脅威のタフネスだ。

それがあって、初めてこの技を打つことが出来る。

敵の放つ攻撃に耐えられるからこそ、相手に与えるプレッシャーも非常に大きいものになるのだ。

しかし、そんなプレッシャーをはね除けるように再びアイオロスは拳を繰り出した。

もとより彼に後ろに引き返す道など存在しない。

相手が譲らないのならば、闘って力づくで突破するだけだ。

アイオロスは小宇宙を高めて必殺技を繰り出そうとアルデバラン

に向かって構えた。

「ゆけ！アトミック・サンダーボルト！！！！！」

アイオロスの拳が光の速さで進む光球と化してアルデバランに襲いかかる！

そしてその拳が再びアルデバランの胴体を捉えた。

…結果的にアトミック・サンダーボルトの直撃を受けたアルデバランは得意のカウンターを打つ間もなくその場から大きく弾き飛ばされ背後の石壁に激突した。

アイオロスの拳の威力は間違いなくアルデバランに届いていたのだ。

その証拠に崩れた瓦礫の中から立ち上がるアルデバランの額にはうっすらと汗が浮かんでいる。

いくら彼に無尽蔵の体力があるとはいえ、黄金聖闘士の必殺技級の攻撃をまともに受ければたまったものではない。

だが攻撃を受けた腹部の痛みに顔をしかめながらも、前を見据えるアルデバランの目に恐れの色は見えない。

そして、もう一度アイオロスと対峙するためにアルデバランは歩き出す。

と、そこで不意にアルデバランの足が止まった。

「ムッ……こ……これは……身体が動かん！」

急に身体が硬直してその動きを止めたアルデバランを尻目にムウが口を開いた。

「申し訳ありませんが、サイコキネシスで動きを止めさせてもらいました。」

「なっ…！ムウ、何のつもりだ！」

アイオロスも突然の横槍に憤る。

それに対してムウは慌てずに答えた。

「アイオロス、私達は教皇の元に向かっているのです。この先のことを考えれば、アルデバランとは闘わずにこの宮を通り抜けるべきです。」

確かに時間が無い現状では、闘いが避けられるなら避けた方がいいに決まっている。

それにムウがアルデバランに対してサイコネシスを使ったのは訳がある。

アルデバランの体力を考えれば彼を倒して宮を抜けようとするれば多大な時間がかかってしまうということもあるが、それ以上にサイコネシスで動きを止めて闘いを回避するという手が使える相手が黄金聖闘士の中ではアルデバラン位なのだ。

そもそもサイコネシスとは第六感に属する類のもので所謂超能力だが、セブンセンスに目覚めている黄金聖闘士なら皆ある程度の心得がある。

しかしその中でも必然的に得手不得手があり、ムウなどは黄金聖闘士の中でも最も優れた超能力を持つとされるが、アルデバランのようにほとんどそれが使えない者もいるのだ。

そしてサイコネシスは基本的に先手を取った方が有利である。

もし先手を取られてサイコネシスをかけられると、よほど超能力に優れた者でもなければそれを解除することは難しい。

だが黄金聖闘士の中にはムウに匹敵する程の超能力を持つ者も居り、彼らを相手にこんな手を使って時間を短縮するようなことはやりにくいのだ。

しかしアルデバランが相手ならひとまずその心配は無い。
ムウとアルデバランの超能力の力にはそれほど差が存在する。
二人の闘いに横から手を出したことは認めるが、それで双方が傷
付くのが防げるならと、敢えてムウはサイコキネシスを使用したの
だ。

「今の内に早く金牛宮を抜けましょう。今は先へ向かうことを考
えるべきです。」

アイオロスもついにムウの言葉に従い、アルデバランを残したま
ま金牛宮を抜けることにした。

サイコキネシスに縛られて身体を動かすことが出来ないアルデバ
ランは一人憤怒の表情を浮かべているが、その横をムウとアイオロ
スが通り抜けようとする。

「ま……待て！この宮を通るのはこの俺を倒してからだ！！」

アルデバランは全身に力を込めてムウのサイコキネシスの拘束を
逃れようとしていた。

しかし、そんなアルデバランを顧みてムウが更に強い力でサイコ
キネシスをかけた。

「アルデバラン、無理にでも動こうとすれば身体が壊れますよ。」

だが、ムウの忠告にアルデバランはかすかに笑って答えた。

「フン！そんなこと位で俺が怯むとも思っただか！！又オオオオ
オオオ！！」

「やめろアルデバラン！」

アイオロスが、尚もムウのサイコネシスに逆らってその呪縛を振りほどこうとするアルデバランの方を振り返った。

次の瞬間アイオロス達に凄まじい衝撃が襲いかかってきた。

「バカな……力だけで私のサイコネシスを破ったというのか！？」

「おそらくそうなのだろう。…油断した…。」

地面から立ち上がりながら、二人は今の衝撃を放った相手を見て呆然と呟いた。

そこにはムウのサイコネシスから解放されたアルデバランが仁王立ちしている。

聖闘士の中でも最も優れているとされるムウのサイコネシスが己の剛力のみで脱出するとはまさしく前代未聞であった。

「やはり闘うしかないのか…！」

「今度こそ決着をつけてやるぞ！このグレイトホーンでな…！」

未だ立ち上がろうとする二人を見下ろしながら、アルデバランはついにそれまでずっと組んでいた両腕を解き放った。

「グレイトホーン…！！！」

「「！！」」

アルデバランの剛力を集約した二つの掌底から巻き起こる衝撃波がアイオロス達に叩きつけられる！

吹き飛ばされる直前二人は見た、アルデバランがその大きな両の掌を抜き放つのを。

光速の動きを身につけた黄金聖闘士でさえも反応出来ない程の速さ。

アルデバランの必殺の一撃は黄金聖闘士二人を容易く吹き飛ばした。

その威力は大の大人二人を軽々と吹き飛ばしただけでは収まらない。

周囲の石造りの壁に激突したアイオロス達は、その壁が何の抵抗になることもなく次々と壁を突き破った。

黄金聖衣ですら軋む音が聞こえてくる程の凄まじい威力に、しばし二人の息が止まる。

しかし、仮にも黄金聖闘士が相手なのだ。二人を吹き飛ばしたグレイトホーンの威力はそれと同時に分散し、そのおかげでアイオロス達はかろうじてその場からすぐに立ち上がることが出来た。

だが多少は和らげられたとはいえ、それでも身体中の骨が軋む程の甚大なダメージを受けていた。

実際二人の纏う聖衣が黄金聖衣でなければ、今の一撃で確実に命を落としていただろう。

そんな危地であるにもかかわらず、アイオロスの顔には笑みが浮かんでいた。

「見切ったぞ……グレイトホーンとは居合いの拳！アルデバランは腕組みの状態で力を溜め、それを居合い抜きのように一気に解き放つことで必殺の一撃としているのだ！」

アイオロスには確信があった。

先程のグレイトホーン、避けることは出来なかったが見切ってはいたのだ。

そして一度見切った技は聖闘士には二度通用しない！

「ほう……それに気付いたか。だがそれだけではどうにもならんぞ！このグレイトホーンの前ではな！」

「いや……グレイトホーンの攻略法はある！ムウ、下がっている。」

「どうするつもりですか？」

既に立ち上がっていたムウは、アルデバランの間合いから外れると、その位置からアイオロスに声をかけた。

「グレイトホーンは居合いの拳。一度放たれば回避する術は無い。…ならば、拳が放たれる寸前で回避するしかない！そして一度拳が抜かれたなら、それが奴の最大の間隙となる。」

「確かにそうだ。だがお前にそれが出来るか！？」

アルデバランとしては当然アイオロスの示したグレイトホーンの攻略法をとらせるつもりは無い。

そもそも光速で繰り出される拳を一体どうやって放つ直前に回避

するというのが。

そんな考えを無にするようにアイオロスがゆっくりとアルデバランに近づいていく。

そしてついにアイオロスがグレイトホーンの間合いに入った。

「よからう！全力で叩き潰してくれるわ！」

「来い！アルデバラン！！」

雄叫びを上げる二人の小宇宙が燃え盛り……そして、弾け飛ぶ！

「くらえ！グレイトホーン！！！！」

さつきとは違いアイオロス一人に向けられたアルデバランの掌底は、先の一撃を上回る威力で金牛宮に破壊の衝撃を響かせた。

だがグレイトホーンが放たれた直後、アルデバランの顔に驚愕が走る。

「何イ！アイオロスの姿が消えた！？」

アイオロスが回避を取ることは予め分かっていた。

なのにアルデバランはその姿を見失ってしまったのだ。

アルデバランには自身の必殺技を避けることなど出来ないという自信があった。

それが彼の精神に一瞬の空白を生み出した。

その一瞬の後、自分の真上から既に技を放つモーションに入っているアイオロスの姿が目飛び込んできた。

「もらったぞ、アルデバラン！アトミック・サンダーボルト！！」

それを見たアルデバランの中に一つの想いが沸き上がってくる。

…耐えられる！…

事実先程一発はそれに耐えているのだ。

一瞬の隙を突かれたとはいえ、この攻撃を耐えれば勝負はまた振り出しに戻る。

だがアルデバランの読みは甘かった。

再度放たれたアイオロスの狙いは胴体ではなく頭部だった。

その拳は正確にアルデバランの頭を撃ち抜き……そして、そのままアルデバランの意識は闇の中に落ちていった。

「ウ…………ン。…………俺は…………負けたのか…？」

大地に横たわったアルデバランが唸り声を上げて目を覚ました。

そして、自分のすぐ横に転がっている牡牛座のマスクに目を向けると、傍に立っていたアイオロス達に向かって大きな笑い声を上げた。

「ウワツハハハツ！まさか本当に俺のグレイトホーンをかわしてしまつとはな！！大したものだ！」

「アイオロスの拳を頭にくらってこんな短時間で起き上がるあなたも大したものですよ。」

アルデバランの笑い声に既に敵意が無いことを悟ったムウが返事を返した。

「まあこの頑丈さが俺の取り柄だからな。」

アルデバランは、たった今目覚めたばかりとは思えない位朗らかな様子で言った。

彼が意識を取り戻したのは、アイオロスの攻撃を頭部に受けて昏倒してからわずか数分後だった。

それは到底頑丈だけで済ませられるものではないが、二人はそれで納得するしかなかった。

ともかく意識を取り戻したアルデバランにアイオロスが話しかける。

「まあいい。私達は先へ行くぞ。」

「ああ、いいだろう。俺はお前に敗れたのだ、この宮を通るがいい。というより、俺が目覚めるまでわざわざ待っていたのか？」

言外にそんなことせず先へ行け、という響きがあったが、アイオロスはこれといった風もなくさらりと答えた。

「別に待っていた訳ではない。命があるようだったから少しの間様子を見ていただけだ。」

アルデバランの覚醒の早さがそれほど予想外だったのだらう。

アルデバランも急いでいるという二人を引き留める気は無く、立ち上がってアイオロス達に言った。

「ならばもう行け。これ以上ここで時間を浪費する訳にもいかならう。」

「…そうだな。行くぞ、ムウ。」

「分かりました。」

アルデバランの言葉にそう言ってアイオロスとムウは顔を見合わせる、二人は踵を返して金牛宮の奥へと消えていった。

そしてその姿を見送ったアルデバランは、再び金牛宮の守護にくために身体の向きを変えて宮の入口に向かって歩き始めた。

第八話 黄金の野牛（後書き）

一応、角折りはやめました。

黄金聖闘士同士の闘いなので、原作のように何度も技を受けては立ち上がる、といった部分はなくしたりちよっといじってみましたが、結局あんまり変わりませんでした。

むしろ劣化してるのか？

これからもしばらくこんな感じで進みますのでご了承ください。

第九話 小宇宙の明暗

金牛宮を抜けたアイオロスとムウは、次に待ち構える双児宮へと進んでいた。

先のアルデバランとの闘いで受けたダメージは決して小さくはなかったが、黄金聖闘士の持つ最高レベルの小宇宙によって走っている内に徐々に二人の身体は回復していった。

しかし、双児宮を目指して走る二人の表情はどこか優れない。それも次の宮を守護者である男のことを考えれば当然だろう。

その男はかつてアテナの殺害を計画したが、それをアイオロスによって防がれたため彼を聖域から追放し、更にムウの師である先代の教皇をもその手にかけて男でもあるのだ。

なによりも今現在、アテナを救うための最大の障壁となるであろう。

そして二人を包む重苦しい雰囲気破って、アイオロスがムウに話し始めた。

「ムウ、教皇の間にたどり着く前に一つだけ言っておきたいことがある。」

「なんですか？」

突然話しかけられたムウは、驚いたようにアイオロスの方を向いた。

だがムウの前を走るアイオロスの表情は見えない。

アイオロスは走る速さをやや緩め、少しの間黙っていたがやがて静かに口を開いた。

「実は、サガには私達も知らない秘密があるのではないか、と私は思っている。」

「秘密…ですか？」

唐突なその言葉にムウは思わず聞き返した。

「ああ、そうだ。かつて私が聖域からアテナを連れ出した時、わずかだが私はサガと闘った。」

「……………」

「そしてあの時見たアイツの姿は、それまで私が知っていたサガとはまるで違っていた。」

そしてアイオロスは十三年前のあの日、教皇の仮面を被ったサガと対峙した時のことを思い起こしながら語りだした。

「ムウも知っていると思うが、私とサガは天秤座ライオンの老師を除けば黄金聖闘士の中で最も年長で同期だ。故に私達はお前達年下の黄金聖闘士達をまとめる役目を持っていた。」

「ええ、私も当時は聖域にいましたから、そのことは憶えています。」

「だから私とサガは共に行動することも多かったし、年が近い者が周りにいなかったせいですと親友同士だった。」

「……………」

ムウは、何が言いたいのか、と問うような眼差しをアイオロスに向けた。

「……サガは誰にでも優しく、周囲の者達だけでなく会った人々全てにその人柄を慕われていた。そしてその清らかな小宇宙はまさしく神の化身と言われた程だったのだ。」

そう言っただけを見つめるアイオロスが、ムウには一瞬昔を懐かしんでいるかのように見えた。

「だが、あの時教皇の仮面を被ったサガから感じた小宇宙は到底神の化身と言われた男のものではなかった。小宇宙はどす黒く汚れ、邪悪な意志と力に満ちていた。」

「アイオロス、それではあなたは教皇に扮しているのはサガではないと言っているのですか？」

「いや……あれは間違いなくサガだった。風貌も普段のアイツのものではなかったが、私には分かる。」

「では……。」

「だが私にはあれがサガの正体だったとは思えない。単純に私や教皇の前では本性を隠していた、というだけではない気がするのだ。」

「それでサガが何か隠し事をしていないか……。」

「少なくとも私はそう思う。」

しかし、そう言ったアイオロスにも確信がある訳ではなかった。だがアイオロスの目から見て、あの日のサガは異常だった、なにより彼があんな風に他人を、それもアテナや教皇をその手にかけるとは未だに信じられない。

その様はアイオロスの良く知るサガからはかけ離れていた。しかし、その理由も分からぬまま二人はついに双児宮の前に辿り着いた。

二人はそびえ立つ双児宮を前にして、しばしの間立ち尽くしていた。

「今、この宮に奴は……サガはいないはずだ。アイツは教皇の間で私達を待ち受けている。」

「……しかし、双児宮から立ち上るこの異様な小宇宙……中は一体……?」

双児宮から感じられる小宇宙は、二人が侵入するのを拒もうとするものではなく、逆に手招きして誘っているかのようであった。

宮全体が、アルデバランの時とはまた違った不気味な気配に押し包まれている。

「アイオロス、どうしますか。」

「答えるまでもない。行くぞ!」

得体の知れない双児宮の様子に少し躊躇っていたが、意を決して二人は宮の中へと飛び込んでいった……

宮の中では予想していたようなことは何も起きなかった。

多少身構えて中に入ったものの、二人は何の妨害も受けることなく、あっさりと双児宮を駆け抜けていく。

「何もありませんでしたね。」

「…そうだな。」

もうすぐ宮の出口が見えてきそうなところで、ムウが今まで走ってきた背後の宮の様子を振り返りながら言った。

「途中で何か不思議な小宇宙が迫ってくるのを感じましたが…。」

「私も感じた。おそらくあれはサガの小宇宙だ。教皇の間から小宇宙を飛ばしていたのか…?」

二人はとうに気が付いていた。

宮を抜けるさ中まるでライトが点滅するかのようになり、明と暗、二つの小宇宙が入れ替わりながら二人の後ろから迫ってきていたことを。

そしてその小宇宙を放っていたのは、今ここにはいない双児宮の主であることも。

そしてやがて宮の出口が見えてきた。

予想に反して何事も起こらなかったことに拍子抜けしながらも、二人は双児宮を突破した……………かのように見えた。

「何だ……………これは!？」

アイオロスは宮を抜けた途端、飛び込んできた光景に自分の目を疑った。

なんと、双児宮を抜けてきた二人の前には突破したはずの双児宮が再びそびえ立っていたのだ。

信じられない出来事にアイオロスもムウも驚きのあまり口を開くことが出来ない。

幻覚でも何でもなく、目の前の宮は真正銘の双児宮であった。

その事実には呆然と立ち尽くすムウとアイオロス。

しかし、気を取り直したアイオロスが再び双児宮への突入を試みる。

「……………とにかくもう一度双児宮を抜けてみよう。」

「そうですね。」

こうして二人は再度双児宮を駆け抜けた。

だが二度目の挑戦も虚しく、またしてもこの二人が宮を抜けることは出来なかった。

「……………どういうことだ……………今度は宮が増えているだと!？」

アイオロスの言葉に嘘はなかった。

二人の前には先程と同様に双児宮が、しかも一つではなく二つ並んで存在していたのだ。

常識には慣れていないはずのアイオロスやムウも、さすがにこの光景には絶句した。

だが、しばらく考え込んでいたアイオロスはハッと何かを思いついたかのように顔を上げた。

「そうか……思い出した。この双児宮は守護者の小宇宙によって迷宮と化することも出来るのだ。」

「ではやはりこれはサガの仕業ですか。」

ムウはそう言ったが、この状況を造り出している張本人が分かったところでどうにもならない。

「小宇宙の力で空間をねじ曲げているのでしょうか。」

「多分それで間違いないと思う。サガに限らず双子座の聖闘士は代々空間を操ることを得意としていたようだからな。」

宮を抜けることが出来ないからくりは分かったが、如何にしてそれを破るかについては見当がつかない。

結局、宮の外に居ては何も手の出しようが無いので、三度目の突入を行うことになった。

そして脱出出来た時のために、二人はそれぞれ別の宮へと向かうことにした。

「私は右の宮に行く。この宮を抜けられたら私に構わず先に行っ

てくれ。」

「フツ……それはあなたも同じですよ。」

「ああ、分かっているさ。」

こうしてアイオロスとムウは、二手に分かれて双児宮に駆けてゆく。

双児宮の火は既に半分程が消えていた。

アイオロスと別れたムウは、一人左の宮を駆け抜ける。

だが先程とは違い、宮の内部に隈無く漂っていたサガの小宇宙が感じられない。

宮を二つに分けたせいかな？などと考えていたムウの周囲が不意に暗闇に包まれた。

それに気付いたムウはすぐにその足を止めると、前をむいて言い放った。

「なるほど……今度は小宇宙だけではないということですか。」

ムウの前には双子座の黄金聖衣を纏った男が立っていた。

相手が現れたことで、拳を構え臨戦体勢に入るムウ。

そして距離を取って相手の出方を見据えると、軽く挑発するかのようには話しかけた。

「どうしました？かかって来ないのですか？」

しかし相手はその言葉を聞いても一向に動こうとはしなかった。拳の一つも放たないどころか、その場に立ったまま向かってこようともしないのだ。

その様子にムウは訝しげに首をかしげたが、まずは牽制程度に光速拳を放った。

だが光速拳が向かってきているのにその男はかわそつとする気配も無い。

そして拳が命中する、かと思いきやなんと拳は全てすり抜け背後の床が弾け飛んだ。

男は何事も無かったかの如く立ち続けている。

驚いたムウは、一旦十分に離れてから、目を閉じ小宇宙を集中した。

そして相手の気配を探る。

ややあつて目を開いたムウは、その男が何の気配も発していないことを感じ取った。

確かにそこに存在しているように見えるが、その男からは気配も、それどころか小宇宙さえも感じることは出来なかった。

小宇宙はどんな生き物にも必ず備わっている。

仮にサガが教皇の間からこの黄金聖衣を操っていたとしても、小宇宙によって使役している以上小宇宙が感じられないはずはない。

その小宇宙が感じられない目の前の男はただの幻覚に過ぎないということだ。

それに気付いたムウは、無造作に男に近づいていった。

「なまじ目に見えていたことで実際にいると思ひ込まされてしまった…。こちらが幻覚ということとは……おそらく本物はアイオロスの行った方に向かったのか。」

ポツリと一人そう呟いたムウは幻覚に向かって構えた。

「なんにしても、この幻影を破らないことには双児宮からは抜け出せませんからね。消えなさい！スターダストレポリューション！……！」

スターダストレポリューション、代々牡羊座の黄金聖闘士に受け継がれてきた技の一つである。

流星群のような煌めきと共に、幾多の光速拳が相手を目掛けて降り注ぐ。

そしてその中に巻き込まれた者は、塵と化すまで粉々にされるといふ。

結果、ムウの放ったスターダストレポリューションは双子座の聖衣の幻影を見事に掻き消した。

それと同時に辺りの暗闇も消え去り、すぐ近くに宮の出口が見える。

「あれが、本当の双児宮の出口ですね。」

こうしてムウは一人双児宮を抜けることに成功した。

一方でアイオロスはムウとは逆の、右に位置する双児宮を走っていた。

だが今度はいくら進んでも一向に出口が見えてこない。

まるで何時間も走り続けているような、それでいてまだ数秒しか走っていないような、そんな奇妙な感覚に襲われる。

そしてはたと立ち止まると、そこにはムウが見たのと同じく双子座の黄金聖衣を纏った男が待ち受けていた。

「サガが操っているのか……それにしても、教皇の間から黄金聖衣を操作するとは……。」

一目でそれと見破ったアイオロスは、再び敵となったサガの操る黄金聖衣を厳しい目で見つめる。

今彼が対峙している黄金聖衣からは、アイオロスは知らないが、ムウの時とは違いサガの小宇宙が感じられる。

かつては傍で見ていた双子座の聖衣を懐かしく思うと同時に、アイオロスは自らの拳を強く握り締めた。

「サガ……お前が操る聖衣にやられるようなら、私はお前と闘うことも出来ないな……。」

この場には居ないサガの聖衣を前にして、聞こえるはずの無い言葉を呟いた。

そして、アイオロスはゆっくりと双子座の聖衣に向かって歩き出した。

それに呼応するように、双子座の聖衣も前進し近づいてくる。

それを見て思わず拳を繰り出すアイオロス。

しかし、その拳が聖衣を捉えることは無かった。

アイオロスの放った拳は、ことごとく狙いを外したかのように双子座の聖衣の周りに着弾する。

「これは……回避しているのでは無いな……。サガめ……空間操作で

拳の軌道を曲げているのか。」

そう、サガはその強大な小宇宙によって、操っている双子座の聖衣の周囲の空間をアイオロスの拳に沿ってねじ曲げているのだ。

それによってアイオロスの拳は、双子座の聖衣に命中することなく何も無い地面へと誘導されていた。

相手の仕掛けがどういふものか見切ったアイオロスは、ひとまず攻撃の手を止める。

……ねじ曲げられている空間ごと打ち破るか……？……

真つ先にアイオロスの頭に浮かんだ考えはそれだった。

サガは教皇の間から放つ小宇宙によって空間を歪曲させているが、それを上回る小宇宙を乗せた一撃を加えれば曲がった空間を突き破って双子座の聖衣に攻撃を当てることは十分に可能だ。

サガは自分の聖衣を媒体としてこの場に小宇宙を発現しているため、双子座の聖衣を何とかすれば双児宮に掛かっている幻覚は消える可能性が高い。

そう考えたアイオロスだったが、それを実行に移すのが些か遅れた。

いつの間にか双子座の聖衣が攻撃の構えに移行していたのだ。

そして双子座の聖衣から立ち上る小宇宙が、双児宮に異次元空間を呼び起こす！

「アナザーデモンション……！！」

突如アイオロスの目の前の空間が目に見えて歪んでいく。

そしてその歪みが限界を超え遂に空間が裂ける！

それと同時に、その裂け目から何か得体の知れない暗い穴のよう

なものが大きく広がっていく。

その向こうに見えたのは異次元としかいいようがない空間だった。その空間の内部からは全身を引っ張るように強烈な引力が発生している。

その力にアイオロスは異次元の中に引きずり込まれそうになった。

「クツ…！ここで異次元に引きずり込まれる訳にはいかん！」

アイオロスはそう言って空中で射手座の翼を広げて一回転すると、何とか異次元空間に飲み込まれるのを防ぐ。

やがてゆっくりと空間の裂け目は小さくなり、そして消失した。

そこでアイオロスは改めて双子座の聖衣と対峙した。

その頃、聖域の最奥部の教皇の間で一人の男が瞑想している。

その顔は教皇のマスクに隠されていて定かではない。

しかし、どうやら彼が見据えているのは双児宮のようだ。

男の身体からは尋常ではない小宇宙が発せられている。

すると突然男が立ち上がった。

最初彼の視線は何もない虚空を漂っていたが、次第に何かに気付いたように不気味な笑い声を上げる。

「クククツ…！アイオロスの奴め、うまくかわしたようだな。だが今度こそ異次元空間に閉じ込めてくれる！」

教皇の間で男は一人そう叫ぶと、椅子に腰掛け再び異次元への扉を開くために深い瞑想に入った。

すると男の頭上に先程双児宮に現れたのと同じような穴が開いていく。

「アイオロスよ……永遠に異次元をさ迷うがいい！アナザーディメンション！！！」

「来たか……」

そう呟いたアイオロスは双子座の聖衣の小宇宙が増大していくのを黙って見ていた。

そして再び現れる異次元空間への扉。

その中に吸い込まれることのないようにしっかりと両足で床を踏み締めながら、アイオロスは自身の聖衣の背に手を掛ける。

その手を引き戻すと、そこには黄金の弓と矢が握られていた。

そのままアイオロスはその矢を弓につがえて、異次元空間への入口に向けてキリキリと引き絞る。

そして遂にアナザーディメンションの入口が完全に開ききった。

「同じ技が二度通用すると思うなよサガ！」

アイオロスは異次元空間の遙か奥からサガ本人の小宇宙を感じ取っていた。

それは黄金聖闘士だからこそ感じ取ることが出来る程のかすかな小宇宙。

それを頼りに己の渾身の小宇宙を込めて、遙か彼方の見えない相手に向かって黄金の矢を更に引き絞る。

「この矢はたとえ相手がどれほど遠くであつても必ず届く！ゆけ！黄金の矢よ！！」

光の速さで放たれた矢は黄金の軌跡を描いて異次元の彼方へと消えていった。

教皇の間で瞑想していた男は特に意識した訳でもなく、何の気なしにスツと椅子から立ち上がった。

だがその次の瞬間……

「うおおっ!?!」

いきなり自分の開けたアナザーディメンションの穴から黄金の光が飛び出してきた。

そして男がバツと振り返ると、立ち上がった男のすぐそば、正確にはついさつきまで座っていた椅子の背に深々と黄金の矢が突き刺さっていた。

もし男が椅子に座っていたままだったら確実にその身体を射抜かれていただろう。

その事実には仮面に隠された男の顔に戦慄が走る。

そして閉じていく異次元空間への扉に向かって憎々しげに言い放った。

「おのれアイオロス……許さん！」

だがその時、男の頭の中に何者かの声が響いた。

……やめる…この勝負、お前の負けだ……

その声に男の顔に驚愕が浮かぶ。

「な……何だと……！」

……アイオロスはお前が操る双子座の幻影如きに負ける男ではない……

頭に響く声の主にそう断言されたことで、男は言い様の無い屈辱感を感じた。

……そしてアイオロスがここに到着した時がお前の最期だ……

「ぬうう。貴様あ、邪魔をするな！」

どこからともなく響いてくる声を止めようと男は激昂するが、尚もその声は止まない。

……ならば今すぐアテナにひれ伏し赦しを請え…それがお前の罪を償う唯一の道だ……

「何だと！？貴様に何が分かるというのだ！罪というならそれは貴様も同罪だ！」

男は虚空に向かって叫んだ。

だが聞こえてきた返事は男の予想を上回るものだった。

……そうだな……しかし……その罪を重ねてきた日々も今日で終わる……

その声はどこか己が断罪されることを望んでいるようにも聞こえる。

しかし男はそれを嘲笑うかのように言った。

「フツ……それは違うぞ。今日こそこの聖域でアテナもアイオロスも死に絶える。そして俺が世界を掌握するのだ！」

……そんなことはさせん……

「黙れ！貴様に何が出来る。この俺を止めることも叶わんではないか！」

だがいくら待ってもその言葉に対する答えは返ってこない。

「ようやく消えたか……忌々しい奴め。」

男はそう呟いくと、思い出したように双児宮の方を確認したが、そこにはもうアイオロスの小宇宙は感じられなかった。

「アイオロスは既に双児宮を抜けたか……仕方ないここは退いておくとするか……。」

男は諦めたようにそう言って、己の小宇宙を鎮めた。

アイオロスは幻覚の消えた双児宮を進んでいた。
そして走りながらさっき放った矢のことを考える。

サガに命中したかどうかまでは不明だが、あの矢は少なくともサガのいる教皇の間には到達したのだろう。

その証拠に双児宮にかけられていた幻覚が消えた。
しかし、それ以上のことは分からない。

「やはり直接教皇の間まで行くしかないか…。」

そう言ってアイオロスは双児宮の出口を走り抜けた。

第九話 小宇宙の明暗（後書き）

ちよつとした聖闘士についての考察（作中設定）→その2

・双子座の技について

具体的にはサガとカノンがそれぞれ十二宮編と冥界編で見せた双児宮の迷宮の比較です。

今回の話を書いていて気付いたのですが、同じ双子座の聖闘士でもサガとカノンではしていることがずいぶん違う気がしたのです。

・空間操作はサガの固有技なのか？

これは十二宮編でサガが見せた宮を出たら宮の入口だったというアレスです。

原作で説明されていたか定かでないのですが、あれは空間を曲げて宮の出口と入口の手前を繋げていると思われれます。

しかし後にカノンがサガ達を双児宮に足止めする時にはこの技を使っています。

カノンののはむしろシャカの幻覚イリュージョンと同系統です。

つまり相手をそのままでは抜け出せない言わば幻覚空間ともいえるものを造り出しそこに閉じ込めています。

これはサガのとは明確に異なります。

十二宮編でのサガの足止めはまず宮を出たら宮の入口、もう一度宮を出たら宮が二つになってました。

宮を二つにしたのがカノンの幻覚空間と同じ技術で、おそらく星矢と紫龍が入った方が幻覚です。

いくらサガでも黄金聖衣を二つは無理だし、星矢の方の双子座は何もしてきませんでしたよね？

最もこれは一方で瞬達と闘っていたからで、だから星矢達は普通ですり抜けられたのだと思います。

つまりサガはカノンと同じことが出来るけどカノンがサガと同じことは出来ないということです。

更に他にもサガは、双子座の聖衣に氷河が攻撃した時、氷河の技をそのまま相手に跳ね返しました。見方によってはこれも空間操作によるものと言えます。

しかしそのサガもこの技術を使ったのは十二宮編の双子座の聖衣を操っていた時だけです。

星矢と一輝が闘った時も相手の技を跳ね返したりはしていません。
…少なくとも星矢は。

そう考えると空間操作は実戦向けではなさそうな気がします。

サガですらも静かに集中してやっと出来るような技術なのでしょう。

それでもこんな技使えるのは黄金聖闘士でもサガだけです。やはり黄金聖闘士最強クラスというだけありますね。

このため作中では攻撃の跳ね返しはせず、逸らすだけにしましたがこれは跳ね返せるのはせいぜい白銀クラスの技までで黄金の攻撃は無理だろうと思ったからです。

第十話 積戸気の中で……（前書き）

原作読んだらデスマスクの口調が想像以上に普通だった。

第十話 積戸気の中で……

現在アイオロスは既に双児宮を抜け、先行していたムウと合流している。

ムウは幻覚に囚われただけであり、アイオロスも直接攻撃を決められた訳では無いため、双児宮では二人共にその身体には大したダメージを受けてはいない。

しかし、未だに三つ目の宮を突破したばかりであることを考えると、残りの宮を抜けるのにどれほどの時間が掛かってしまうのか。

火時計にある双児宮の火はもう消えてしまっていて、既に次の巨蟹宮の火が小さくなり始めている。

アテナの命を救うのにもはや一刻の猶予も残されてはいなかった。

だが目指す巨蟹宮が目前に迫る中、ムウは数日前の邂逅に思いを馳せていた。

数日前、中国、五老峰

五老峰、それは中国でも広く名を知られた名峰である。

その峰から千年間姿を変えずに流れ落ちると言われる廬山の大瀑布は見る者を圧倒する。

そんな悠久の自然を感じさせる廬山の大瀑布の近くの崖の上に目を向けてみよう。

そこには良く見ると何か人のような小さな影を見ることが出来る。

それは何時からそこにあるのかも定かで無く、稀に動いているのだとも言われている。

観光客どころか地元の間人でさえも近付くことが出来ないその崖の上には一体何があるのだろうか、と憶測が後を絶たない。

もちろんその付近に住む人々の間ではあれはただの妙な形の岩だとか、小さな老人が座っているのだとか、仙人の休憩所であるとか様々な噂が飛び交っている。

代々そこに住んでいる年寄りの話によれば、少なくとも百年前にはもうあの崖に存在していたらしい。

…最も誰一人としてそれを確かめた者はいないのだが。

ともかくその崖の上にはいつもどこか珍妙な影を見ることが出来たのだ。

だがその影に幾分か近付いていくと分かってくるだろう、それが実は生きている老人であるということに。

その老人の名は童虎、れっきとした人間である。

その背は大きく曲がり身体中の皮膚が垂れ下がっていて、血が通っていないのか紫色に見えてくる。

しかしその正体は88の聖闘士の頂点に立つ十二人の黄金聖闘士の一人、天秤座ライブラの聖闘士。

そして現在ではたった一人となってしまうた前聖戦からの生き残りでもある。

その實力を見た者はほとんどいないが、既に2000才を越えた老人の身でありながら全聖闘士の中でも最強と謳われる程の男である。またやはりその長い間の聖闘士としての経験からか、聖域の者達の多くは彼を老師と呼んで尊敬している。

そんな童虎であったが、実際には闘うどころか滝の前から動くことさえ稀で、実は青銅聖闘士の一人の紫龍はこの老師の元で聖闘士としての修業をしていたのだが、その修業の間ですら滝の前から不動のままであった。

だが何故彼がずっとそこに座ったままなのかを知る者はもういない…。

その日も童虎は滝の前にちんまりとただ座っていた。

もう果たして何年そうしてきたのかも分からないその様子は、正に周囲の自然と一体と化しているといえる。

だがその日はいつものようにのんびりと滝の前に鎮座したままで終わってはくれなかった。

普段は童虎の小宇宙が立ち込める五老峰に、別の何者かの小宇宙が割り込んでくる。

「ムッ……これは…。」

童虎は座った状態で動くこと無くその気配を察した。

「ホッ……一体何の用じゃ？」

「フフッ……さすがは老師。気配を絶って近づいたのに、こつもあつさり気付くとは…。」

いつの間にか背後に現れていた男が童虎の言葉に応える。

信じられないようだが、その男は廬山の大瀑布の中から空中を歩いてくるようにして登場した。

男の名は蟹座キヤンサーのデスマスク。

彼もまた童虎と同じく黄金聖闘士の一角を占めている。

デスマスクも聖闘士の中では強力な超能力を持つので、空中を歩

くことなど彼にとっては造作も無い。

「デスマスクか……それで、何しに参ったのじゃ？」

「既にお分かりのはず……。あなたは十三年の長きに渡り教皇の命に逆らってきた。その罪で死んで貰うぞ。」

とぼけたような童虎の言葉にデスマスクはじわじわと小宇宙を高める。

そんな不穏な気配を隠さないデスマスクに対して、童虎はいつもと全く変わらぬ様子で言った。

「フム？…教皇じゃと？あやつなら儂がここから動かぬ理由は百も承知のはずじゃがのう。」

そう言って童虎は目を細める。

まるでデスマスクなど目に入っていないかのようなようだ。そんな態度に痺れを切らしたデスマスクが童虎に拳を向けた。

「それがどうした？黙って大人しく死ぬがいい！」

もはや形ばかりの敬意などかなくなり捨てて、デスマスクはその本性を剥き出しにして攻撃してきた。

そして童虎目掛けて光の速さで拳を叩き込む。

「チツ…かわしやがったか。」

しかし、デスマスクの拳はついさっきまで童虎が座っていた地面にめり込んでいたが、肝心の童虎の姿は既にそこから消え去っている。

た。

デスマスクがすぐ横に目を向けると先程と同じような姿勢で童虎が座っていた。

相変わらずその目はデスマスクの方を向いてはいない。

仮にも黄金聖闘士の攻撃を背を向けたまま回避するとはただごとではないだろう。

そして再びデスマスクに対して諭すように言った。

「ホツホツホツ……デスマスクよ、そのように昂っているのは当たるものも当たらんぞ。」

「そうか……ならこいつはどうだ!」

デスマスクはそう言って小宇宙を高める。

その途端デスマスクの周囲に青白い靈気が漂い始めた。

「ムツ……これは積尸気!」

その時ようやく童虎はデスマスクの方を向いた。

それまでとは違い、わずかな緊張感が見てとれる。

「そうだ……積尸気とは死体から立ち上る燐気にして冥界へと続く道。これを喰らった奴は魂が積尸気に引きずり込まれて絶命するのだ。」

辺りに漂う積尸気が渦を為してデスマスクの指先に集まってゆく。それに伴いデスマスクの小宇宙も更にその強大さを増していった。さすがの童虎も額から汗を流さずにはいられなかった。

「い……いかん!」

「死ね！積尸気冥界波！！！！」

青白く燃える積尸気の塊がデスマスクの指先から解放され、童虎に向かつて突き進む！

しかし、童虎に命中する寸前で再び童虎がその姿を消す。対象を失った積尸気はやがて散り散りに拡散して霧消した。

「！……誰だ！この俺の邪魔しやがったのは！」

確実に相手を捉えていたはずの積尸気冥界波が外れたことで、デスマスクはこの場に自分と童虎以外の者がいることに気付いた。辺りを見回していたデスマスクはある一点に目を止める。

「間一髪でしたね。お久しぶりです、老師。」

「ホッ、友有り遠方より来る、か。」

そこに童虎と共に立っていたのは黄金聖闘士、牡羊座のムウであった。

積尸気が命中する直前にムウが童虎をテレポーションさせて救ったのだ。

「お前か…牡羊座のムウ。」

いきなり現れたムウにデスマスクは齒ぎしりする。

そして改めてデスマスクと対峙する童虎とムウ。

しかし双方の間に高まっていく緊張感を破って先に口を開いたのは、明らかにやる気を削がれた雰囲気のあるデスマスクの方であった。

「チツ…いくら俺だつて黄金聖闘士二人を相手にするほど馬鹿じゃねえ。ここは潔く退いておいてやるよ。」

そう言ったデスマスクは、驚くほどあっさりと二人の前から来た時と同様に滝の中へと消えていった。

それを見送ったムウと童虎は警戒を解いて話し始めた。

「すまんのう。助かったぞムウ。」

「いえ、要らぬ手助けをしました。」

このことから分かるように、二人は旧知の間柄である。

ムウの住むジャミールと、ここ五老峰は比較的近いため、この二人には親交があった。

ムウも幼い頃にジャミールで暮らさなくてはならなくなったので、かつてはよく五老峰の童虎を訪ねていたのだ。

ムウが成長してからはその回数も減ったが、今でも互いに連絡を取ることもある。

今回もそのためにムウは童虎の元を訪れた。

「老師、私は今から聖域に向かいます。」

「どうしたのじゃ？これまでずっとジャミールに籠っていたお主が突然聖域に行くなど…。」

童虎が怪訝な眼差しでムウに尋ねた。

彼の知る限り、ムウはジャミールに籠るようになってからは一度も聖域に戻ってはいないのだ。

役目があつて動けない自分と違って、ムウは白羊宮を守らねばな

らない。

前にそう言っつて聖域に戻るよう促したことがあつたが、ムウは結局その言葉には従わなかつたため童虎もそれについて言うのはやめた。

そのムウが、今になつて自らの意志で聖域に向かうというのは童虎にとつても気になることであつた。

そんな童虎を見てムウが言うことには、何と十三年前に死んだはずのアイオロスが日本で生きていたという。

直接その姿を見た訳ではないが、数日前日本で青銅聖闘士達と会つて別れた際にアイオロスの小宇宙を感じたらしい。

そして神の…おそらくアテナの小宇宙をも感じられたそうだ。

そのことが気になつて、ムウは十二年振りに聖域を訪ねることにしたので。

童虎はその理由を知つてしばらく顔を臥せて黙つていたが、いつの間にやら元いた場所に戻つてまた座り込んでいた。

そして、ややあつてからまた口を開いた。

「ムウよ、お主がそう決めたのなら僕は何も言わん。だがこれだけは伝えておこう。今聖域で教皇を名乗っているのはシオンではあるまい。あやつならば僕の所に刺客を送るようなまねはせんからかう。」

「はい…それは分かつております。十三年前に師の小宇宙が途絶えたのは確認しました。そして、その後の事件でアイオロスも殺されたのだと思ひ私は聖域から逃げ出したのです。」

そう告げるムウはかつての出来事を思い出したためか、はたまた過去の自身の行動を悔やんでいるのか顔を曇らせていた。

それを見た童虎は軽いため息をつく。ムウに背を向けて言った。

「そうか……既に知っておったか。ならばもはや言うことは無い。お主のことじゃから心配は無いのじゃろうが、用心は怠るでないぞ。」

「はい。では老師もお元気で。」

「ウム。」

そんなやり取りを交わした後、ムウは聖域の白羊宮へと向かったのだった。

老師と会った時のことがムウの頭をよぎる。

次の巨蟹宮の主はデスマスクだ。

五老峰では黄金聖闘士二人は相手に出来ない、と言ってあっさり退いたが今度はどうするつもりなのか。

はつきり言っただスマスクの技は危険だ。

五老峰で初めて実際に目にしたが、たとえ黄金聖闘士といえどあれを受けてはひとまりもない。

それ相応の覚悟を決めなければ相手に出来る男ではないのだ。ただ、今のところデスマスクはこちらの技を知らないはずだ。その点ではこちらが有利だと言える。

しかしアイオロスとムウは巨蟹宮に辿り着き、中に入ったと同時に

に大きく目を見開いた。

「ッ！何だこの宮は！床に人の顔が！」

「床だけではありません。壁や天井まで宮全体に渡っていますね。」

巨蟹宮の内部はとても筆舌に尽くし難い、なんともおぞましい光景が広がっていた。

巨蟹宮の中の石畳の床から、壁を通じて更には天井に至るまで、何百何千という人の顔が浮き上がっていたのだ。

しかもその顔はひとつひとつ違っているが、どれも精巧なもので表情からは怨みや苦しみ、未練といったあらゆる負の感情が溢れている。

そんなぞつとするような景色の中、アイオロスとムウが巨蟹宮を進んでいくと行く手に立ち塞がる男の姿が明らかになってきた。

「よう、どうだ気に入ったか？こいつらは今まで俺が殺してきた奴らだ。俺への怨みで成仏出来ずに巨蟹宮をさ迷う内に顔となって浮かび上がってくるのだ！この俺の名の通り、死に顔デスマスクとなつてな！」

そこに現れたのは蟹座の黄金聖闘士デスマスク。

己を怨む者達の死に顔の中、その態度はある意味堂々としているともいえる。

この不気味な宮の守護者に圧倒されそうになる二人だったが、思い直して声を掛けた。

「デスマスク、私達はアテナを救うために教皇の元に向かっているのだ。」

「……………」

「…一撃でしたね。」

「…ああそうだな。」

こうして二人は巨蟹宮の出口に向かって駆けだした。

早々に守護者を失った巨蟹宮を二人は走り抜けていく。

そして次の宮である獅子宮について考えていた。

獅子宮の守護者は当然、獅子座の聖闘士であるアイオリアだ。アイオロスとも日本で一度出会っていたが、アテナについて教皇に問い質す、と言って聖域に帰ったきり音沙汰が無い。

日本で見た様子からしてアテナのこともアイオロスのことも信用してくれたようで、アイオロスははつきり味方になってくれるかと期待していた。

しかし自分達が聖域に向かうことは伝えてあったのに、十二宮の前まで来てもアイオリアの姿は無かった。

獅子宮を目指すついでにそのことをムウに話してみる。

「アイオリアですか。私もここに着いてからまだ大して時間も経っていないので何とも言えませんが、アイオリアには会っていません。」

「そうか、まあどうせ獅子宮で会えるからいいか。」

「そういえばアイオリアはアテナが倒れたことを知らないはずですから、自分の宮であなたとアテナが来るのを待っているのかもしれませんね。」

「それもそうだな。」

ここまで通り抜けてきた宮では凶らずも戦闘になってしまったが、アイオリアの宮なら闘わずに済むだろうとアイオロスは考えた。

「老師の天秤宮と私の人馬宮は無人だから、次の獅子宮を抜ければあとはもう5人…いや6人か。」

「……………」

黄金聖闘士は全員で12名いる。

それぞれが太陽が一年かけて回る軌道、つまり黄道の上にある十二の星座を司っているのだ。

「我ながら十二宮を二人で突破するなんて無謀かとも思ったが、こうして半分近く来ていることを思うとこの先も何とかかなりそうな気がしてくるな。」

「……………」

だがアイオロスはこの時ふと気付いて振り向いた。

「……………ムウ？」

そこには浮かび上がる死に顔の他は何も無い巨蟹宮が広がっていた。

ムウは今、自分が目覚めたこの場所について思索していた。

さっきまでアイオロスと共に巨蟹宮を走っていたはずなのだが、意識を失ったのか気がついたらこの場に倒れていたのだ。

この場所、ここは一体どこなのか。

辺りには人影も見えず、剥き出しの地面は荒涼としてどこまでも続いている。

そして空とおぼしき暗闇が頭上を覆っているのだが、何故か自分の手足や辺りの様子などははっきりと見える。

だが次の瞬間突如として後方から衝撃が襲ってきた。

「誰だ!?!」

吹き飛ばされて大地に倒れそうになるが、そこは堪えて振り返る。

そこに立っていたのは……

「お前は! デスマスク!?!」

つい今しがた積戸気の中に消えたはずのデスマスクが、ニヤリと笑ってムウを見下ろしていた。

「また会ったなムウ!」

「何故お前がここにいる!?!」

「それは驚くことじゃねえだろ？ここは積尸気、冥界への入口だ！」

「なっ……積尸気!？」

積尸気、それは死者が冥界へ行くために通る道のことだ。

デスマスクの積尸気冥界波は、本来敵の魂を肉体から分離し直接この冥界の入口へと運ぶ技なのだ。

「普通この技を受けた奴は魂がここに送られて死ぬ。だが俺だけは積尸気を通って現世と自由に行き来出来るんだよ！」

そう言うとデスマスクの背後に積尸気が現れて、すぐに消えた。

それを聞いたムウは、なるほどと得心した。

積尸気冥界波はデスマスクだけには通用しないということが。

クリスタルウォールで跳ね返した先の一撃もデスマスクにとっては何でもなかったのだ。

むしろ積尸気の内部から不意討ちを掛けてこようものならもつと厄介だ。

それは多分黄金聖闘士でも反応出来ない。

現にムウほどの聖闘士が成す術もなくこの場所に引きずり込まれてしまったのだから。

だがムウは未だに表情を崩さない。

どこか余裕すら漂う顔でデスマスクに挑む。

「そうか、ならここで闘うのは得策ではないな。」

そう言うとムウの姿が薄くなってパッと消えた。

だが再びもとの場所に現れる。

「ムッ!？」

訝しげな顔のムウの耳にデスマスクの哄笑が聞こえてきた。

「ハツハツハ、残念だったな。いくら黄金聖闘士随一の超能力を誇るお前でもここから現世へのレポートは不可能だ。」

デスマスクはムウの意図を見破ったのか、問われもしないのに上機嫌で答えた。

そして止めを刺したと言わんばかりに言葉を続ける。

「更にここは冥界の入口だ。さすがに即死はしなかったようだが既にお前は半死人のようなもの、いくら黄金聖闘士でもその力は半減するのだ!」

その言葉にムウはデスマスクには聞こえないように歯ぎしりした。悔しいが確かに身体に力が入らない。

しかし相手はそんなことで待つてはくれない。デスマスクの殺気の籠った攻撃がムウに迫る。

「おらおらおらあ!お前なんざこのままぶつ殺してやる!」

「グウツツ!」

ムウはデスマスクの猛攻に晒され一方的に殴られ続ける。

小宇宙を燃やして防ごうにも所詮一発光速拳をガードするのが精一杯で、とてもデスマスクの拳を受けきれない。

それでも何とか黄泉比良坂内でレポートを繰り返しながら、攻撃に耐えていた。

だが遂にデスマスクの前で大きな隙を見せてしまう。

「もらったあ！」

すかさずムウの顎を目掛けてデスマスクの渾身のアップercut
が叩き込まれる！

「グハアツツ！！」

その一撃を受け天高く吹き飛ばされたムウの身体がそのまま重力
に従って落下し地面に激突する。

「フツ、これで終わりだな。見ろ、あの穴を！」

ムウの首を掴んで持ち上げながらデスマスクがある場所に近付い
ていく。

その場所は平坦なこの世界の中でも唯一の高い山といえる所だっ
た。

良く見るとあちらこちらに人の姿をした魂が数多く存在していた
が、彼らは皆一様にその高山を目指してフラフラと歩いている。
そして山の頂上に着いたデスマスクが見下ろしている先には、火
山の噴火口のような黒々とした底の見えない巨大な穴が存在してい
た。

「こいつが冥界に続く黄泉比良坂だ。ここに落ちたら俺でも戻っ
てこれねえ。師匠の後を追わせてやるぞ。」

その言葉を聞いた瞬間ムウの意識が覚醒した。

今確かにデスマスクははっきりと言った、師匠の後を追わせてや
る、と。

……何故デスマスクがシオン様の死を知っている！？思い返せばこいつはアテナの危機も知っていた！……

ムウは身体中の力を振り絞ってデスマスクの手をはね除けると、強い口調でデスマスクを問い詰めた。

「デスマスクよ、お前は教皇の正体を知っているのか!？」

「教皇の正体だと？そんなもん知ってるに決まってるだろ。」

「何だと!？」

ムウには今の言葉が信じられなかった。

……教皇の正体に気付いていながらそれに従っているというのか!?!……

ムウも、先のアルデバランと同様にデスマスクもアテナが既に聖域にいるという教皇の言葉を信じて行く手を塞ぐというのなら仕方ない、と思っていた。

もしそうならばやはり闘って通り抜けるつもりだったのだが、デスマスクは教皇が偽物であることを知っていて尚、牙を剥いてきた。教皇の偽りを見抜いていながら教皇に従っているとはどういうことなのか。

それを確かめるべく、デスマスクに尋ねた。

「デスマスク、お前は どうして教皇に従っているのだ?」

「おっと、勘違いすんなよ。俺はお前らと違ってアテナに忠誠を

誓ってるつもりは無い。俺が信じるのは力だけだ！」

「お前はそれでも地上の正義と平和のために闘う聖闘士か！！」

ムウが激昂して拳を放つ。

「おおっと。」

ムウが怒りに任せて振るった拳を軽くかわしてデスマスクは尚も言った。

「フツ…正義などというのは常に流動的で変化するものなのだ。旧日本軍やナチスの正義のようにな。教皇は本物ではないとはいえその力で以て地上の平和を守っているのだ。いずれその正義も正当化される！」

「何を馬鹿なことを。強大な力を己のために振るうような男が正義であるはずが無い！」

ムウの言葉を受けても柳に風といった様子で、デスマスクは全く聞く耳を持たなかった。

「所詮この世は力こそ正義！力を持たない弱者に正義を語る権利は無い！サガに殺されたお前の師匠のようにな！」

その言葉に遂にムウの怒りが限界を越えた。

「おのれデスマスク、我が師を侮辱するとは許せん！！」

ムウの小宇宙がそれまでとはうって変わって激しく高まっていく。

その様子にデスマスクは冷や汗を流しつつも、自身も小宇宙を高めてムウを迎え撃つ。

「何をごちゃごちゃ言っつてやがる！このまま穴に突き落としてやる！」

デスマスクが凄まじい勢いで突進しながら光速の拳を撃ち放った。しかしその拳は無造作にムウの手によって掴みとられる。

そしてムウがその手に力を込めると、デスマスクの腕に激痛が走った。

「うぎゃあああああ！！！」

デスマスクが顔を歪める中、ムウは勢い良くデスマスクを空に向かって放り投げると、拳を前に突き出して攻撃の構えを取る。

そしてその両手の間の流星群を思わせる輝きが段々と強くなり、十分強くなったところでそれをデスマスクに目掛けて叩きつけた。

「スターダストレボリューション！！！！！」

「ぎゃあああああ！！！」

ムウの放った光速拳は一つ残らず命中して、デスマスクを吹っ飛ばした。

派手な音を立てながら宙を舞い、轟音と共に大地に倒れ込むデスマスク。

「ハア……ハア……くそっ！ムウの奴あんな優しそうな顔してなんて馬鹿力だ。」

だが全身に光速拳を受けボロボロになりながらもデスマスクは立ち上がった。

その表情はつい先程まで勝ち誇っていた男とは思えない。そしてそんなデスマスクにムウが追撃の拳を繰り出した。

「今一度受けるデスマスク！我が師シオン譲りのこの技を！スターダストレボリューション！！！！」

「聖闘士に同じ技がそう何度も通用するか！」

デスマスクも必死で小宇宙を込めた光速拳を放ち、ギリギリでムウの技を止めることに成功した。

そして二人の間で激突する小宇宙が徐々に圧縮され、二人共動きが取れなくなっていく。

荒れ狂う小宇宙の中、ほとんど千年戦争のような状態に陥ってしまった二人だったが、やがてその均衡は崩れだす。

何と先に圧され始めたのはムウの方だった。

息を荒げて小宇宙を燃やしているが、二人の間の小宇宙の塊は段々ムウの方へと近付いていつている。

その様子にデスマスクは、

「ワハハハハ、やはり積尸気の中では限界だったようだな！」

そう叫んで更に小宇宙を高めて、ムウの方に押し込もうとする。

そして遂にムウが押し切られて蓄積した二人分の小宇宙がその身体に襲いかかる。

ガガカアツツツ！！！！

黄金聖衣の上からでも身体に響く強烈な一撃が、その場からムウ

を弾き飛ばした。

その威力にムウは冥界に続く穴の上まで飛ばされる。

「クツ…！」

しかし穴に落ちる寸前で手を伸ばして、なんとか穴の淵につかまることが出来た。

だがそんなムウの手を踏みつけてデスマスクが現れる。

「さんざんてこずらせやがって。だがこれでお前も終りだ！」

そう言っつてムウの手を何度も脚で踏みつける。

ムウは手を放さないよう堪えていたが、突然何かに気付いてギョツとした。

「デスマスク、お前の背後のそれは一体何だ!？」

「ああ?何のことだ?」

しかしムウの視線の先にあるものを目にした途端、デスマスクも驚きの声を上げる。

「ツ!何だこいつらは!？」

そこにいたのは黄泉比良坂をさ迷う亡霊達であった。

彼らは何も言わずにゆっくりと近付き、デスマスクの身体に纏わりりついた。

「なんとおぞましい光景だ…。デスマスクが今まで殺してきた人々の亡霊が、デスマスクを取り囲んでいる…。」

デスマスクはそんな亡霊の姿に驚きながらも、それらを力ずくで振り払った。

「亡霊如きが俺の邪魔をするな！お前らなどまとめて地獄に叩き落としてくれるわ！」

亡霊達は人形のように何も出来ずにただ吹っ飛ばされては冥界へと落ちていく。

「こいつ…！自分が殺した者の亡霊に襲われて恐ろしくはないのか！？なんとという強靱な精神力！」

やがて亡霊達はことごとく冥界へと突き落とされ、後にはムウとデスマスクだけが残った。

そしてデスマスクが相変わらずムウの手を踏みつけて言った。

「これでようやくお前を冥界に突き落とせるぜ。」

「ウツ…！」

するとデスマスクはムウがつかまっている黄泉比良坂の淵を粉々に踏み砕いた。

「あばよムウ。」

「うわあああああ！」

ムウが冥界へと落下していくのを見下ろしながら、デスマスクは悠々と積戸氣を開いて巨蟹宮に帰還した。

「アイオロスの奴はもう行っちゃったか。ま、俺にはどうでもいいことだな。」

宮の中は無人でムウと共にいたアイオロスの姿は既に無い。とつくに巨蟹宮は抜けたのだろう。

敢えて追う気も無いデスマスクは、ムウを黄泉比良坂に引きずり込んだ時に隠したムウの死体を始末しようと宮の中をうろついていたが、いくら探しても死体が見つからない。

冥界に落ちたのは魂だけだから身体はこの世に残っているはずなのだ。

不審な想いに駆られつつも宮を見て回るデスマスク。

そしてやっとムウを発見した。

だがその顔が驚愕のあまり硬直する。

「お前……何で生きていられる!?!」

デスマスクが見つめる先には、死体ではなく生きて立っているムウの姿があった。

ムウはかすかに微笑みながら静かにデスマスクへと近付いていく。その姿にデスマスクは思わず後ずさりしそうになった。

そしてようやくムウが口を開いた。

「私がこうやって現世に戻って来られたのは黄泉比良坂からテレポートしたからだ。」

「ふざけんな！積尸気の中からは絶対に俺以外は抜けられん！」

デスマスクはそう言ったが現にムウは巨蟹宮に立っている。

積尸気について、聖域の誰よりも精通している自負があるデスマスクですら理解不能だった。

「私のテレポートは通り道さえあれば異空間からでも帰還できるのだ。」

「まさか…！冥界の入口からでも戻ることが出来るというのか！？」

「いえ、黄泉比良坂には現世へと繋がる道はありません。それでは私もテレポートすることは出来ませんよ。」

「何………？」

デスマスクにはムウの真意が読めなかった。

事実ムウは積尸気の内部から脱出したにもかかわらず、テレポートは出来ないと言っている。

……なのにテレポートで戻ってきただと？何をしたのだ……

だがそこでデスマスクはある可能性に思い当たった。

「ま…まさか………！」

「そうだ。私はお前が開いた積尸気の穴を通ってテレポートしたのだ。積尸気に道が開いている間なら黄泉比良坂からでも現世へと転移することが出来る！」

完全に盲点だった。

デスマスクに冥界へ落とされそうになったムウは、デスマスクが巨蟹宮へ戻るために積尸気を使うのを上からは見えない深い所で遊しながら待っていたのだ。

そして積尸気により巨蟹宮と繋がった瞬間テレポート、魂は自然と肉体に戻り蘇ったのだった。

それを知ったデスマスクは齒噛みして悔しがったが既に後の祭りだった。

しかしその目はまだ勝負を諦めてはいない。

デスマスクの周りにも増して強大な積尸気が集まってゆく。

「だったらもう一度積尸気に引きずり込めば、もうお前は帰ってこれないはずだ！」

「聖闘士に同じ技は通用しない、そう言ったのはお前の方だぞ？」

ムウとデスマスクが睨み合ったのは一瞬、だがその一瞬に二人の小宇宙は大きく膨れ上がる！

「死ぬ、ムウ！積尸気冥界波！！！！！」

「スターライトエクステンション！！！！！」

その刹那、デスマスクの身体が大いなる光の輪に包まれる！

そしてその光輪が小さくなっていくのと同時に、デスマスクの身体が放った積尸気の塊ごと光に飲み込まれ消失していく。

「なっ……俺の身体があ~~~~！」

こうしてデスマスクは光が消えると同時にムウの目の前から完全に消え去った。

……かつてシオン様の師もまた積尸気の使い手であったと聞く。これも何かの縁なのか……

そしてムウは先行するアイオロスに追いつくために、疲弊した身体を奮い立たせて走り出した。

「ちくしょう、ムウの野郎どこにとばしやがった？」

デスマスクはそう言って立ち上がると辺りを見回している。

「なんだ、コロシラムか。」

そこは聖域の中でも主に聖闘士候補生の訓練を行う場所である。そしてそのど真ん中にデスマスクの姿があった。

「…あいつの技で俺はここまで飛ばされたのか。」

周囲に誰もいないことを確認しつつ、デスマスクは十二宮に向かって歩き始めたが、すぐに歩くのを止めた。

「今から慌てて行っても仕方無い、か……負けたのは俺の方だしな。奴の方が俺より強かった、ただそれだけだ。」

自らが信じる、カこそ正義という真理に従うならば、既に敗北したデスマスクはムウ達に立ち向かうことは出来ない。

何故なら相手の力が自分の力を上回ったということ、それは即ち相手の正義を認めなければならぬことに他ならないのだ。

そして勿論そのことについては何の不満も無い。

地上の平和を守るためにはより強い力が必要だ、というのはデスマスクの信念でもあるからだ。

例えば力を尽くす相手が誰であっても、その強さでもって地上を治める者ならばデスマスクはその態度を変えることは無い。

果たしてアテナの元で地上を守ろうとするアイオロス達と、己の力で世界を守ろうとするサガ、この闘いで勝利するのはどちらなのか。

……いや、デスマスクにとってはそれがどちらでも構わないのだから。

より強い方に従う、それが彼の唯一の行動理念なのだから……。

だがデスマスクは自分の強さを上回った相手への戦意も決して忘れない。

……次に会う時は首を洗って待ってるよムウ……

内心ではムウへのリベンジを考えつつも、十二宮の方を向いたデスマスクはまたゆっくりと歩き始めた。

第十話 積尸気の中で……（後書き）

デスマスクの性格が良く分からなくなりました。

ただデスマスクが仲間になるならこれが妥当なところかなと思います。

そして原作では積尸気を自由に出入りしていたのでデスマスク本人には積尸気冥界波が効かなくしてみました。

積尸気冥界波は紫龍とデスマスクしか喰らっていないので本当に一撃必殺なのか不明です。

第十一話 光速の死闘（前書き）

今更ですが作者は聖闘士星矢の単行本を持っていません。

毎回確認してるつもりですが、おかしい所があれば是非指摘して下さい。訂正もしくは言い訳をさせて頂きます。

第十一話 光速の死闘

「唸れ！獅子の牙よ！ライティングボルト！！！！！」

「何の！アトミック・サンダーボルト！！！！！」

アイオリアの放つ光速のストレートとアイオロスの拳から放たれた光球が二人の間で激突する！

そしてその二つの威力が押し合い、余波となって吹き荒れる衝撃波によって獅子宮の石畳には大きな亀裂が走り粉々に打ち砕かれてゆく。

そもそも聖闘士の攻撃、それは小宇宙を燃やすことによって全ての物質の根源である原子を砕くことを真髄とする。

原子とはこの世のありとあらゆる物質を構成する最小の単位であり、この原子を砕くということはまさしく究極の破壊であると言えるよう。

そして究極の破壊を身につけた聖闘士達の中でも最高位にあたる黄金聖闘士に至っては、何とその原子を破壊する拳を光の速さで繰り出すのだ。

その威力たるや想像を絶する。

そんな信じられないような攻撃が先程から獅子宮の中を幾度となく乱れ飛んでいる。

対峙する二人は、かたやこの獅子宮の守護者、獅子座レオのアイオリ

ア。

そしてかたやもう一方はそのアイオリアの兄、サジタリアス射手座のアイオロス。

拳を交わす二人の間の距離は大分離れているが、そんなことはお構い無しに光速拳による攻撃の応酬を繰り広げていた。

アイオリアが拳を放てばアイオロスはその威力を掌で受け止め、すかさず放たれるアイオロスの攻撃をアイオリアが光速移動で即座に回避する。

そんな光速の攻防を続ける二人は互いにまだ一発も相手の攻撃をまともに受けてはいない。

だが、その分当たらなかつた二人分の攻撃が命中し続けている獅子宮は床や壁のあちこちが崩壊して瓦礫の山と化し、見るも無残な姿を晒している。

そして先程から続くこの状態に業を煮やしたアイオロスはアイオリアを怒鳴りつけた。

「アイオリア！一体何があつた！？お前はアテナが下で倒れていることを知っているのか！」

「なっ……それは真か！？」

アイオリアに一瞬動揺が走る。

双方攻撃の構えは崩さなかつたが、二人共一旦攻撃の手が止まつた。

そこでアイオロスが話し出した。

「今アテナは胸に黄金の矢を受けて倒れている。その矢を抜くため私はあの火時計の火が消えるまでに教皇の元に行かねばならん

だ。分かったらどいてくれアイオリア！」

アイオロスの言葉を受けてアイオリアは更に驚いたが、何かに押さえつけられているかのようにその場から動かない。

「うっ……それでもここを通すことはできません。」

「本当に何があったのだ？これではまるで……」

不自然なアイオリアの様子に不審を抱いたその瞬間、アイオリアの小宇宙が大きく弾ける。

そしてその肩口が光ったかと思うとアイオリアの必殺技が炸裂した。

「これは……ライトニングプラズマ！？」

アイオロスも瞬間的に小宇宙を高め、光速拳の軌道を見切り防御或いは回避する。

しかし、いくら防いでも尽きることの無い光速拳の嵐が上下左右、いや四方八方から襲ってくる！

「クツ……！燃え上がれ我が小宇宙……！」

アイオロスは更に小宇宙を爆発させることで、何とかライトニングプラズマの威力を受け止めた。

「アイオロス、何をしていますのですか！それにアイオリアも！」

ムウが獅子宮に飛び込んできたのは、丁度その攻防が途絶えて一時的に二人の動きが止まっていた時のことだった。

「ムウか、無事巨蟹宮を突破したのだな。良かった。」

アイオロスは依然としてアイオリアから全く視線を逸らさずに言葉だけで答えた。

そのわずかな会話の間でさえも二人は気を張り詰めて互いの隙を伺っている。

二人の間に微妙なバランスで辛うじて保たれている均衡を崩す訳にもいかず、ムウはその場から一步も動けないでいた。

しかしムウは手は出せないながらも、アイオロスに今の状況を確認しようとする。

「…何故アイオリアはあなたと闘っているのです？あなたの話ではアイオリアは日本であな達と出会いアテナに忠誠を誓ったのではなかったのですか。」

「分からん。私もそうだと信じていたのだが…さつきからアイオリアは獅子宮は通さんの一点張りだな…。どうやら闘わずに済む雰囲気では無いらしい。」

と、そこまでアイオロスが言った瞬間アイオリアが光速拳を放ち、再び光速の攻防が始まった。

そしてアイオロスは光速の拳に対応しながら、後方にいるムウに向かって言った。

「クツ…！悪いがムウ、この闘いに手は出さないでいてくれ。アイオリアとは私が決着をつける。」

「…分かりました。私は先に処女宮に向かうことにしますよ。」

そう言っつてムウはアイオリアの横を抜けて獅子宮を突破しようとしたが、アイオリアがそれを阻んだ。

「誰一人としてここを通す訳にはいかん！ライティングプラズマ！！！！！」

「！！！」

ムウが先へ進むのを阻止するために、アイオロスとの攻防の最中でありながらアイオリアが放った光速の拳は、縦横無尽に走る光速の輝線となつて周囲の空間を覆い尽くした。

一瞬の内に繰り出される数千数万の拳の弾幕。

アイオロスと闘っているからとわずかに注意を怠つたのか、不意を突かれたムウはその衝撃に耐えきることは出来ずにアイオロスの傍まで吹き飛ばされる。

「ムウ！」

咄嗟にアイオロスが声をかけると、ムウは多少ふらつきながら立ち上がった。

「…不覚でしたね。あの状況で私の方にまで意識が及ぶとは思いませんでした…。」

アイオリアの攻撃がほぼ直撃したと言つても過言ではないが、それでも未だムウの意識ははっきりしていた。

しかし、

「他人の心配をしている暇があるのか？」

その時二人に生まれたわずかな隙を突いて、アイオリアが攻撃を仕掛ける。

「受ける！この俺の拳を！」

アイオリアのライトニングプラズマが今度は二人に同時に襲いかかった。

一秒間に一億発という猛烈な勢いで繰り出される光速の拳を回避することは不可能！

だが、

「甘いぞアイオリア！」

何とアイオロスがアイオリアの放つ無数の光速拳のひとつを選んでその拳を掴み取った。

それによって技の威力は完全に殺される。

回避も防御も不可能とされるライトニングプラズマも、元を辿れば一本の腕から繰り出される技に過ぎない。

つまりたった一発の拳を止めることで無力化出来るのだ。

さすがにこればかりはアイオリアにも予想外であったようで、掴まれた拳からは力が抜けていく。

「バ……バカな！俺の拳をこうもあっさり止めるとは……！」

アイオロスは掴んだ拳を放して言った。

「お前の師を務めたのはこの私だ。お前の放つ拳の軌道や癖は既に見切っている！」

アイオリアは再び拳を構えると、顔に悔しさを滲ませながら振り絞るように言い返した。

「そんなことがあってたまるか！俺は十三年間独力で修業してきたんだ！いくぞ！これが俺が全力で放つライトニングプラズマだ！」

いくら兄であり師であるとはいえ、自身の必殺技をこつとも簡単に受け止められてはアイオリアでなくとも冷静さを欠くのは当然だった。

激情のままに繰り出される光速の拳。

しかし、気を乱した状態で放たれる拳では威力は増したのかもしれないが、明らかにその精度は低下している。

そしてそんな技はアイオロスには通用しない。

「焦ったなアイオリア。お前の負けだ！」

アイオリアに向かって駆け出したアイオロスは、ライトニングプラズマの軌道の間隙を縫って一気にアイオリアの近くまで接近した。そして腕を大きく引いて渾身の拳を放つ！

「一度頭を冷やせ！アトミック・サンダーボルト！！！！！」

アトミック・サンダーボルトは本来拳から飛び出す数発の光球によって敵を倒す技だが、相手との距離が近ければ拳を直接当てるとも可能となるのだ。

その場合は、通常のそれより威力は数段上をいく。それをまともに受けたアイオリアは、かなりの勢いで吹き飛ばされ柱に激突した。

しかし勢いは止まらず柱を真っ二つにへし折り、そのまま床に叩

きつけられる。

…相手が弟だからなのか、手心ひとつ加えない全く容赦の無い一撃だった。

床に臥せたままピクリとも動かないアイオリアを見て、さすがにこれはまずいのではとムウが口を開いた。

「これで良かったのですか…？」

言外に、やり過ぎではないかと言っているのがありありと分かる。だがそんなムウの言葉もアイオロスには届いていないのか、至って普通に返された。

「この程度なら心配いらん。それに修業中はこの様なものではなかったぞ。アイオリアの奴少し鈍っているのではないか？」

至近距離から必殺技を喰らうのがこの程度…修業時代が僥ばれるアイオリアだった。

ともかく今の内に獅子宮を突破すべく二人共走り出そうとした。と、そこでようやくと言っていいのかアイオリアが立ち上がった。それを見たアイオロスは足を止めて静かに声を掛ける。

「目は醒めたか、アイオリア。」

しかしアイオリアは俯いたまま黙っている。

そして素早くアイオロス達に近付くと、いきなり攻撃を仕掛けてきた。

「危ない、アイオロス！」

咄嗟にムウがサイコネシスでアイオロスを引つ張ることで二人はアイオリアの間合いから離脱する。

攻撃をかわされたアイオリアは二人の方を向いて咆哮した。

「ウオオオオオオ!!」

アイオリアの顔つきは先程までとは違って変わり、目が血走ってまるで悪鬼のような表情である。

その変貌に驚いた二人は再びアイオリアから距離を取った。

その時教皇の間で笑っていた男がいるのを彼らは知らない……

数日前、聖域の教皇の間で

一人の黄金聖闘士が教皇の元へと突き進んでいた。

彼の名は獅子座レオのアイオリア。

先日、日本へ裏切り者の聖闘士の討伐に遣わされ、日本から帰ってきた直後のことである。

彼は日本で出会ったアテナを名乗る少女について思いを巡らせていた。

彼女から発せられる小宇宙は黄金聖闘士を遙かに凌駕し、確かにアテナと呼ぶに相応しいものだった。

そしてそれは、教皇がアテナが不在であることを十三年間も隠し続けてきたということを示している。

今、アイオリアの中には教皇への疑念が渦巻いていた。

そんなことを考えている内に、教皇の間の扉が見えてきた。そして教皇の間に辿り着くと、勢い良く扉を開けて相手の言葉も待たずに口火を切った。

「教皇、話がある。」

「何の用だアイオリア。この私への無礼は許さんぞ。」

教皇は若干不機嫌な様子でぞんざいに答えた。しかしアイオリアは怯むこと無く続けた。

「どうかアテナに拝謁させて頂きたい。」

その言葉が意外だったのか、教皇は苛立たしげに言った。

「アテナに拝謁してどうするのだ？」

「別に何も無い。だが聖闘士がアテナに拝謁したいと思うのは当然でしょう。」

「…アテナは今瞑想をなさっている。拝謁は叶わん。」

教皇がそう言うと、アイオリアは怒りも頭に教皇に詰め寄った。

「嘘をつくな！俺は日本で兄とアテナに会った！何故今までそれを隠していたのだ！」

教皇の言葉で、アイオリアは日本で出会ったアテナは本物だったと確信した。

そして教皇がそれまで伝えてきたことが偽りであったことも、それに気付いたアイオリアは教皇を問い質した。しかし教皇はその質問には答えずに椅子から立ち上がった。

「フッフッフ……そうか、そのことに気がついたか……。」

「教皇……?」

次の瞬間アイオリアに教皇の光速拳が襲いかかった。

「!!!……何を……何をする!」

「気付いたのならもはや生かしてはおけぬ。この場で死ねい、アイオリア!」

その言葉と共に放たれた光速拳がアイオリアの身体を吹っ飛ばした。

そしてそれを受けたアイオリアが、信じられないといった表情で立ち上がった。

「なんと……という光速拳だ……だがここで負けられん!」

そう言っただけで負けじとアイオリアも拳を放った。

「ハアツツツ!」

「ムウツ!」

二つの光速拳の威力がぶつかり合っただけで教皇の間に衝撃が走った。そして中間には今にも破裂しそうな小宇宙がくすぶっている。

「まさか…アイオリアの拳がこれほどは…！」

時と共にジリジリと本来光速拳に優れたアイオリアが押し始めていた。

教皇はそれに気付きながらも、どうにも出来ずに支えている。

そして遂にその小宇宙が教皇に襲いかかった。

「何イイイイ!？」

凄まじい小宇宙の衝撃で吹き飛ばされた教皇の身体が壁の向こうに消える。

それと同時にアイオリアも疲労で膝をついた。

だがほっとしたのも束の間、次の瞬間背後から現れた教皇の指拳が発する光線がアイオリアの脳を貫いていた。

「なっ……何だと！」

振り向いたアイオリアだったが、徐々に意識が薄れていくのが分かる。

その様子を見届けながら教皇が言った。

「これでお前は私の意のままに操られる存在になった。お前は敵の攻撃を受けることで、目の前の者全てを殺す殺戮マシンとなるのだ！」

「グッ……アアアアアア!!！」

段々とアイオリアの目から光が消えていき、やがて完全に彼の意

志が消え去るとアイオリアは踵を返して獅子宮へ向かって帰っていた。

「あれは目の前で人が死ぬまで解けることは無い。クククツ…アイオロスを殺した時が見物だな。」

教皇はしばらくの間アイオリアの立ち去った扉を眺めていた。

「ウオオオオオオ！！」

アイオリアが放つ光速拳がアイオロス達に肉薄する。

アイオリアは既にその小宇宙までもが変容し、繰り返される攻撃に二人はなんとか対応するのが精一杯だった。

「これは……一体…？」

ムウにもこの事態が把握出来ていないようであった。

アイオロスの攻撃に倒れたはずのアイオリアが、再び立ち上がって攻勢に出ている。

目の前のアイオリアには普段の姿はどこにも無く、相手のことなど無視してひたすら攻撃を放つ悪鬼のようなアイオリアがそこにいた。

否応なしにアイオロスが飛び出して再び拳の応酬が始まった。

だが先程までと違ってアイオロスがどこか押され気味だ。

楽々止めていたはずの攻撃にかなり苦戦している。

そんなアイオロスへの攻撃の手は緩めずに、アイオリアが言った。

「どうした、苦しそうだなアイオロス！」

「クツ…！」

迫りくる膨大な数の光速拳がアイオロスの体力を削っていく。

しかし、完全に倒れてしまう前に後方に下がることで辛うじて回避出来た。

「アイオリアに何が起きたのですか？」

ムウが見かねて口を出した。

アイオロスは険しい表情でそれに答える。

「アイオリアの拳の軌跡がこれまでと違う。あれは他人に操られている状態だ。」

「それはやはりサガの仕業ですか。」

操られているのならその操っている技を解除するか、術者を倒す以外方法が無い。

術者がこの場にはいないサガであることを考えると、技を解くしかないのが現状だ。

技を解除するにしても、それがどんな技か分からなければ外からの衝撃で解くことは難しい。

しかしそう考えるムウの横で、アイオロスは呟くように言った。

「あれは……幻朧魔皇拳……。」

それを聞いたムウが目を見開いた。

幻隴魔皇拳、それは聖闘士を統べる教皇にのみ伝えられる伝説の魔拳。

受けた者は己の意志を完全に失い、魔拳の使い手の支配下に措かれてしまうのだ。

ムウはいつかその技の名を教皇である師・シオンから聞いたことがあった。

「あの技を知っているのですか!？」

しかし、アイオロスはそれには答えずにゆっくりとアイオリアに近付いた。

そして構える。

アイオリアは相変わらず悪鬼の表情であったが、アイオロスを見るなり勝ち誇ったかのように言った。

「まだ諦めんか。ならば俺の手で殺してやるう。ライティングブラズマ!!!!」

無数の拳が煌めく輝線と化して縦横無尽に駆け巡る!

凄まじい圧力を受けて、アイオロスの聖衣が悲鳴を上げていた。

しかしそれでも尚、アイオロスは一步も退かずに堪えている。

それを見たアイオリアが哄笑した。

「いつまで無駄な抵抗を続けるつもりだ!俺は既にお前を越えた!見ろ!これが俺の力だ!!!」

その瞬間、アイオリアが放つ拳の圧力が飛躍的に高まった。

それに負けじとアイオロスも小宇宙を爆発させる。

「いくぞアイオリア!!」

「死ね、アイオロス!!」

二つの強烈な小宇宙が衝突し、そして……

「見えた!ライトニングプラズマの軌跡が!」

「何だと!」

わずかに上をいったのはアイオロスの方だった。

アイオリアの光速拳の軌道を見切り、その全てを完全に回避する。そしてアイオリアに近付いた瞬間、

「…かかったなアイオロス!!」

ライトニングプラズマを放っていたのとは逆の腕で、至近距離からアイオロスを光速拳が撃ち抜いた!

「ライトニングボルト!!!!!!」

「ガハアツツツ!!」

その一撃でアイオロスの身体が石壁に激突し崩れ落ちる。

アイオロスは瓦礫の中から立ち上がるかと脚に力を込めるが、間近から受けた光速拳のダメージで身体が動かせない。

そしてそこにアイオリアが悠然と近付いてきた。

「フンツ、死にきれないようだな。せめて止めの一撃をくれてや

る！」

「アイオロス！」

「ムウ……手は出すな……。」

それだけを言うと、アイオロスはなんとか片腕を上げた。しかしアイオリアはそれを見ても止まることなく攻め寄せる。

「意地を張っても無駄だ！ライトニング……。」

カアアアアン

その瞬間、アイオリアの脳をアイオロスの放った光線が貫いた。時が止まったかのように辺りが静寂に包まれる。

「なっ……これは!？」

「幻朧……魔皇拳……!」

まさかの一撃に誰もが声を失った。

ムウでさえ驚愕のあまり動きが止まっている。

そして当のアイオロスは小宇宙を高めてやっと立ち上がり、未だダメージの抜けない身体で最後の「一撃を放とうと構える。

「ウウツ!？」

「終りだアイオリア。これでお前は目を醒ます。」

アイオロスの拳が轟音と共にアイオリアの身体を吹き飛ばした。

「アイオロス、あなたは何処であの技を？」

魔拳に操られていたアイオリアを目覚めさせるためにアイオロスが使った技について、ムウが尋ねた。

すると、アイオロスは足元に倒れているアイオリアを見ながら答えた。

「あの技は、かつて私が次期教皇に指名された日に、シオン様が一度だけ見せて下さったのだ。私も完璧に会得した訳ではないが、あの状態のアイオリアを救うには他に手が無かった。」

アイオロスがそう言うと、ムウは納得したのか口をつぐんだ。

そして丁度その時倒れていたアイオリアが呻き声を上げた。

再び目を覚ましたアイオリアは、毒気の抜けたような顔で口を開いた。

「兄さん…？俺は一体…。」

まだ幻朧魔皇拳で受けた精神的なダメージが残っているのか、うまく舌が回らないようだった。

記憶も混乱しているのだろう、心なしか目の焦点も少し合っていないように見える。

それでもなんとか上体を起こしたアイオリアに向けて、アイオロスが言った。

「大丈夫かアイオリア？意識は元に戻ったようだが。」

やがてアイオリアにそれまでの記憶が蘇ってきた。

そしてすぐにアイオリアは自分が教皇に操られてアイオロス達に襲いかかったことを詫びたが、アイオロスは気にせず笑って言った。

「そんな顔をするなアイオリア。結果的にどちらも無事だったのだ、それでいいじゃないか。」

「しかし……」

「過ぎたことをいつまでも気にするな。後悔するよりもこれから先のことを考える。」

その言葉にアイオリアはハツとして顔を上げた。
しかし何か言おうとする前に、ムウが口を開いた。

「アイオロス、もうじき獅子宮の火も消えます。」

「そうか。では私達ももう先に進まなくてはな。」

ムウに言われてアイオロスも改めて獅子宮の出口へと向かおうとする。

だがそこにアイオリアの声が響いた。

「…待ってくれ。俺も一緒に行く。」

それを聞いたアイオロスが立ち止まると、振り返って言った。

「…この先にもまだ多くの黄金聖闘士が待ち構えている。そして

お前のダメージも決して小さくはない。アイオリア、お前はその身体で仲間と闘う覚悟があるか。」

「無論！この俺とてアテナに忠誠を誓った身。アテナの危機に何もせず獅子宮に留まっているなど出来るものか！」

アイオリアの目には強い光が宿っている。

その光にアイオリアの覚悟を見たアイオロスは、前を向いて力強く言った。

「…良く言った…！それでこそ私の弟だ！」

こうして三人に増えた一行は、次の処女宮目指して獅子宮を駆け抜けた。

第十一話 光速の死闘（後書き）

仲間三人目はアイオリア！

これはアイオロスがいる時点で確定でした。

また仲間はあと一人だけ増える予定。

ちなみにアイオリアは幻朧魔皇拳受けた状態にもう一度幻朧魔皇拳受けたら脳味噌破壊されるのではないかと少しだけ思いました。

あと幻朧魔皇拳は教皇が継承する技なので、一応黄金聖闘士なら誰でも使えるはずですよ。

カノンなんかおそらく一度も見てないのにいつの間にか習得してました。

でも牡牛座の聖闘士の幻朧魔皇拳とかなかなか想像つきませんね。

第十二話 神に最も近い男（前書き）

どうやって処女宮を突破させるか凄く悩んだ。

その結果がこれかよ、とは言わないで。

第十二話 神に最も近い男

処女宮の奥深くで、一人の男が目を閉じ、座禅を組んで瞑想している。

男の容姿は、髪は長く伸ばされた金髪でありながら、その顔はどことなく東洋系の風貌のように感じられた。

そして普段滅多なことでは自らの守護宮である処女宮を離れることも無く、聖域の中を動き回るのさえ稀なこの男は、先程から静かに宮の中で佇んでいる。

男の名はシヤカ。

乙女座バルゴの聖闘士であり、更に黄金聖闘士達の中でもその実力は群を抜いているとされ、聖域の人々の間では「最も神に近い男」とも呼ばれているのだ。

かつて、星矢達と黄金聖衣を巡って争った鳳凰星座フェニックスの一輝は、一度シヤカに討伐されかけたことがある。

青銅聖闘士最強と言われ、数ある聖衣の中で唯一灰となっても復活するという最も優れた自己修復機能を備えた鳳凰星座の聖衣を纏う男、正に青銅聖闘士どころか白銀聖闘士と比べても別格の力を持った、かの一輝でさえ絶対に敵わないと言わしめた程の聖闘士、シヤカ。

異教の開祖と同じ名を持つこの男は、その名の通り仏陀の生まれ変わりではないかとも噂され、聖域や周辺の村に住むアテナを信仰する聖闘士や住民の中にあってひとときわ異彩を放っていた。

最も本人はそれにはまるで無頓着で、宮で座禅を組み瞑想に耽る毎日である。

しかし彼は既に閉ざされた目の向こうに、徐々に近づきつつある強烈な小宇宙を感じ取っていた。

「着いたな、あれが処女宮か。」

アイオロス達三人は黄道十二宮第六の宮、処女宮に到達した。

さて、勿論アイオロスはこの宮を知らない訳でも初めて見た訳でも無い。

しかし十三年の時を経て、改めて十二宮を見てみると、慣れ親しんだはずのそれらからは以前とはまた異なった印象を受けるのだった。

「宮の守護者は……シャカ。なるべくなら闘いたくは無い相手ですな。」

「同感だな。」

ムウとアイオリアがそれぞれアイオロスに近付いて言った。

その口調は、同格である黄金聖闘士でさえ闘いを避けようとするシャカの力を物語っている。

「そうだったな。あのシャカか……。」

アイオロスの脳裏に浮かぶのは、少年時代のシャカの姿。

かつてアイオロスが聖域にいた頃、勢揃いしていた黄金聖闘士はほとんどが幼い者達だった。

彼らを率いるアイオロスやサガもまだ15才であり、やや年長者でも10才、その他は7才と少年というより子供と言ってもいいような者達の中で唯一人当時からその時点で最強の聖闘士であったアイオロスやサガに匹敵する小宇宙を放っていたのがシャカだったのだ。

そして驚くべきことに、シャカには聖闘士としての師が存在しない。

シャカは子供の頃から神仏と対話していると言われ、その中で小宇宙の真髄を悟ったとされている。

師も無しに独力で黄金聖闘士としての力を得るなど、長い歴史を持つ聖域でも前代未聞のことだった。

その当時からアテナの聖闘士でありながらどこか達観したような少年とは思えない言動をしていたシャカのことは色褪せない記憶としてアイオロスの中に残っている。

そしてムウとアイオリア、とりわけアイオリアは長いこと十二宮での隣人として過ごしてきたのでシャカの話は三人の中で最も良く知っている。

そのアイオリアが処女宮の手前で他の二人に言い聞かせるように言った。

「シャカに会う前に知っておくべきことがある。もしシャカと闘う羽目になった時は、決して奴の目を開かせてはならない。」

「目を…?」

アイオロスとムウが同時にアイオリアの方を向いた。

言われてみれば確かにシャカが目を開けているのを一度も二人は見たことが無い。

故にシャカは盲目なのだろうと無意識の内に思っていたのだ。だがアイオリアはそれをはっきりと否定した。

「シャカは目が見えない訳ではない。奴が常に目を閉じているのはそうすることで五感のひとつを削り、それによって小宇宙を体内に蓄えているからなのだ。」

「なるほど、つまり目を開くことでその蓄えた小宇宙を一気に解放するということですね。」

シャカが常に目を閉じている理由を聞いて、ムウが得心したかのように言った。

黄金聖闘士でも究極の感覚である第七感を常に意識している訳ではない。

しかしシャカは普段から感覚を一つ削ることで、それを感じ易くしているのだろう。

そんな考えを抱きながら、三人は処女宮へと突入した。

「フツ……ムウにアイオリア、まさか君達が教皇に反旗を翻すとはな……。そして……十三年振りか、アイオロス。」

処女宮で三人は床に直接座したままの姿のシャカと対面する。

話す時も、顔はアイオロス達の方向を向いてはいるもののその目は固く閉ざされたままだ。

そんなシャカにアイオロスは今までと同様にアテナが倒れていることなどを説いたが、シャカの返事はやはり宮を通すことは出来ないうということだった。

「シャカよ、お前も教皇の手先となって私達の行く手を阻むというのか！」

アイオロスはアテナの手足となるべき聖闘士がこうもことごとく教皇側に与力している現状に声を震わせる。

しかしシャカはそれに対して平然と言った。

「何を言っているアイオロス。私はこれでも聖闘士だぞ。間違っても地上の平和のため以外のことに力を尽くすつもりは微塵も無い。」

と、そこでシャカは一旦言葉を切った。

「そもそもこの世に絶対不変の正義など存在しない。アテナといえどそれは変わらん。だが私は目を閉じているが故に、人の本性を見抜くことが出来る。そして……私が見た教皇は正義だ！」

「何だと!？」

アイオリアが怒りの声を上げた。

彼には聖域の聖闘士達を誑し教皇を騙る男が正義だとは到底思えなかった。

更に下ではアテナにも危害を加えたのだ。

聖闘士としてやってはならない行為ではないか。

しかしアイオリアの言葉はシャカには届かなかった。

「アテナも神でありながら配下に背かれるようではどのみちこの先の聖戦を戦い抜くことは出来ないだろう。それならいつそ今の教皇の元で聖闘士としての使命を全うすべきではないかね？」

シャカのその言葉にアイオリアの堪忍袋の緒が切れた。

「これ以上言っても無駄のようだ。ならば力づくで通らせてもらうぞ！ライトニングプラズマ！！！！」

シャカの身体を取り巻くように無数の光速拳の軌跡が走った。対するシャカは両手で印を組むと己の小宇宙を燃烧させて叫ぶ！

「カーン！！！」

瞬時にシャカの周りに発現したドーム状の防御壁がアイオリアの放つ光速拳すら受け止める！

ドドドオオオオオ！！！！

光速拳と障壁が激突し、轟音と共に一瞬の内に炸裂した光速の衝撃にもシャカはその座禅姿を崩していない。

良く見るとシャカの周囲に円を描くように深い溝が刻まれ、その内部は何の損傷も受けてはいないが外側の床は光速拳をもろに受けて大きく抉れている。

「さすがはシャカだ。己の周りに完璧な防御壁を敷いて俺のライティングプラズマにも微動だにしないとは……。相当の力が無ければあれを撃ち破ることは難しいな。かと言って……」

アイオリアの持つ二つの技の内でも、ライトニングプラズマは手数を重視した技だ。

一撃に全ての小宇宙を乗せて放つライトニングボルトに比べれば一発の威力は低い、その恐るべき拳の連打によって相手に回避や防御を許さない。

それに一発の威力が低いと言ってもそれはもう片方の技と比べてのことであり、一つ一つが光速拳であることを考えれば聖闘士として十分な攻撃力を有していると言える。

しかし相手と自らの実力が拮抗しているような時はそうはいかないだろう。

それこそ一発ではなく何百発何千発と命中させなければ大したダメージは与えられない。

そうなれば無論全体の総ダメージはライトニングボルトにも劣らないが、一つ一つの威力が低いがために今回のように強力な防御をとられると、それを突破する力が無いのだ。

そして衝撃の余韻が消え去ると、シャカは手の印を切り替えた。

「フム……君達がそうくるのなら、良からう。かつての仲間故に思っていたが、今、私の中の迷いは消えた！」

シャカはそう言うと、自らの小宇宙を増幅し二つの手の間に集約していく。

激しく膨れ上がった小宇宙を解き放つようにシャカが片手を天に向かって大きく振りかざした。

「オーム!!!天魔降伏!!!!!!」

刹那、シャカから発せられる巨大な小宇宙の衝撃が、荒れ狂う雷

の如くその場の全てを打ち砕く！

「させるか！ライトニングボルト！！！！！」

それを迎撃しようと放たれた拳との間に、再び巻き起こる轟音と激しい衝撃。

その衝撃を最も間近で受けたアイオリアとシャカは、共にその場から大きく後ずさった。

そして今の一瞬のやり取りで互いの力を感じ取る。

それでもアイオリアは怯まず更なる拳を繰り出した。

アイオリアの小宇宙と気迫が込められた拳を前にして、遂にシャカも座禅を解いて立ち上がる。

金属同士がぶつかり合うような音が響いたかと思うと、アイオリアの拳を片手で止めているシャカの姿が目に入った。

「フツ……この程度か。黄金の獅子の力もたかが知れているな。」

「何だと！」

その言葉と同時にシャカの放った光速拳を同じくアイオリアも掌で受け止めた。

互いが互いの拳を掴んで止めている状況では、牽制のため自分の方から先に蹴りを放つ訳にもいかない。

二人共が相手に対して全神経を集中しており、アイオリアの目にはシャカしか映らずシャカの目にはアイオリアしか映っていない。

ただ互いの間で高まり、衝突し続ける小宇宙の猛威が処女宮に吹き荒れる。

そのまま戦闘は膠着するかと思われたその時、シャカの小宇宙がアイオリアの力を凌駕し始めた。

「このままでは千日戦争に陥り決着がつかなくなることは避けられん。ならばもはや君の息の根を止めるしかあるまい。」

「そんなことが出来ると思つか！」

劣勢になりつつもアイオリアの気迫はまるで衰えず、シャカを相手に叩きつけるように叫んだ。

小宇宙が及ばないならパワーで補おうと言わんばかりに全身の筋肉に力を込める。

だがその勢いをもってしてもシャカを退かせることは出来ない、むしろシャカの小宇宙が更に大きく高まりそして……

「アイオリアよ、死の世界へと墜ちるがいい。いくぞ、六道輪廻！！！！！」

突如アイオリアの視界が暗転し、そこに現れたのは死者達の世界！

仏教の死生観である輪廻の思想。

生きとし生けるものは全て輪廻を終えるまで六道を巡り続けるといふ。

六道とは即ち、

「地獄界」 火の海、血の池、針の山。尽きる事の無い断末魔の恐怖。

ここに落ちた者は、未来永劫果てることなく苦しみもだえる。

「餓鬼界」 体は骨だらけ、腹だけが膨れ上がり、常に食べ

物をもとめ、死肉さえも食らい尽くす、むさぼりの日々が続く餓鬼道に落ちた者達の世界。

「畜生界」 まさに動物の姿に転生させられた者たちが織り成す、弱肉強食のけだもの世界。

「修羅界」 血と殺戮……。常に誰かと戦わなければならぬ修羅の道。休むことなく永遠に戦いが繰り返される世界！

「人界」 喜怒哀楽……。揺れ動く感情にさいなまれ続ける不安定な人間の世界！

「天界」 極楽の世界と言われるが、ここは思い一つで人界を通り越し、いつでも畜生、餓鬼、地獄の界へ転がり落ちる最も危険な場所。

「アイオリア、果たして君が墜ちたのはどの世界かな？」

シャカの言葉が終わると同時に、アイオリアの身体は力を失い膝を折って崩れ落ちる。

そして俯せになって倒れているアイオリアを見下ろしながらシャカは一言呟くいた。

「……まだ命はあるようだな。さすがは黄金聖闘士の一角……とはいえ再び意識を取り戻すことはあるまい……ここで止めを差すのも慈悲というものか……。」

倒れるアイオリアの首を狙って手刀を振り上げるシャカ。

だがしかし、それが下ろされるよりも早く一発の光速拳がシャカの手首を撃った。

「…君か、アイオロス。まだこの処女宮に留まっていたとは思わなかったぞ。やはり弟の命を見捨てるのは忍びないもののかな？」

シャカの閉じた目の先に立っていたのは紛れもなくアイオロスだった。

そして一息でアイオリアの元まで駆け寄ると、弟の身体を少し離れた所に横たえる。

シャカは敢えてそれを止めようとはしなかったが、やがて目の前に立ち塞がったアイオロスに向かって言った。

「君一人か…。どうやらムウは先に行ったようだな。アイオリアの命を救うためにわざわざここに留まるなど、君はアテナを助けると言っておきながら肉親への情を優先させるのか？」

シャカの言葉に非難の色が混じるのは、アイオロスの行動がアイオロス自身の言に反していると見たためか。

しかしアイオロスはわずかの間目を閉じると、自分自身に言い聞かせるように口を開いた。

「私はかつてアイオリアにこう言ったことがある。……謂われ無き暴力で消えそうな命…愛すべき女性や肉親…慈しむべき子供達…大切な民…そして信頼すべき友、このどれ一つをとってもアテナと同じく命を賭けて守るに値するものだ。そしてこの想いはアテナに対してなんら恥じる所は無い！」

アイオロスはきっぱりとそう言い切った。
その言葉にシャカはそうか、と小さく呟くと手に印を組み戦闘態
勢でアイオロスと対峙する。

「アイオリア同様君も地獄へ墜ちてもらうぞ。六道輪廻！！！！」

アイオロスの前に六道地獄が姿を現す。

身体から精神が六道輪廻に引きずり込まれていく感覚の中、アイ
オロスは自身の聖衣に備わる翼に小宇宙を込めて天を翔る。

一度アイオリアが受けたのを見たからなのか、小宇宙を瞬間的に
高めることで六道輪廻を脱出することが出来た。

そして技を放った直後のわずかな隙にシャカ目掛けて踏み込むと、
己の右拳に小宇宙を乗せて目の前の相手の身体に叩き込む！

「行け！アトミック・サンダーボルト！！！！」

「カ…カーン！！！！」

咄嗟にシャカも自身の周囲に結界を張った。
そして先程と同じく処女宮に衝撃波が走る。
しかしさっきまでとは違い……

「今度は無傷とはいかなかったようだな。」

するとシャカの額からわずかに血が流れた。
聖闘士にとってその程度のダメージは皆無に等しい、しかしシャ
カの強固な結界をアイオロスの拳は貫いたのだ。
流れる血を拭ったシャカの顔にかすかな笑みが浮かぶ。

「まったく…どうやら君という男を侮っていたようだ。君ほどの

相手に生身のまま死界に落とすのは私でも骨が折れる。よってこれより私の全力をもって君の五感を剥奪する！」

そして遂に封じられていたシャカの視覚が解き放たれた！

カツ、と目を見開く、ただそれだけの動作でシャカの小宇宙はそれまでとは桁違いに膨れ上がる。

シャカの身体から溢れ出るあまりに強大な小宇宙に息を呑むアイオロス。

「受けよアイオロス、乙女座のシャカ最大の奥義！天舞宝輪！！！」

シャカの背後に浮かび上がる巨大な曼陀羅。

その陣に捕らえられたアイオロスの動きを封じるように小宇宙の重圧がのし掛かる。

「天舞宝輪とはこの世の真理にして完璧なる調和の世界。その中では相手は攻めることも守ることも不可能となる。まさしく攻防一体の戦陣なのだ！」

「ムウウ……何という恐るべき小宇宙。このままではやられる……！」

硬直するアイオロスを前に天舞宝輪の威力が襲いかかる。

「第一感剥奪！！！」

アイオロスの身体は陣全体から押し寄せてくる小宇宙の波動に天井近くまで打ち上げられ、そのまま受け身も取れずに処女宮の石畳に激突する。

身体中の痛みを堪えて立ち上がるアイオロスだったが、唐突に異変に気付いた。

「なっ……これは!？」

「今の一撃で君の触覚を破壊した。もはや君には立つのがやっただろう。どうだ？生き延びたければ大地に頭をこすりつけて私を拝め。ここで引き返すことを認めてやってもいいぞ？」

シャカの言う通りアイオロスは今踏みしめている床も、纏っている聖衣の肌触りも感じる事が出来なかった。

拳を握ろうとしてもその感覚が無い。

だがそれでも辛うじて立っている身体を無理矢理動かして攻勢に出る。

「断る！アテナの命がかかっているのだ！ゆけ！アトミック・サンダーボルト！！！！！」

「無駄だと言ったはずだ。第二感剥奪！！」

再び吹き飛ばされ、立ち上がるとアイオロスの目からはその光が消えていた。

「今ので視覚を奪った。さあ次はどこがいい！」

しかしその瞬間アイオロスとは別方向から声がかかった。

「ま……待て！」

振り向いたシャカはそこに立つ男を一瞥すると不機嫌そうな声で

言った。

「アイオリアか…。私の六道輪廻を受けて立ち上がったことは誉めてやるう。だがそのまま宮を抜けていればいいものを……君も兄と一緒に逝くかね？」

文字通り目を開いて覚醒したシャカを相手にそれでもアイオリアは力強く吼えた。

「そんなことをさせてたまるか！お前の小宇宙など獅子の牙で打ち砕いてくれる！ライトニングボルト！！！！！」

激しく輝く光球を纏うほどのアイオリア渾身の拳。

だが小宇宙を振り絞って放つ光速拳すら今のシャカには届かない。

「天舞宝輪の中でそんな技は通用しないぞアイオリア！君からは味覚を奪ってやるう！」

シャカの小宇宙がアイオリア目掛けて襲いかかる。

しかしそれが命中する寸前アイオリアは横から強い力で突き飛ばされた。

「まさか…！兄さん！」

そこで目に飛び込んだきたのはアイオリアを庇うように立ち尽くすアイオロスの姿だった。

弟に代わって天舞宝輪を受ける姿を見たシャカが思わず声を漏らす。

「まだ動けるとは驚いたな。そして弟のためとはいえ躊躇うこと

無く自ら割って入るとは……。」

アイオロスは既に触覚、視覚、味覚の三感を失い見ることも話すことも出来ない。

故に小宇宙を介したテレパシーでアイオリアに話しかけた。

『アイオリア、ここは私に任せてお前は先に進め。そしてなるべく早くムウと合流するんだ。』

「し……しかし……。」

『いいから行け！私のことなら心配するな。必ずシャカを倒して後から追いつく！』

「うっ……く……分かった、俺は先に行こう。だが兄さん、絶対に追いついてくれよ……！」

『勿論だ！』

その言葉を聞いてアイオリアはシャカには目もくれずに宮の出口へと走りだした。

『見逃すとは詰めが甘いな、シャカ。』

「なに、君一人をここで倒せばそれで十分だ。残りたったの二人。君の力無しにこの先にある宮を抜けることはできまい。」

アイオリアの後ろ姿は既に見えないが、彼の去った方角に一度目を向けると再びアイオロスの方に向き直って言った。

「それに君は自分のことをもつと心配したらどうだ。五感を失えば廃人も同然、それももう目前にまで迫っているというのに。」

『……………。』

「話す気も失せたか…？まあいい、これで私の声が届くことは無い。第四感剥奪！！」

聴覚が破壊されアイオロスは完全に無音の世界に包まれる。

それでもはや動くことも出来ず、ただ死を待つばかりかと思われた。

しかしそこでシャカはふと気付いた。

アイオロスの小宇宙が未だ衰えていない、いやむしろ更に高まりつつあることに…

「なっ……………何だこの小宇宙は！？」

一度気付けばそれは更に速度を増して加速度的に膨れ上がっている、シャカの小宇宙すら覆い尽くすほどの爆発的な高まりを見せる！

『フツ……………何を驚く。私達黄金聖闘士は皆、第七感を持っている。つまり小宇宙の真髄を体得した者であれば五感を絶たれた程度では戦闘不能に陥ることは無い！』

「バカな……………黄金聖闘士とはいえ五感を絶たれて無事でいられる

筈がない。そ……それに何故ここまで小宇宙が高まるのだ!？」

『分かっているのだろう、私はお前の真似をしたただけだ。お前は五感の一つである視覚を絶ち第七感を研ぎ澄ますことで小宇宙を高めている。ならばより多くの感覚を封じることですの私の小宇宙は一時的だがお前を超える!この勝負、私が制しよう!』

アイオロスの小宇宙が一気に高まり、シャカの作り出す天舞宝輪の陣を圧倒した。

「クツ……!あとわずかで天舞宝輪は完成する。いくらなんでも五感全てを剥奪すれば……!」

シャカも最後の一撃を放とうと限界まで小宇宙を集中する。

そして、その瞬間は訪れた。

シャカとアイオロスの小宇宙が一気に膨れ上がり同時にそれが爆発する!

「くらえアイオロス!第五感剥奪!!」

『燃え上がれ我が小宇宙……そして全てを貫け!インフィニティ・ブレイク……!!』

その瞬間、処女宮を黄金の光が貫いた。

天舞宝輪によって生み出された曼陀羅が破れ、もとの空間に戻ったアイオロスとシャカはじっと睨み合っていた。

二人は共に身体も小宇宙も限界が近かったが、相手を見据える眼光は尚も鋭い。

しかし、やがてシャカの瞳から敵意が消えた。

そしてそれに気付いたアイオロスも緊張を緩める。

「フ……今回は私の負けか。天舞宝輪を破られたとあってはな…。

」

「…では処女宮を通してくれるか？」

「ああ、構わん。」

あれだけの闘いの後とは思えぬほど、あっさりとシャカはアイオロスが宮を抜けることを承諾した。

アイオロスはそれが気になったが、その理由をシャカは自ら語りだした。

「腑に落ちないといった顔つきだな、アイオロス。私が君を通す理由は、君の小宇宙が私の心に迷いを植えつけたからだ。」

「迷い？」

「そうだ。君ほどの聖闘士がアテナのために命を投げ出して闘っている。その覚悟が私の心を惑わせるのだ、果たして私は正しかったのかと。…きっとその答えはこの闘いの先に見えるのだろう。だから私はこの処女宮でその結末を見届けよう。」

「そうか…。」

アテナの元で十三年間雌伏していたアイオロスだからこそ、その気持ちが痛いほど分かる。

自分の貫く正義は本当に間違いないのか、かつて共に過ごした仲間と闘い十二宮を上る中で、それを考えたことは一度や二度ではない。

だが全ての決着は教皇の元に着いた時に、その心で今までアイオロスは闘ってきたのだ。

それを察したのか、シャカが続けて口を開いた。

「それと一つ。もし君が教皇の間に辿り着いたとしても、教皇を討つようなことはしないでくれないか。」

「何…?」

「彼の本質は間違いなく正義なのだ。少なくとも、私は彼をそう見た。」

アイオロスはその言葉にどこか安堵する気持ちを覚えていた。

それは、偽りの衣を纏い十二宮の最奥で待つサガが、自分の知るかつてのサガであると思いたいだけなのかもしれない。

しかし例えそれが誤りだったとしても、サガの真実を受け止められるのはアイオロスただ一人だろう。

だからこそ彼は教皇の間を目指す。

アテナと友を救うために。

そしてアイオロスはシャカに言った。

「そうだな。それは私も良く知っている。」

シャカはそれを聞いて首を傾げたようだったが、アイオロスには既に走り去っていた。

第十二話 神に最も近い男（後書き）

シャカの強さが伝わるといいなあと思って書きました。

シャカの技って効果が良く分からないもの多いですよね。

天魔降伏はまあギャラクシアンエクスポージョンに近いものとしていいかも……………でも六道輪廻は一体何だ、と思う人はいるはず。

十二宮編でのvs一輝戦ではシャカはなんと以外にも決め技として六道輪廻を選んでいきます。

天舞宝輪が奥義であることは間違いないのですが、止めを差すには六道輪廻を使おうとしていますね。

では六道輪廻はいわゆる積尸気冥界波のような即死技なのかというとちょっと分かりにくいです。

ただ星矢達の世界では冥界というものが死後の世界として存在しているので六道輪廻は地獄に落とすような技では無いような気がします。

作者のイメージでは六道輪廻は精神に作用するアナザーデーモンシヨンのようなものではないかと考えています。（精神をどこかに飛ばす的な？）

まあそれはそうとして、アイオロスの第二の技、インフィニティ・ブレイク、これは説明があるかもしれませぬ。

星矢ではLCよりもずっとマイナーと思われるエピGからの技です、
因みに漢字で書くと無限破碎。（今回割りとエピG要素多いかも）

作中ではアイオロスの手元から螺旋状に放たれる矢の形をした光線
?として描かれました。

これを原作風に考えると、いわばロス版ライトニングプラズマでは
ないかと考えております。

他の光速拳っぽい技も似た感じに描かれているので。

で、拙作中での設定は上の通りロス版ライトニングプラズマで願
いします。

一応アイオリアのとの違いとしてはライトニングプラズマは乱雑な
軌道で良く言えば読みにくい、悪く言えば軌道が制御出来ない。

対してインフィニティ・ブレイクはアイオロスの意志で軌道を自在
に制御可能、つまり相手に合わせて流星拳と彗星拳を一つの技で使
い分けられる、と言った感じで考えています。

第十三話 もう一つの攻防（前書き）

話の流れで天秤宮と人馬宮はスルーします

第十三話 もう一つの攻防

処女宮を抜けたアイオロスは先に行ったムウとアイオリアを追っていた。

天舞宝輪によって奪われた感覚も徐々に戻ってきている。

走るペースを上げながら、段々と次の天秤宮に近付いていった。

「天秤宮…… 老師は今、五老峰にいるからここは無人のはずだな。」

そうは言ってもやはりある程度は周囲を警戒しつつ天秤宮の中を進んでいく。

当然だが老師はおろか、ムウ達の姿も宮の中には見えなかった。もしかするとこの先の宮で守護者と既に対峙している可能性もある。

大きな小宇宙は感じられないため何とも言えないが、次の宮は蠍座ピオンのミロが守る天蠍宮スコ。

……日本での様子からして闘いは避けられないか……

そんなことを考えながら走っていると、視界の隅にこの場にあるはずのないものが置かれているのが目に入った。

そこにあったのは鈍い金色の光を放つ、人の背丈の半分はあろうかという大きな箱だ。

この箱をアイオロスは知っている、聖闘士たらんとする者なら誰もが望むものがそこにはあった。

「これは……天秤座の黄金聖衣か。」

五老峰にいないはずの老師の聖衣が何故ここに？そう考える間もなく、天秤座の聖衣はドーンという音を立てて、まるで流星のように天秤座から飛び去ってしまった。

「ひよつとすると老師も私達を見守ってくれていたのかも知れないな……。」

空の彼方、遠く五老峰へ向かって黄金の尾を引く様子を見て、アイオロスは一人そう呟いた。

やがてその光も薄れていき、後には何も無い天秤座が残された。そしてアイオロスも、先を急ぐべく天秤座をあとにした。

所変わってここは白羊宮の門前。

現在火時計の火は天秤座に差し掛かっている。

アテナの胸に突き刺さった矢は時間が経つにつれてますます深く刺さっていくため既に黄金の矢は半分以上上がり込んでおり、心臓を突き破るのも時間の問題であった。

「……なあ、この矢本当に教皇の力でしか抜けないと思うか？」

最初にそんなことを言い出したのはアテナの身を守るために留まった青銅聖闘士達の中でも、一番堪え性の無い星矢だった。

「えっ……ちよつと、星矢何する気!？」

「いや、だつてこれ思いっきり引つ張ったら抜けそうじゃん。」

慌てたような瞬の声にも星矢は動じなかった、というより単に聞き流していただけだった。

軽く無視されたようなものだが、それでも瞬はめげずに声を張り上げる。

「無茶だよ星矢、そんなこと出来る訳ないよ!」

しかし星矢はフン、と鼻で笑つて言った。

「おいおい、俺達は聖闘士だぜ。こんな小さな矢の一本ぐらい簡単に抜けるって。」

そう言つて刺さつた矢に手を伸ばそうとする星矢だったが、瞬がそれを後ろから押さえつけた。

「おい放せよ、瞬!」

「だ……駄目だよ。放したら矢を抜こうとする気でしょう!」

「別に試してみるぐらいいいだろ!」

瞬から離れようとしたばたする星矢の姿を見て、堪りかねたのか紫龍も助太刀する。

「おい星矢、いい加減にしろ。この矢はお前には抜けん。」

「何だと!」

あつさりそう言つてのけられて頭に血が上つた星矢は、瞬が止めるのも振り切つて今度は紫龍に詰め寄つた。

「紫龍!何でお前にそんなことが分かるんだよ!」

掴みかからんばかりに紫龍に問い詰める星矢。

だがその時、星矢と紫龍の間を隔てるように氷の壁が出現した。

「まったく……お前達もう少し静かに出来ないのか。」

「むう……氷河。」

突然氷壁が現れたことで、皆もう一人の青銅聖闘士に目を奪われる。

氷の聖闘士はアテナの傍ではなく、やや離れた位置に立つたまま星矢達に対して言葉を続けた。

「だいたい星矢、俺達にこの矢が抜ける位ならとつくにアイオロス達が抜いているだろ。」

「あつ……。」

「それに万が一抜けたとしても、もうここまで深く刺さっているのだぞ。下手に抜いたら大出血だ。そうなってしまうたら俺達ではどうしようもあるまい。教皇しか抜けないというのなら、大人しく

アイオロス達が教皇を連れてくるのを待つて安全にこの矢を抜いてもらうのが一番だ。」

一分の反論の隙も無い正論を述べられて、星矢は一言も言い返すことが出来ずに頂垂れた。

しかしすぐに気持ちを入れ換えたのか、他の三人に頭を下げた。

「氷河の言う通りだな。俺が悪かったよ。」

「フツ……別に。」

「うん。僕も気にしてないよ。」

「俺もだ。アテナを守るためにはこんないざこざを起こしている訳にはいかないからな。」

こうしてまた元のようにアテナの周囲を守ることにした四人。だがその周りは、いつの間にか人影に囲まれていた。

「おい見ろよ。あの小娘を守ってるのはあんなガキの聖闘士共だ。これなら捕らえるのも楽勝つてもんだぜ。」

突如現れた雑兵軍団、その先頭に立つ男が星矢達を見るなり嘲笑うように言った。

見ると、周囲は既に何百人もの雑兵達に取り囲まれている。すぐに星矢達はアテナの周りに集まったが、雑兵達はその包囲網をじわじわと小さくしていく。

「何だお前らは！それ以上こっちに近付くとただじゃおかないぜ！」

開口一番に星矢が大声を上げた。

瞬や紫龍も近付いてくる雑兵を睨み付ける。

しかし取り囲んでいる雑兵達は星矢達の態度を見ても、自分達の数を恃んでいるのかまるで取り合おうとはしなかった。

それどころか更に星矢達との距離を詰めてくる。

「フッフッフ……俺達はな、そこに倒れているアテナを名乗る不届き者を捕らえるよう教皇から仰せ付かっているのだ！痛い目に遭いたくなかったらさっさとそこをどけえ！」

そう言つて雑兵達は一斉にアテナ目掛けて殺到した。

何百人もの雑兵達が押し寄せてくる中、星矢達も互いに目配せしてそれぞれの立ち向かう方向を決めると雑兵達に突撃する。

「へっ、痛い目見るのはお前らの方だ！お嬢さんには指一本触らせやしないぜ！」

正面から近付いてくる雑兵達に向かって星矢が駆ける。

そして小宇宙を十分に高めて拳を放った。

「行くぞ！ペガサス流星拳！！」

小宇宙の高まりに応じて星矢の拳が音速の壁を超える。
一秒間に百発放たれるというその拳はまさしく流星の如し。
雑兵達は成す術もなく一度に十数人が吹き飛んだ。

一瞬で宙を舞うことになった仲間達の姿に雑兵達の勢いがわずかに低下する。

しかし相手はたかが四人と数にものを言わせて再び突っ込んできた。

「こ……今度は相手の横から回り込めえ〜！」

またしても先頭付近の何人かが吹っ飛ばされたが、その隙に出来た星矢の死角を掻い潜って雑兵達がアテナの元に接近する。

そして後数mという所で雑兵達は、今度は真横から衝撃を受けた。

「アテナを守るのは星矢だけでは無いぞ。受ける！廬山龍飛翔！」

「うわああああ！」

紫龍の放った龍のオーラを纏った拳に雑兵軍団は一撃で蹴散らされた。

どうにかしてそれを回避した一団もあったが、そこには更なる攻撃が襲いかかる。

「な……何だあ、この氷の輪は〜！？」

「腕が！身体が凍りついていく〜！」

「カリツォー……その氷の輪は増え続け、やがてお前達を覆い尽くす。」

氷河のカリツォーによって動きを封じられ、瞬く間に氷像と化す雑兵達。

星矢や紫龍も攻撃の手を休めず、この時点で既に雑兵達の半分近くが戦闘不能である。

「くそっ、こうなったら全員で四方から一斉に行くぞ！」

雑兵達の中の誰かがそう言つと、それまでの密集形態とは違って変わって散らばったまま向かってきた。

星矢達の力は雑兵達と比べても圧倒的だがいかんせん数が少なすぎる。

固まって襲ってくるなら一気に吹き飛ばせるが、こう散らばられると目標が分散して上手く倒すことが出来ない、結果として星矢達の守りを抜ける雑兵が出てくるのだ。

そして雑兵の一人が遂にアテナに手を掛けようとした、その時。

「ぎゃあああっつ！？」

「僕だって忘れてもらっちゃ困るよ！この鎖は触れるだけで身体に高圧電流が流れるような衝撃を与えるのさ。お嬢さんの周りには既にネビュラチェーンを敷いた、もうあなた達は近づけないよ！」

「な……なにい！？」

見ると、アテナの周囲を守るように瞬のアンドロメダの聖衣から鎖が螺旋状に伸びている。

そして瞬の言葉通り、星矢達の攻撃をすり抜けてきた雑兵達の内

誰一人としてその鎖の陣を抜けることは出来なかった。

アテナを前にして進むことも出来ず後ろでは星矢達が暴れまわっているという状況で、雑兵達に出来ることは捨て台詞を吐いて逃走することだけだった。

「ふう… やつと逃げていったか。あんな雑魚が何人来たって負けるかよ。」

星矢は額に汗もかかずに言った。

倒された雑兵達はまだ動ける者が運んでいったので、既に彼らの周りには誰もいない。

氷河や紫龍もあれだけの数の兵を相手に闘っていたにもかかわらず、息一つ乱さずに再びアテナの元に集合した。

「ひとまずこれで一旦敵は片付いたか。だが、まだ聖闘士が敵となつて向かつてくる可能性はゼロでは無い。気は抜けないぞ。」

「大丈夫さ。誰が来ても返り討ちにしてやるぜ。」

たった今雑兵達の攻撃を退けたからなのか、態度も大きく言う星矢。

無論星矢も口で言うほど簡単だとは思っていない。

ただ空気を明るくするために軽口を叩いただけだったのだろう。

しかし……

「ならばこちらも言わせてもらおう！邪魔をするなら蹴散らすまでだ！」

「!？」

彼らの前に現れた男の姿は想像を遙かに超えていた。

全身を覆う黄金の鎧、それはその男が八十八の聖闘士の中でも最強の存在であることを示している。

「!……黄金聖闘士!？」

うるたえる星矢達に男が大きな声で名乗りを上げた。

「そうだ、教皇の命によりその女は連れていく。この蠍座スコルピオンのミロの手によってな！」

ミロの小宇宙がその場で大きく膨れ上がっていった。

星矢達は目の前に現れた黄金聖闘士に対して迎撃の構えをとった。そして四人全員で並びアテナの前に壁を作る。それを見たミロは星矢達を威圧するように言った。

「そこをどけ。俺の邪魔をしなければ貴様らの命までは取らん。大人しくその女を渡せ。」

殺気と小宇宙が入り交じった強いプレッシャーが四人に重くのし掛かった。

星矢達は膝を付きそうになりながらも、精一杯小宇宙を燃やして立ち向かう。

「やなこつた。俺達は死んでもここをどくもんか！」

そして星矢は先手必勝と必殺技を繰り出した。

「ペガサス流星拳！！」

マツハの速さを誇る星矢の拳。

しかしそれは黄金聖闘士に届かせるにはあまりにも力が足りなかった。

特に防御するでもなく、その場から一步も動こうとしないミロに向かつて音速の拳が襲いかかる。

一瞬だけ相手を貫いたように見えた星矢の拳は、何の抵抗も受けずにミロの身体をすり抜けた。

「気は済んだか？貴様ら青銅の拳など俺から見ればわざわざ防御するにもあたらん。その場でゆっくり回避するだけだ。」

「クツッ！もう一度だ！行け！ペガサス流星拳！！」

「フンッ！」

ミロが素早く腕を振り上げ、流星拳ごと星矢の身体を吹き飛ばす。

その勢いで星矢は大きく弾き飛ばされ、そのまま大地に叩きつけられた。

「星矢！」

「どうした、次はお前らの番だぞ。」

いつの間にかミロが移動していた、そして三人同時に光速拳を見舞うと瞬、紫龍、氷河は何も出来ずに天高く打ち上げられる。

「青銅でありながら黄金の俺に立ち向かったのは大したものだ。だが所詮は青銅、時間稼ぎにしかならなかったな。」

そして倒れているアテナに近づくミロの目に、立ち上がるようにする星矢の姿が映った。

「ほう……光速拳を受けて立ち上がるとは、並の聖闘士ではないな。だが立ち上がってどうするというのだ？」

「だ……黙れ！これならどうだ！ペガサス彗星拳！！！」

ただひたすら拳を放つのが流星拳なら、拳を一点に集中して放つのが彗星拳だ。

全ての拳が集中したその威力はなんと流星拳の数十倍にもなるという。

しかし威力は上がっても速度が上がった訳ではない。

黄金聖闘士のミロにしてみれば余裕で回避出来る攻撃、だがミロは敢えてそれを受け止める。

パアアアアン、と小気味のいい音が響き星矢の渾身の彗星拳はミロのかざした掌によってあっさり止められてしまった。

全力で放った拳が片手で軽々と止められるという屈辱、しかしそれでも星矢は諦めること無く拳を繰り返す！

「その気迫は買うが、そんな攻撃では俺にかすり傷一つ負わせることは出来んぞ。」

星矢の拳をかわしながら、ミロが拳を飛ばす。

再び光速拳をくらい吹っ飛ばされる星矢、しかも今度は岩に身体を叩きつけられ更にその岩が砕け散った。

だがやはり星矢は瓦礫の中から立ち上がる、そして先程倒した三人も同じく立ち上がるうとしていた。

その様子を見ていたミロがふと星矢達の纏う聖衣に目を留める。

「そうか妙に頑丈だと思ったが、光速の拳を受けても傷一つ付かないその聖衣、ムウに修復してもらったのだな。ならば俺の攻撃に耐えたのも頷ける。」

その言葉に星矢達は思わず自分の聖衣を眺めた。

聖衣の傷を直してくれただけでは無く、防御力まで大きく上げてくれていたとは！四人は改めてムウに感謝した。

そしてミロと対峙する星矢達の顔は前以上の闘志に溢れている。

ミロもそれを認め、簡単に仕留められる相手ではなくなったのを感じていた。

「いいだろう、見せてやるぞ蠍の一撃を！」

急激な小宇宙の高まりに星矢達の身体がすくむ。

「うっ！？」

「なにい！」

「これは！？」

「リストラクション！！！」

星矢達の身体は三口の一撃によって全身が麻痺し、まるで自分の身体ではないかのように指一本動かない！

そして動けなくなつた星矢達の横を悠々と通り過ぎようとする三口の前に、一人氷河が立ちはだかつた。

「むっ！貴様、リストラクションをかわしていたのか！？」

無言で拳を振るう氷河に再びリストラクションを仕掛け、動きを封じようとするが何故か氷河には通用しない。

それどころか逆に三口の周りに氷の輪が浮かんでいる。

「氷の輪…お前…！カミュの弟子か！」

「何故お前が我が師のことを知っている！」

「カミュとは長い付き合いだからな。だが今はそんなことどうでもいい！」

マントを翻して輪を砕き三度目のリストラクションを放つも、やはり氷河はものともしない。

「なるほど、自分の周りに氷壁を張ってリストラクションを防いだのか、水と氷の魔術師と言われたカミュの弟子というだけのことはある。」

「何を！くられ！ダイヤモンドダスト！！」

凍気を込めた氷河の拳がミロの身体を凍結させる！

「やった！ミロを凍らせることが出来たぞ。」

しかしそう思ったのも束の間、凍りついたはずのミロを覆う氷の膜に亀裂が入った。

そして残った氷が完全に崩れ落ちると、中から何事も無かったかのようにミロが現れる。

「黄金聖衣を凍結させるには力が足りなかったようだな。そして……むっ！？」

突然振り返ったミロの視線の先には身体の麻痺から解放されたのか、星矢達三人が動き出していた。

そしてこちらに向かってくる星矢達を止めようとするが、氷河が作り出した壁の前にことごとく弾かれる。

星矢達にまでリストラクションが通らなかつたことに驚いたミロの身体がわずかの間硬直した。

その隙を突いて、ミロの右手に瞬の鎖が絡み付く。

「今だ！サンダーウェーブ！！」

アンドロメダの聖衣に備わっている二本の鎖の内、ミロの片腕を拘束しているのは逆の方の鎖が稲妻のようなジグザグの動きでミロを目掛けて突き進む！

しかしミロは面倒臭そうに己の腕を封じている鎖に指を向けると、一息でそれを粉碎しその拘束から逃れた。

「フン……こんな脆弱な鎖で黄金聖闘士たる俺の動きを止められるとでも思ったか！」

そして迫りくる鎖の鋭い一撃を迎え撃たんと左腕を引いた途端、ミロの左半身が凍りついた！

「な……なに！？」

左半身を覆う氷は黄金聖衣を凍らせるほどの力はないが、それでも一時的に相手の動きを止めるには十分な威力。

そして、わずかとはいえ完全に動きの止まったミロの身体に瞬間の鎖が命中する！

瞬のありつたけの小宇宙を込めた鎖の一撃にミロは大きく後ずさった。

「ううっ！……まさかたかが青銅聖闘士の攻撃がこれほどの威力を持つとは……！」

あと一瞬早く防御が間に合っていれば……とは思ったが、戦場ではそんな思考も仇となる。

そのことにミロが気付いた時には、既に背後に回り込んだ星矢と紫龍は拳を振り抜いていた。

「ペガサス彗星拳……！」

「廬山昇龍霸!!」

最下級と言っても聖闘士の拳、そして間近でアイオロスを見たことやムウの助言も相俟って、並みの青銅聖闘士とは比べ物にならない威力の攻撃がミロの身体に襲いかかる!

ほぼ同時に繰り出された二つの拳は対処が遅れたミロを直撃し、彼を空高く打ち上げた。

だがそれを喜んでいられる時間はごくわずかに過ぎなかった。

頭から落下し大地に激突したはずなのにミロは即座に立ち上がる、しかも黄金聖衣に覆われた身体には傷一つ無い。

そのあまりと言えばあまりの実力差に星矢達でさえ心が折れそうになった。

全力で放った攻撃が通じない、これは攻撃が届かないこと以上に心に刺さる。

攻撃が当たりさえすれば、という甘い考えすらまるで通じないほど相手の実力は強大だった。

そして立ち上がったミロは、もう既に星矢達の目の前まで近付いていた。

慌てて構える四人の前でミロは静かに小宇宙を燃やす。

「…本当にここまで粘るとは思わなかったぞ。改めて言おう、お前達は大したものだ。…だが教えてやろう、さっきのリストリクシヨンで動きを封じられていた方がよほど楽だったということをな!」

膨大な小宇宙がミロの指先に集中し光の速さで敵を貫く真紅の光針と化する!

「くられ真紅の衝撃！スカーレット・ニードル！！！！」

小宇宙が高まったとは言ってもやはり青銅聖闘士、光速の動きを見ることも出来ない星矢達に、ミロの指拳が襲いかかる！

その攻撃は星矢、瞬、紫龍、氷河の聖衣を貫きそれぞれに一発ずつ命中した。

しかし、その衝撃は彼らが想像していたよりもずっと少なかった。確かに吹っ飛ばされはしたが、拳の威力、勢いは最初に放っていた光速拳と大差ない。

いやそれどころかむしろ劣っていると言ってもいいくらいである。ミロの指拳は結局ムウの修復した新生聖衣を貫通しただけで、星矢達の身体にはせいぜい針で刺したような小さな傷痕を残しただけだ。

だがスカーレット・ニードルの真の威力を星矢達を知るまでにさほど時間はかからなかった。

唐突に四人の身体にスカーレット・ニードルの傷痕から激痛が走る。

まるで蠍の毒が身体中に回っていくかのように、激しい痛みが星矢達の全身を駆け巡る。

その凄まじい痛みの前では聖闘士ですら立つこともままならない。そして傷口を抑えて苦しんでいる星矢達に向かってミロが口を開いた。

「この俺のスカーレット・ニードルは十五発撃つまでに敵に降伏か死かを迫る慈悲深い技だ。さあお前達も選ぶがいい、降伏か死か！？」

ミロが星矢達に指先を向けて叫ぶ。

もしも四人が再び抗うようなら、彼は容赦無く更なる激痛を与えてくるだろう。

それは星矢達にとっても明白過ぎる事実。

しかし、ミロは彼らの覚悟を見誤っていた。

なんと！スカーレット・ニードルの激痛に苛まれながらも、星矢達は立ち上がってきた。

彼らの闘志は未だ屈さず。

アテナを守る、ただそれだけのために！

「教皇の間に向かったアイオロス達は何人もの黄金聖闘士を相手に闘っているんだ……それに比べたら……俺達だって、一人ぐらい止めてみせるぜ！」

「そうだね。アイオロスは僕達にアテナを託したんだ！ここで諦められないよ！」

星矢と瞬が痛みを跳ね返すように一気に立ち上がった。

紫龍と氷河もそれに続く。

「俺達とてアテナを守る聖闘士、こんなところで倒れていたら今まで闘った奴らに笑われる！」

「四人がかりでいけばきつと勝機はあるはずだ……！」

たかが青銅聖闘士、相手を認めてはいたものの、ミロは心のどこかでそう侮っていたのだろう。

だがここにきてその考えは綺麗さっぱり消え失せた。
聖闘士として男として、星矢達は全力をもって闘うに足る、それこそが彼らへの礼儀だとミロはようやく認識する。

これほどの聖闘士を死なせるには惜しい、そうは思うがだからと言つてこの闘いで手を抜くのは星矢達に対する侮辱でしかない。

今こそミロも小宇宙を限界まで燃やして彼らに挑む！

「良かろう、ならば俺も全力で貴様らを倒す。行くぞ！」

その瞬間、ミロの姿が四人の前から消えた。

咄嗟に星矢が流星拳を放つも空を切る。

そして次の瞬間四人の背後に現れたミロの手によって、星矢は地面に叩きつけられた。

即座に後ろを振り返った紫龍も、構える間も無くミロの拳に吹き飛ばされる。

それを見た瞬間がネビュラチェーンを、氷河がダイヤモンドダストをそれぞれ繰り出す掠りもせず弾き返され、二人揃って宙を舞った。

倒れ込む四人の前で再びスカーレット・ニードルの構えを取るミロ。

そしてその指先から真紅の衝撃が迸った。

「ぐうううっ！」

今度は一人に二発ずつだった。

別の箇所にも傷を受け、声にならない悲鳴を上げる星矢達。

しかしそれもまた新たな痛み掻き消される。

次々に撃ち込まれる激痛はやがて四人から五感をも奪っていく。やがてミロが攻撃の手を止めた時には、既に全員が五発もスカレット・ニードルを受けていた。

「…今までスカレット・ニードルを十五発全て受けきった者はいない。五、六発も受ければ廃人となりそれ以上では五感を失っていくのだ。さあ、残りの十発を受けてみる！」

もはや痛み以外の感覚が消失したかのような四人にとって、これ以上の攻撃は限界だった。

そして、薄れゆく意識の中で死を覚悟していた星矢達に放たれるミロの一撃。

しかしその攻撃はすんでのところで防がれた。

「っ！？誰だ！」

思わずミロが目を向けた先には、一人の男が立っていた。

荒々しい灼熱の炎のような小宇宙を纏ったその男の背後に浮かぶあれは　　不死鳥！

「…よくも俺の兄弟達をいたぶってくれたな。俺の名は一輝！不死鳥フェニックス一輝だ！」

最強の青銅聖闘士が降臨した瞬間だった。

第十三話 もう一つの攻防（後書き）

久しぶり？の青銅ターン

もう出番は無いとか言っておきながら……そして一輝も初登場

今まで黄金聖闘士一人につき一話でしたが切りがいいので二つにしました

実は書いてて意外と楽しかったのは雑兵戦だったり

第十四話 炎の翼と真紅の衝撃

今、聖域の象徴・アテナ神像へと連なる黄道十二宮の手前にある広場のような所で、二人の男が向かい合っている。

より正確に言えば、一方の男の後ろには身体中に傷を負い、あるいは胸に矢を受け倒れ伏す五人の男女の姿があった。

思えば星矢達がここ聖域を訪れた時はまだ日も高かった。

だが、いつの間にか太陽は傾き、そしてもう後わずかで地平線の彼方に消えていこうとしている。

そんな夕暮れの中、ミロは星矢達に止めを差そうとした瞬間に目の前に突然現れた聖闘士　その名もフェニックス一輝　の闘気を隠そうともしない荒々しい小宇宙にしばし見入っていた。

「……フェニックスとか言ったな。お前が史上初めて鳳凰星座の聖衣を得たという男か。」

一瞬一輝の身体がピクリと反応したが、一輝は否定の言葉も肯定の言葉も口にしなかった。

しかし、結果として次の一輝の言葉がミロの見解が正しいということを告げていた。

「それがどうした。今、貴様を知るべきはそこに倒れているのが俺の兄弟だということだけだ！アテナと……そしてこいつらの命だけは絶対に取らせん！」

そう、一輝と星矢達四人は血の繋がった本物の兄弟なのだ。

両親が同じなのは瞬と一輝だけだが、他の三人とも父親は一緒……あの城戸光政の子供である。

かつてまだ城戸沙織がアテナであると知れる前、射手座の黄金聖衣を巡る闘いの末、星矢達は見事一輝を倒した。

そして一輝が倒れる寸前にそのことを星矢達に語ったのだ……恐らく彼らがそれを知れば全身の血を捨てたくなる程の衝撃を受けると分かっているながら。

一輝の思った通り星矢達は憎んでいた男の血を引いていると知り、激しく動揺した。

だがやがてそれも変わっていった、共に闘った者達が実は血を分けた兄弟であったという事実、それは星矢達四人、そしてそれだけでなく敵であった一輝とさえ友情を超えた深い絆を作り上げた。

そしてその闘いの後、戦場となった富士山麓からたった一人で脱出した一輝の中にも、星矢達と同じくアテナのために闘う聖闘士という自覚が生まれたのだった。

アテナがアイオロスや星矢達と共に聖域へ向かっていた頃、一輝は星矢達との闘いの傷を癒すため、聖闘士の療養地として使われてきた地中海のカノン島という小さな島で身体を休めていた。

火山島であるカノン島の噴煙は古来より聖闘士の傷を治すと伝えられていて、一輝も火口のすぐ傍でその煙を浴びながら、傷が癒え、小宇宙が回復していくのを感じていた。

その最中に感じたのだ、聖域で闘う星矢達の小宇宙を、そしてそこに強大な小宇宙が近付いていることも。

それに気付いた一輝は即座にカノン島から聖域に飛び立った。

そして彼は目にする、今にも倒れそうな星矢達に向けて攻撃を仕

掛ける男の姿を。

今まさにスカーレット・ニードルを放とうとしているミロの姿を……。

「俺の兄弟達の命は取らせん！」

そう叫んだ一輝の小宇宙は彼の怒りに呼応するかのように激しく吹き荒れ、まるで小宇宙そのものが高熱を帯びているのかと思われ程の灼熱の熱気が一輝の身体全体から迸る。

ミロでさえ、同格の黄金聖闘士達を除けば感じたことの無い程の小宇宙を前に、拳を構えずにはいらなかった。

ミロの感覚では先程闘った星矢達の小宇宙は並の白銀聖闘士と互角かそれよりも少し上、だがこの一輝の小宇宙はその星矢達すら上回っており、高レベルの白銀聖闘士と闘ってもひけをとらないだろう。

その一輝の姿が、一瞬の内にミロの目前にまで迫っていた。

最強の青銅聖衣と謳われる鳳凰星座の聖衣。

その聖衣と一体となって辺りを覆う炎の小宇宙、一輝はそれを片手に集約する……そして立ち尽くすミロの身体を薙ぎ払うように拳を放った！

「受ける……星をも砕く鳳凰の羽ばたきを！鳳翼天翔——！！」

！！！！

一輝の背後に浮かび上がるは鳳凰の姿、そしてその拳が纏うは灼熱の小宇宙。

星をも砕くという凄まじい熱風がミロの腕を、脚を、いや全身を呑み込みミロの身体を吹き飛ばす！

ミロはその爆風に押され、一瞬の浮遊感の後、背中を地面に叩きつけられる衝撃を感じた。

ダメージ自体は大したことは無い。

神話の時代から一度たりとも完全破壊されたことが無いと言われる黄金聖衣、その鉄壁の防御を上回る攻撃力を生み出すのは黄金聖闘士でさえも難しいのだ。

だが立ち上がったミロの耳に何かが地面に落ちたような音が響いた。

何気なくその音の方向に目を向けると、なんと自らの纏う蠍座の聖衣の特徴的なマスクが転がっているではないか。

「バ……バカな！俺のマスクを飛ばす程の威力が今の一撃に込められていただと……!？」

たかが頭部に装着するだけのマスクとはいえ、黄金聖衣を弾き飛ばす程の攻撃は青銅聖闘士の力で出せるものではない。

そのことが、思わずミロの口から驚きとなって溢れ出た。

「次はそれだけでは済まさんぞ！今一度受ける……鳳翼天翔……!」

巻き起こる爆風と熱気が再びミロに襲いかかる。

「なにっ!？」

しかし一輝の放った二度目の鳳翼天翔は三口を吹き飛ばすどころか、その場から後ずさりさせることさえ出来なかった。

それに狼狽える一輝の肩を光速の指拳が撃ち抜き、逆に一輝の方が空を舞い大地に叩きつけられる。

そして三口は地面から立ち上がるうとする一輝に近付いていきながら、滔々と話し始めた。

「黄金聖闘士を相手に同じ技がそう何度も通じると思うか？ 貴様の技は疾うに見切った。その程度の攻撃、俺の前ではもはや涼風も同然！」

だが立ち上がった一輝は三口の言葉を聞いても一考もせず、三度拳を繰り出した。

「鳳翼天翔！！！」

「バカめ、その技は通じんというのが分かんのか！」

すかさず三口が指拳を放ち、一輝の技をくらいながらもまるで通じないといった風に表情一つ変えようとしなない。

それでも構わず攻めようとした一輝だったが、不意にその身体に激痛が走った。

その源は先程三口が放っていた指拳による傷痕。

鳳凰星座の聖衣をも容易く貫く指拳が残した傷痕は、一輝の身体に猛毒を受けたかのような激痛を引き起こした。

その痛みを堪えて顔をしかめる一輝に対して、三口は続け様にスカーレット・ニードルを放つ。

「うわああああー!!」

一輝程の男がただ絶叫することしか出来ないような、尋常ではない痛みが襲いかかる。

三口の技、スカーレット・ニードルの衝撃は人間の中枢神経を刺激し激痛を引き起こす。

一発受けるごとにその痛みは増していき、やがて限界を超えた痛みは人間の五感を侵す、そして遂には死に至るのだ。

一輝は未だ三発しか受けていない、にもかかわらず立ち上がる脚は震え、大量の汗を流している。

そこに更にもう三発撃ち込まれるスカーレット・ニードル……だがしかし、その痛みでさえも今の一輝の足を止めるには至らない。

むしろ彼の闘志は奮い立ち小宇宙は更に燃え上がる!

「俺は今まで数々の地獄を潜り抜けてきた。今更こんな痛み如きに負けてなるものか!」

一輝の小宇宙が激しく膨れ上がり、炎となって爆発する!

「くらえ!鳳翼天翔ー!!!!」

暴風、爆風、颶風、熱風、言葉に尽くせない程の凄まじい勢いで、一輝の小宇宙が炎の翼と化して三口の身体に叩きつけられた。しかし……

「バ……バカな!あれだけ渾身の力を込めた鳳翼天翔でさえ、黄金聖闘士にはまるで通用しないというのか!？」

ミロはその一輝の拳を受けても微動だにせず立ちはだかっていた。そして無言で一輝に指先を向けると、両足を真紅の光に貫かれた一輝は腰から地面に崩れ落ちる。

「これで合計九発……お前には十五発全てを受け切ってもらおうぞ！」

身体を支えを失った一輝を十発目の衝撃が貫き、同時にこれまで彼を守っていた鳳凰星座の聖衣が粉々になって碎け散った。

もはや一輝に為す術は無い……そう思われたその時、一輝の身体が紅蓮の炎に包まれる！

「なっ……！こ……これは！？」

炎が鎮まり消え去ると、なんとそこには碎けたはずの鳳凰星座の聖衣を纏う一輝の姿！

しかも良く見るとその聖衣は先程ミロが碎いたものとは形状が異なり、新たな力と躍動感に溢れている。

「おおっ！これこそは鳳凰星座の新生聖衣！……迂闊だったなミロよ、この俺が纏う鳳凰星座の聖衣は例え粉々に碎かれたとしても、一握りの灰があれば俺の小宇宙に応じて甦るのだ！」

「なるほど……これが噂に聞く自己修復能力か……。」

ミロも現実には聖衣が目の前で復活するのを初めて見て、ある意味黄金聖衣をも超えた鳳凰星座の能力に驚嘆する。

更に一輝自身の小宇宙も大きく上昇し、完全に白銀聖闘士のレベルを超える小宇宙を備えていた。

油断すれば不覚を取り得る、そう判断したミロが身体を一気に加速し、小宇宙を集中させた指拳で新たに甦った聖衣ごと貫こうと一輝目掛けて襲いかかる。

それを見た一輝もミロに向かって指拳を構えた。

カカアツ！

ミロの指拳と一輝の指拳、その二つが交錯して互いの位置が入れ替わる。

先に倒れたのは、一輝。

スカーレット・ニードルは十五発打たれると死に至る、ならば既に十発以上受けている一輝の命のリミットはもう残り僅かのはずだった。

だが……

「なにい！？」

振り向いたミロは己の目を疑った。

本来五発も受ければ五感を失い、動くこともままならないはずのスカーレット・ニードルを、十発もくらった一輝が、なんとまだ立っている！

それどころか、痛みも感じていないかのように平然とミロの方に歩いてくるではないか。

すかさずそれを迎え撃たんと次々にスカーレット・ニードルを放つミロ。

しかしその攻撃が……効かない！

致命点となる十五発目が一輝の身体を貫いたにもかかわらずだ。

「バカな！一体何が！？」

その瞬間、目の前の一輝が消え、ミロはハッと気が付いた。

一輝の姿は先に倒れた星矢達の傍にあり、そして星矢達が再び意識を取り戻していることに。

突然の状況の変化に困惑するミロだったが、その理由はすぐに明らかになった。

あの交錯の瞬間、一輝の仕掛けた技がミロに命中していたのだ。

「鳳凰幻魔拳……相手に恐怖を与え精神を破壊する魔拳だ。最も貴様には時間稼ぎ程度にしか通用しなかったようだが、星矢達の真央点を突いて目覚めさせるだけの間はもったようだな。」

真央点、それは聖闘士にとっての血止めの急所、そして止血以外にもある程度の回復効果があり、その場しのぎとしては優秀な手段であると言える。

その真央点を突かれた星矢達は、スカーレット・ニードルの激痛が多少和らいだのか徐々に意識が回復し、身体にも力が戻っていた。

そして身体中に血を滲ませながらも何度となく立ち上がる四人の姿に、ミロは嘗て無い程の動揺を覚えた。

「お前達……何故そこまで命を賭けられる！？再び立ち上がったところで待っているのは更なる激痛と死があるだけだぞ！お前達は死が恐ろしいとは思わないのか！？」

そんなミロの言葉に一輝が微かに笑みを見せて言った。

「フツ……何故か、だと？決まっているだろう。」

それに続いて立ち上がった瞬間が口を開く。

「そうだよ。僕達は聖闘士になった時から……いや、お嬢さんの正体を知った時から、全てを捨てても守ろうと誓ったんだ……」

瞬の言葉を紫龍が引き取った。

「もう災厄によって俺達のような孤児が生まれないように……」

氷河も続ける。

「地上の平和のために、そして愛する人達のために……」

そして最後に星矢が言った。

「俺達が闘う理由は唯一つ……」

次の瞬間、五人の言葉が重なった。

「アテナのためだ……」

ミロは言葉を失った。

彼自身として正義のために闘っているという自負はある、あった。

だがしかし、改めて知った目の前の少年達の覚悟に比べてこの想いはどれだけ勝っているだろうか？

ミロは必ずしも力が全てだとは思わない、感情に引き摺られることもあるが、彼自身が闘う理由は自らの中に確固とした正義が存在するが故だ。

その正義が、揺らぐ。

星矢達の後ろに横たわっている少女は果たして真のアテナなのだろうか。

もしそうであるならば、自分の行いは誤りであったことになる。

……それを俺は認めるのか？認められるのか？……

ミロの中で二つの想いが葛藤する。

認めないのは簡単だ、そこに倒れている少女がアテナであるということを否定すれば、それでいい。

立ち上がったとはいえ、まだまだ星矢達の力はミロには遠く及ばない、一輝にしてもそうだ、本気でやれば直に倒せる。

だが、その想いは不思議と強く沸き上がってはこなかった。

思い浮かぶのは、日本で見た全てを包み込むような雄大な小宇宙、その際に感じた教皇への不信感、そして目の前に立つ少年達がアテナと信じる少女のために命を賭ける、その姿。

あらゆる想いが渦を巻き、やがて ミロの心は決まった。

「えっ？」

思わずどこか間の抜けたような声が零れる。

星矢達の前に立っていたミロが、不意に向けていた指先を降ろし

ただ。

それどころかミロからは既に攻撃的な小宇宙も消えていた。

突然戦意を失ったミロに目を白黒させる星矢達だったが、ミロは彼らにはつきりと告げた。

「この闘いは……俺の負けだ。勝ち目が無いと知りながらそれでも闘おうとするお前達の姿に、俺も悟った。その方こそ、まさしく今上のアテナだと。」

「そ……それじゃあ……」

「ああ。安心しろ、もう教皇の命令に従うつもりは無い。逆に教皇に問い質すことができた！」

ミロは星矢達に背を向けると、十二宮の彼方にある教皇の間を見上げる。

そして、誰にともなく尋ねた。

「アイオロスは……既に教皇の間へと向かったのか？」

「あ……うん。ムウと一緒に行ったぜ。」

「そうか。ならば俺もアイオロスに加勢に行こう。…もうこれ以上追手は来ないと思うが、お前達ならアテナを守り抜けるだろう。後のことは、俺に任せろ！」

ミロは星矢達にそう言い残すと、十二宮へと続く階段を駆け上っていった。

無人の白羊宮を全速力で駆け抜け、そのまま第二の宮に突っ込んでいったミロの前にアルデバランの巨体が現れる。

「おお、ミロく「済まん！急いでいるのだ、後にしてくれ！」

一瞬だけ光速に加速したミロは、話しかけようとしたアルデバランの横を抜き去り金牛宮を後にした。

双児宮、巨蟹宮、獅子宮と高速で走り抜けていくミロ。

遮る者は既にないたため、あっという間に処女宮まで辿り着いた。

「うん？ああミロ、君か。」

シャカは相変わらず座禅を組んだままの姿で、いきなり飛び込んできたミロに目を向ける。

「通してもらうぞ、シャカ！」

しかしシャカがその返事をする前にミロはとっくに走り去っていた。

そして天秤宮、天蠍宮と抜けて、九番目の人馬宮でようやくアイ

オロス達に出会うことが出来た。

「ミロ!? 天蠍宮にはいなかったが、まさか俺達を追ってきたのか!」

人馬宮でアイオロス達と遭遇したミロの前に、真っ先に立ちはだかったのはアイオリアだった。

そして即座に拳を構える。

「待て! 俺はお前達と闘うために追ってきた訳ではない!」

「なら何をしに来たと言うのですか?」

ミロがそれを否定すると、ムウがアイオリアを遮って冷ややかに問いかけた。

ムウの知る限り、ミロが自分の宮を抜け出して、わざわざここまで追ってくる理由は無い。

それだけに、彼に対する疑惑の念が頭をもたげる。

「その理由はお前達と同じだ。俺はもう教皇を信用できん、ならばこそお前達と共に闘おうとここへ来たのだ。」

その言葉を聞いてアイオロスは、思わずミロの気性を表したような真っ直ぐな光を宿す瞳を見つめ、大きく頷き、そして告げた。

「そうか……ミロよ、感謝する。」

アイオロスがそう言うと、ムウとアイオリアもミロへの疑念を打ち消したのか、身体の緊張感を解いた。

アイオロス達は、これまでの闘いで皆既にかなりのダメージと疲労が溜まっているため、ミロ程の聖闘士が加勢してくれるのはありがたい。

だがその理由はそれだけではない、何故なら……

「こ……これは！」

ミロも驚愕を隠せなかった。

なんとそこにあつたのは巨大なる氷壁！

人馬宮の出口へと続く道の途中、アイオロス達の行く手を阻むように、途轍もない冷気に包まれた氷の壁が完全に道を塞いでいた。

「これほどの氷壁を作り出せるのは、数ある聖闘士の闘技の中でも凍気の使い手である水瓶座アクエリアスのカミュを措いて他にいないでしょう。彼の氷は黄金聖闘士でも壊せないと聞きますから。」

氷の表面を軽く撫でるようにして、その凍気を感じながらムウが言った。

人馬宮に最初に到達したムウは、この氷壁を見た時、一人で破壊しようとはしなかった。

一目見て尋常な力や技では破壊出来ないことは明らかであり、後からアイオリア達が来ることが分かっていたので、敢えて氷壁に挑戦して疲労するよりかは二人が到達するのを待って、三人で破壊しようと考えたのだ。

しばらくしてアイオリアが人馬宮に辿り着いたが、かなり小宇宙の消耗が激しかったために、後から来るであろうアイオロスを待つことにした。

その後、アイオロスがやって来るのとはば時を同じくして、ミロが姿を現したのだ。

そして改めて氷壁に向き合う黄金聖闘士。

共に闘う仲間が増えたので、四人で一斉にこの壁を壊そうとするアイオロス達だったが、それをミロは制止した。

その行為を訝るアイオロス達にミロは言う。

「この氷壁……カミュの氷は、徒に壊そうとしても壊せるものは無い。カミュとは長い付き合いがあるのでな、それは良く知っている。」

そう言って目の前の氷壁に向けて指拳を構えるミロに、アイオリアが言った。

「ミロ、この壁を一人で破壊する気か？」

「そうだ。さっきも言ったがこの壁は多人数でかかっても容易には壊せないだろう。だが、カミュの凍気と言えど決して完璧ではない。氷壁のどこかに必ず原子数個分程の僅かな揺らぎが存在するのだ。そしてそこを突き崩せば、この壁は破れる。」

そしてミロは氷壁の前に小宇宙を高めて集中する。

真紅の光が一閃！

次の瞬間、氷壁のとある一点をミロの指拳が貫いた。

その一点の周囲に小さなひび割れが生じ、やがてそれが亀裂となつて壁全体に広がってゆく。

「おおっ！壁が……崩れる！」

バアアアアアン

遂に氷壁が轟音と共に崩壊した。

辺りには氷が溶けたせいで大量の水蒸気が発生している。

そして閉ざされていた人馬宮の出口への道を、四人の黄金聖闘士は駆け抜けていった。

教皇の間まで、残りの宮は、あと三つ。

第十四話 炎の翼と真紅の衝撃（後書き）

何となく思いついたものを、本編とは関係ありません。

教皇の間にて

傷だらけの星矢を庇う一輝。

一輝「アテナの命だけは絶対に取らせん！」

黒サガ「ならば星矢共々消え失せるがいい。くらえ！ギャラクシア
ンエクスプロージョン！！！！」

ドドオオオオオン

凄まじい爆発で一輝の身体が消滅した。

黒サガ「フハハハハ！塵となって砕け散ったか！」

星矢「一輝！お前までやられてしまったのか！？」

涙を流す星矢。

だがその時サガの背後に現れる暑苦しい小宇宙。

黒サガ「な……何だこの小宇宙は！？」

その小宇宙に浮かび上がる姿は、不死鳥！

一輝「フェニックス一輝推参！」

黒サガ「待てい！今貴様完全に消えたはずだぞ！」

一輝「おおっ！これぞ鳳凰^{フェニックス}星座^{ニユール}の新生一輝！」

星矢「聞けよ！後、ニユール一輝ってなんだよ！」

一輝「フツ……お前達雑魚とは違い、俺の身体は塵一つあれば甦るのだ！」

星矢& amp・黒サガ「まじで!？」

終

うん、微妙だったけど書いてみることに意味があるんだよ！多分。

第十五話 大いなる聖剣（前書き）

何故だろう、十二宮の展開はぜんぜん浮かばないのに、海界や冥界でのストーリーばかり思い浮かぶのは……

第十五話 大いなる聖剣

段々と空が暗さを増し、夜が近付いている十二宮を、四人の黄金聖闘士達が駆け抜ける。

胸に刺さった矢を抜きアテナを救う力を持つという教皇の元に辿り着くまでに、通過しなければならぬ宮は、魔羯宮、宝瓶宮、双鱼宮、の三つ。

しかしもう少しで夜になる、ということから分かるように、火時計は既に人馬宮に達していて、刻一刻とアテナの死は迫っている。

道を塞いでいた氷壁を砕いて、なんとか人馬宮を抜けた一行には、残り時間が徐々に少なくなっていく中で、徐々に疲労とは別に焦燥の色が見え始めていた。

修業を積み重ねてきた聖闘士と言えど、ここまで来るのににくぐり抜けてきた激戦や、突破してきた宮のことを考えれば、それも無理からぬことだろう。

しかしそれでも、次の宮を、そして教皇の間を目指して駆ける四人は、決して足を緩めることは無かった。

そして、ようやく……

「見えた、魔羯宮だ！」

先頭を走るアイオロスが、十番目の宮である魔羯宮を真つ先に捉えた。

続いて後ろを行く三人も、日が沈んで薄暗い中、行く手を遮る宮の存在に気付く。

しかし、次の宮が見えたからと言って、立ち止まって相手のことを考えている時間はとっくの昔に過ぎ去っている。

そんなことなど十分に分かっているアイオロス達は、全員がそれ

までの速度を保ったまま、脇目も振らずに魔羯宮へ一直線に飛び込んでいった。

黄金聖闘士達は、アイオロスを先頭にして、次にミロ、そしてムウ、アイオリアの順に魔羯宮を駆け抜けていった。

静寂に包まれた宮の中にその足音が反響する。

周囲から気配や小宇宙は感じられない……が、だからこそ警戒は怠ること無く魔羯宮を突っ切っていく四人。

しかし、奇妙なことに行けども行けども一向に宮の守護者は姿を見せないばかりか、その気配も無かった。

果たして宮の奥で待ち構えているのか、それとも奥まで誘い込んで罠にでも嵌める気なのだろうか、出口を目指して走りつつも、そんな考えに囚われる黄金聖闘士達。

だが、四人が相手が仕掛けてきそうなありとあらゆる出方、手段とそれへの対応を考えながら進む内に、なんと、そのまま魔羯宮の出口を駆け抜けてしまった。

「バカな！誰もいないとはどういうことだ！」

思わずミロが声を荒げたが、それに対してムウが冷静に応じる。

「あなたがそれを言いますか。しかし確かに妙ですね、魔羯宮はシユラの管轄、彼がそう簡単に自らの役目を放棄するとは思えませんが…。」

シユラ、魔羯宮を守る山羊座カプリコーンの黄金聖闘士にして、十三年前アイオロスがアテナを連れて聖域を脱走した折、教皇に成り済ましたサガの命を受けて追手となった聖闘士である。

教皇の命令とはいえ、突然仲間が謀反したから追えと言われて迷うこと無くそれを実行したシユラ、そんな男がみすみす自分の宮を素通りさせるだろうか。

どこか腑に落ちないものを感じつつも、次の宮へと進むアイオロス達だったが、数秒後彼らの耳に飛び込んできたのは地面が裂ける音というとんでもない代物だった。

地を裂く轟音が止み、一人の黄金聖闘士がたった今抜けた魔羯宮の方向を睨み付けている。

「コソコソと隠れていないでさっさと姿を現したらどうだ。こんな程度の不意打ちでこの俺を倒せるとでも思ったか。」

その声に反応したのか、宮を支える柱の陰から一人の男 魔羯宮の守護者であるシユラ が現れた。

「フツ……よく一撃目を止めた。だが二度目は無いぞ！」

魔羯宮から宝瓶宮へと続く道の上で対峙する二人の男、シユラとアイオリア！

見ると、シユラの一撃によって大地は裂け、アイオリアの足元まで深い亀裂が走っている。

先程攻撃を受けた瞬間、最後尾にいたアイオリアは、地面の裂け目が自分達に真っ直ぐ向かってきているのを見て、咄嗟にその直線上に身を置くことで地割れの進行を止め、全員がそれに呑み込まれるのを防いだのだ。

先を進んでいた三人は、一瞬立ち止まって振り返ったが、アイオリアが攻撃を防いでいるのを知ると、すぐに次の宮を目指して走り出した。

もう彼らに残された時間は僅か、ここは誰か一人に託して先に進むしか方法は無い。

だからこそアイオリアも、シユラがこれ以上先に行くアイオロス達に攻撃を加えないよう一人留まったのだ。

そしてアイオリアが立ちはだかっている以上、シユラは三人に手出しは出来ない。

結果的に二人は先へ行ったアイオロス達を見送る形になった。

そして、その姿が見えなくなったところで、二人は気持ちを切り換え臨戦態勢で向かい合う。

「俺の相手はお前か、アイオリア。」

「そつだ。」

シユラとアイオリア、二つの膨れ上がった小宇宙が二人の間で衝

突する。

「俺はかつてお前の兄アイオロスを半殺しにした男。教皇に刃向かう以上はアイオリア、アイオロス同様、お前も葬り去ってやるわ！」

「ならば俺は、お前を倒すことで聖域を逐われた兄の無念を晴らす！」

アイオリアがそう言うと、シユラは更に視線を鋭くして、口元に薄い笑いを浮かべながら言った。

「フツ……大きく出たな。だが俺は自分の実力以上にでかいことを言う奴が嫌いだな！」

その刹那、光の速さに加速したシユラが真つ正面から一気にアイオリアに肉薄し、高々と掲げた手刀をアイオリア目掛けて振り下ろした。

「クツ！」

アイオリアはその攻撃を防ぐため、黄金聖衣に覆われた腕でシユラの手刀を受け止める。

ガキイーンという金属音がその場に響き渡り、二人の身体は動きを止めた。

しかし攻撃を止められたはずのシユラがニヤリと笑う。

次の瞬間……

「なにー!?」

完璧な防御力と言われた黄金聖衣に……亀裂。

「バカな！神話の時代から一度たりとも破壊されたことの無い黄金聖衣が！」

瞬時に光速拳を展開してシユラを振り払い、改めて確認すると、手刀を受けた聖衣の籠手に当たる部分には確かに亀裂が入り、その下の腕にも薄く血が滲んでいる。

いや、亀裂というよりもむしろ……

「なんと……！この傷は、まさに斬撃。まるで鋭利な刃物で切り裂かれたようだ！」

驚愕するアイオリアにシユラが再び手刀を構える。

「お前も知っていていよう。この俺の鋼のように研ぎ澄まされた四肢は、黄金聖闘士の中でも最強の攻撃力を持つのだ。そしてその鋭さ故にこう呼ばれるのだ、^{エクスカリバー}聖剣とな！」

そのエクスカリバーがアイオリアに向けて振り下ろされる。

「うおおおおお！」

究極の切れ味を持つ聖剣と化したシユラの手刀を、横に跳ぶこと
によって間一髪で回避する。

が、シユラは攻撃の手を緩めない。

「どうした！それっ、もう一発だ！」

本物の剣のような風切り音がしたかと思うと、またしても地面がアイオリアに向かって一直線に切り裂かれる。

……回避出来ない！……

すぐさま腕を十字にクロスさせて衝撃を受け止める。すると、聖衣に傷が……付いていない。

どうやら直接触れさえしなければ、黄金聖衣で防ぎきれるようだ。アイオリアもそう判断したのか、更に一步退いて手刀の間合いから逃れた。

しかしそれを見たシュラが、距離を潰そうとアイオリアに接近する。

「どうしたアイオリア！そんな逃げ腰では俺を倒すことなどできんぞー！」

シュラはそう叫ぶと更に近付き、必殺のエクスカリバーを放つ……より早く、アイオリアの光速拳がシュラを捉えた。

「むっつ、こ……これは！」

突如膨れ上がるアイオリアの小宇宙と、その背後に浮かぶ獅子のオーラ。

今、それが炸裂する！

「ライトニングプラズマ！！！！！」

猛烈な勢いで放たれる光速の拳！

その拳が、四方八方からシユラの身体を貫いた。

「うおおああああ！」

拳の威力に吹き飛ばされ、宙を舞うシユラ。

だがシユラもさるもの、空中で体勢を立て直すと、頭から地面に激突することも無く綺麗に着地した。

だが流石にその額にはうっすらと汗が浮かぶ。

その隙を見逃すアイオリアではなかった。

すかさずシユラに叩き込まれる光速の拳。

威力も手数も更に増した無数の拳が、シユラの視界を覆い尽くした。

「ぬうっ！」

……このまま受けに回つたらいずれ押し切られて潰される……

それを理解したシユラは拳の弾幕を打ち破るべく手刀を繰り出した。

「くらえ！エクスカリバー！！！！！」

中間でくすぶる二人の小宇宙。
激突する互いの拳と剣。

その衝撃は凄まじく、小宇宙の奔流、そして拳圧と剣圧のぶつかり合いによって生じた衝撃波が二人の体力を削る。

やがて遂にくすぶっていた小宇宙が破裂し、双方その場に留まることも出来ないような爆風に、二人は共に大きく吹っ飛ばされた。そして今の攻撃の余波によって、二人の間に広がる大地には至る所に地割れやクレーターが出現した。

しかし黄金聖闘士の闘いでは、そんなものは苦にもならない。

再びシユラに攻撃を仕掛けようと拳を構えたアイオリアだったが、次の瞬間ことは起こった。

アイオリアの聖衣の肘の辺りに先程よりも深い亀裂が走る。

「なにっ!？」

「フツ……俺のエクスカリバーに斬れぬものは無い。そう、黄金聖衣でさえもな！」

「まさか、黄金聖衣をこつも容易く切り裂くとは……奴の手刀はまさしく聖剣！」

聖衣に付けられた傷を見たアイオリアの顔に浮かんだ驚愕の表情、それは先程の比ではなかった。

絶対不可侵であり、傷を付けることすら不可能とされる黄金聖衣がここまで破壊されるとは……黄金聖闘士最強の攻撃力は伊達ではなかった。

斬撃として放たれる手刀は、同じ光速とはいえ拳による攻撃より遙かに一撃の威力が高い。

もし手数を重視するなら手刀をかわして拳を当てることは出来るだろうが、黄金聖衣の上からでは大きなダメージは見込めない。

一撃の威力を重視すればダメージは与えられるが、その分見切られ易くなり、エクスカリバーと撃ち合うことになれば確実に競り負

けるだろう。

いずれにせよ、あの手刀を封じなければ勝機は無い。

しかしその手段を考える間も無く、シユラが迫る！

「…その腕、切り落としてやろう！」

その言葉と同時に振り下ろされる、極限まで研ぎ澄まされた必殺の剣！

唸りを上げて迫るエクスカリバーを、アイオリアは傷の付いていない方の腕で辛うじて受け止める。

「クツ…！」

だがやはり無情にも聖衣は切り裂かれ、斬撃の威力は遂に骨にまで達した。

下手に動けば腕が落ちる。

しかし……

「うおおおっっ！」

なんと、アイオリアは半分切れかかっている腕でシユラを押し返した！

「な……なにいい！」

腕を手刀で斬られたまま反撃しようとするアイオリアの姿にシユラは面食らった。

「アイオリアよ、お前は自分の腕が惜しくはないのか!？」

そう言って気付く、アイオリアのもう片方の腕が自分に向けられていることに。

咄嗟に身の危険を感じたシユラは、一旦アイオリアの傍から離れようと跳躍する。

だがアイオリアの腕に食い込んだ手刀が、抜けない!

「なっ!?!」

「唸れ!獅子の牙よ!」

瞬間、アイオリアの小宇宙が爆発し、一本の腕に集中する。

「ライトニングボルト!!!!!!」

アイオリアの小宇宙を乗せた光速拳がシユラの胴体を貫いた。

そして、拳の威力を至近距離からまともに受けたシユラは、物凄い勢いで自らの宮の柱に打ち付けられる。

その後、ガラッ、と瓦礫をどかすような音がしたかと思うと、激突から数秒、シユラが崩壊した柱から脱け出した。

その姿は既に息も荒く、傍目から見ても身体に大きなダメージを負っていることが分かる。

しかしそれでもまだシユラは闘いの構えを崩そうとはしなかった。そんなシユラに、アイオリアもまた真剣な表情で対峙する。

だがその時、突然アイオリアの脚から血が吹き出した。

「グッ!？」

黄金聖衣は身体のほとんどを覆っているため、本来黄金聖闘士は滅多なことでは自分の身体を傷つけられるはしない。

しかしほとんどとは言っても、わずかに聖衣に守られていない箇所は存在するのだ。

思わず膝を付くアイオリアに立ち上がったシユラが言った。

「言ったはずだ。この俺の四肢は全て研ぎ澄まされている、と。」

「なにっ!そ……それでは!」

「そう、お前の拳を受けながら俺は足を使い斬撃を放っていたのだ!」

それまでずっと手刀による攻撃のみだったために、足での攻撃は想定外だった。

更に悪いことに、アイオリアが足に力を入れても立ち上がる事が出来ない。

攻撃の瞬間だったので警戒していなかった分、相当深く斬られたのだろう、この闘いの最中はおるか、しばらくは立ち上がれそうになかった。

そこに手刀を構えながらゆっくりと近付いてきたのは、シユラ。

「中々しぶとかったが、これで終わりだ!その首、一刀の元にはねてくれるわ!」

足が動かない以上回避は不可能、ならばアイオリアに残された道

は迎撃あるのみ！

「ならばこちらも行かず！くらえ！ライトニングボルト！！！！！」

拳を繰り出したアイオリアに、シユラは勝機を感じた。

エクスカリバーとライトニングボルトではエクスカリバーの方が鋭く、攻撃力が高いため、この二つの技が衝突すれば拳の方が悪いのだ。

だが、今回は、シユラの予想したような拳と剣のぶつかり合いではなかった。

「な……何だと！」

アイオリアの狙いは手刀、ではなく肘。

シユラのエクスカリバーの有効範囲は狭い。

斬撃を飛ばすタイプならともかく、直接切り裂く場合はどうしても肘の部分では攻撃出来ないのだ。

結果、共に光速で激突した手刀と拳のせい、シユラの腕は、折れた。

折れた腕をだらりと下げたシユラは、苦虫を噛み潰したような表情で言った。

「自らの命を囚にして俺の腕を折るとはな……だが、俺にはまだ

片腕と両足が残っているぞ！」

そう言って再びアイオリアに飛び掛かるシユラ。

そんなシユラに負けじと拳を握り締めるアイオリア。

「それはこのアイオリアとて同じこと！足を失った程度で獅子の牙は折れん！」

再び戦場に巻き起こる小宇宙の嵐、そして乱れ飛ぶ拳と剣。

片腕の折れたシユラと両足を斬られたアイオリア、この二人の闘いは火時計の火が消えるまで繰り広げられたという。

そして、シユラをアイオリアに任せて先へと進んだアイオロス達は、第十一番目の宮である宝瓶宮の入口に辿り着いていた。

そこには既に一人の黄金聖闘士が立っている。

長く伸ばした赤髪と、その周囲にチラチラと見え隠れする強大な凍気。

そう、この男こそ、人馬宮に堅固な氷壁を作り出しアイオロス達を足止めしようとした張本人、水瓶座アクエリウスのカミュ！

第十五話 大いなる聖剣（後書き）

性懲りもなく、また思いついたものを、やはり本編とは関係ありません

魔羯宮にて

紫龍「老師、お許してください！この紫龍、禁を破ります！」

シユラ「ま……まさか、この紫龍にはまだ秘められた何かがあるというのか!？」

小宇宙の増大と共に紫龍の背に龍の刺青が浮かび上がる！

紫龍「星矢、瞬、氷河、アテナは頼んだぞ！」

紫龍が背後からシユラを羽交い締めにして叫ぶ！

紫龍「行くぞ！廬山亢龍霸!!!!!!」

紫龍がシユラを羽交い締めにしたまま凄まじい勢いで空に飛び立つ！
しかし……

シユラ「フツ……そんな子供だましの技がこの俺に通用すると思っ
たか！」

紫龍「えっ?」

シユラ」そつら、自分の技で自分が吹っ飛べ！ジャンピングストー
ン！……！」

紫龍「うわああああー！」（キラーン）

青銅「紫龍ううううー！……！」

終

なんかもう………すみません

第十六話 氷の聖闘士（前書き）

十二宮篇を始めた時に気が付いてはいたんですよ、黄金聖闘士同士の闘いだから全然無双になってないって……

第十六話 氷の聖闘士

黄道十二宮の中でも十一番目に当たる宝瓶宮。

その入口に仁王立ちしてアイオロス達を見下ろしているのは、この宮の主、水瓶座アクエリウスのカミュ。

彼は聖闘士の闘技の中でも珍しい凍気の使い手であり、下でアテナの守りに就いている氷河の師でもある。

この二人が用いる凍気とは、物体を極低温まで冷却する力のことであり、自らの小宇宙を燃やし、熱の源である物体を構成している原子の振動を止めることで温度を下げるのだ。

だが、同じ凍気とは言っても黄金聖闘士の彼が生み出す凍気は青銅聖闘士である氷河とは比べものにならない。

なにしろカミュの作り出した氷は永久に溶けることは無く、黄金聖闘士が数人がかりでも砕けないと謳われる程なのだから。

そのカミュと対峙している三人の中で、不意にミロが、アイオロス達を抑えて一步前へと踏み出した。

見ると、ミロの目はある一点を見据えている。

その視線の先にあるのは、宝瓶宮の守護者たる彼の友の姿。

教皇の側について行く手を阻もうとするカミュを前に、ミロは拳を強く握り締めた。

そして、そのまま振り返ること無く、後ろの二人に告げた。

「カミュの相手は俺がする。お前達は、先に行け。」

「ですが……」

ミロの後ろ姿に向かって、ムウは言いかけた。

本来なら、別にミロはわざわざ十二宮を守る聖闘士達と闘う必要は無いはずである。

今回の場合、教皇に敵対すると見なされたのはアテナと一緒にやって来たアイオロスと星矢達、そしてアイオロスと共に進んでいたムウとアイオリアだけ。

つまり、ミロ一人だけなら普通に教皇の元まで辿り着けるのだ。にもかかわらず、敢えて親しい者と闘おうとするのか、ムウはミロにそう言おうとした。

しかし次のミロの言葉に、ムウはそれを呑み込むしかなかった。

「俺のことなら構わん。だからさっさと先に行け。もう時間も無いだろう。多分、あいつも、アイオリアもそれを望んでいるはずだ。」

その言葉にアイオロスとムウは口を閉ざした。

そして、向かい合っているミロとカミュにしばし目をやった後、二人は駆け出し、カミュの隣を通り過ぎていった。

ミロも、そしてカミュもまた走り去るアイオロス達に目を向けず、敢えて二人を阻止しようともしない。

二人が去った後で、ようやくカミュが口を開いた。

「ミロ、悪いことは言わん、今すぐ自分の宮に引き返せ。この先へ進もうとしても、無駄に命を落とすだけだぞ。」

だがミロはそれを聞いて、逆にカミュの方へと続く階段を上り始めた。

そして、カミュから目を離さずにゆっくりと近付きながら、言った。

「残念だがそれは聞けん。俺はどうあっても教皇の元まで行く。だがカミュ、俺はお前と闘いたくは無い。だから、何も言わずに通してくれ。」

遂にミロは宝瓶宮の入口、カミュの目の前までやって来た。しかしカミュは、ミロに対して静かに首を振った。

「私もお前の言うことは聞けない。だがミロよ……いや、もう何も言つまい。友として、せめてこの手でお前を葬ろう。来い、ミロ！」

そう、言った瞬間、二人の小宇宙が爆発的に燃え上がる。

先に仕掛けたのは、ミロ。

カミュに言葉を返す間もなくミロの指先が紅く閃いた。

「行くぞ！真紅の衝撃！スカーレット・ニードル！！！！！」

先手必勝、とばかりに放たれた光速の指拳がカミュの身体を貫き……はしなかった。

カミュに命中すると思われたミロの指拳は、相手の身体に触れる直前で、いきなり何かに弾かれた。

「むっ……！？」

目を凝らして見ると、カミュの前にあったのは……人馬宮でも見た、あの氷壁！

人一人を覆う位の大きさだが、ミロが攻撃を仕掛けてくると同時に、カミュもまた己を守るための氷壁を作り出していたのだ。

「それはフリージングゴフィンの変形。生半可な力では砕けん。」
そう言って、カミュはミロに向かって構えると、自分の掌に小宇宙によって生み出した凍気を集める。

ミロは人馬宮の時と同様に、氷の結合が緩い一点を瞬時に見抜くと、すぐさまその指先で氷壁を貫き、粉々に打ち砕いた。

氷が霧消し、辺りに水蒸気が立ち込める。

だがミロがカミュに詰め寄ろうとした、その時、既にカミュは攻撃に移っていた。

「ダイヤモンドダスト!!!!」

迫り来る凍気は彼が水と氷の魔術師と呼ばれる所以。

そしてカミュの放ったダイヤモンドダスト、それは、彼の弟子である氷河にも受け継がれた、凍気を操る聖闘士にとって基本となる技だ。

集中した凍気を拳に乗せて放つだけという単純な技だが、広範囲に広がる凍気が、空中に巨大な氷の結晶を作り出し、相手の全身を包み込んで氷漬けにしてしまう。

隙を突かれたミロは、その一撃をかわしきれなかった。

目の前が真っ白になるほどの強烈な凍気に襲われ、彼の全身が氷の膜に覆い尽くされる。

しかし、その凍気も黄金聖衣を貫き、肉体まで凍結させる程ではない。

ミロが身体に力を込めると、氷はあっという間にひびが入って弾け飛んだ。

「十二宮の入口でお前の弟子にも言ったが、そんな凍気ではこの黄金聖衣を凍りつかせることはできんぞ。」

「何だと？」

カミュは全く顔色を変えずに返したが、三口は更に続けた。

「かつてお前が言っていたことだ、カミュ。黄金聖衣を凍りつかせるには究極の凍気、即ち絶対零度でなくてはならん、そして絶対零度を作り出すのはお前ですら不可能だ、と。」

確かに、それはかつてカミュが三口に語ったことである。

黄金聖衣を凍結させようとするなら、絶対零度、つまり - 273 .

15 という凄まじい温度が必要なのだ。

そしてカミュの凍気は絶対零度に限りなく近いものだが、僅かに絶対零度には到達してはいない。

そんなことは誰よりも、カミュ自身が良く知っている。

なのに、彼の言葉には動揺など微塵も感じられなかった。

「…そうだな。確かに私の凍気ではお前の聖衣は貫けない。だが私を弟子と一緒にしてもらっては困るな。」

再び拳を構えたカミュの姿からは、何があっても退くことは無いと思わせるような、彼の強い意志が発せられているのが分かる。

二人の間に流れる一瞬の沈黙、それを破ったのは二人同時だった。

「行くぞ！スカーレット・ニードル！！！！！！」

「ダイヤモンドダスト！！！！！！」

小宇宙の高まりと共に、蠍の一撃と凍気の拳がぶつかり合った。そしてミロはまたしても氷に覆われ、カミュの肩には小さな傷口が出来る。

しかし次に動いたのはカミュの方が早かった。

一瞬、肩口に手をやると素早くミロの真横に回り込む。

そしてミロが身体を包む氷を砕くのに手間取っている所に、再度凍気が襲いかかった。

その一撃は身体を覆っていた氷ごとミロを吹き飛ばし、そのまま背後の石壁にまで叩きつけた。

すぐさま立ち上がるミロだったが、そこでハッと気が付いた。

「チツ……！腕を凍らされたか！」

なんと、二度目の攻撃を受けた上腕部が凍傷にかかり、既に動かすことさえ難しくなっているではないか。

一方スカーレット・ニードルを受けたはずのカミュは、何事も無かったかのように立っている。

「バカな……一体何故!？」

それに対してカミュは、掌に凍気の塊を作り上げつつ、答えた。

「凍気で傷口を凍らせたただけだ。凍気にはこんな使い方もある。

……だがミロよ、真の凍気を見るのはここからだぞ！」

言葉と同時に凍気の塊がミロに放たれた。

それを止めようとミロも拳を放つ。

だが、ただの物理的な攻撃では止めきれずに、ミロの腕が氷漬け

になった。

「分かったかミロ。確かに私には絶対零度は作り出せない、だがこうやって聖衣の周りを凍りつかせることは出来る。」

ミロは渾身の力で腕の氷を弾いたが、それが非常に強固であることが分かるのに時間はかからなかった。

忌々しげに舌打ちすると、負けじとミロも指拳を放つ。

だが、カミュは相変わらず傷口に凍気を施し、平気な顔で攻め立てる。

そして次の攻撃で、ミロの指先が凍りついた。

それを見たカミュが、更に小宇宙と凍気を増しながら、言った。

「どうだ。こうして手を封じてしまえば、お前の方がむしろ不利だろう?」

その言葉が、ミロの気持ちに火を着けた。

「フンッ、この程度で、このミロを止められると思ったか!」

そしてカミュに向かって指先の小宇宙を研ぎ澄ます。

次の瞬間、ミロの目の前に迫っていた凍気を、三発同時に放たれた真紅の光針が見事に突き破った。

凍気を貫いて、カミュの身体に新たに刻まれた傷跡からは、発狂するほどの甚大な痛みが溢れ出す。

カミュは先程と同じように傷の周囲を凍結させて乗り切ろうとするが、額に浮いた脂汗がその苦痛を物語っていた。

しかしミロは知っている、あのカミュが、クールを信条とするあの友が、痛みや感情に流されるような男ではないということをし、そして一度決めたことを投げ出すようなまねはしないということも。だからこそミロは全力でカミュと闘うのだ、譲れないもののため

互いに向き合うミロとカミュの二人の闘いの行方は、ミロに傾きつつあった。

カミュの身体に撃ち込まれたスカーレット・ニードルは既に十発以上、発狂してもまるでおかしくはない数だ。

ミロは、最初に腕を凍らされた以外には特にダメージを受けてはいない。

始めの内こそ、スカーレット・ニードルの傷を凍らせて痛みを止め、ミロが氷を破壊する前に攻撃するという作戦は功を奏したが、傷が二つ、三つと増えていくにつれて、その痛みは抑えきれなくなり、次第にミロに攻撃のチャンスを与えるようになってしまったからだ。

しかしそれでもカミュは退かない。
そして、何度目かの激突が起きた。

「ダイヤモンドダスト!!!!」

「スカーレット・ニードル!!!!!!」

渾身の凍気と真紅の衝撃がそれぞれの相手に突き進む。相手の攻撃を貫いて命中させることが出来たのは、ミロの方だった。

遂にカミュの身体を十四発目の光針が貫く。

そしてその凄まじい激痛にカミュは思わず膝を付いた。

そんなカミュに向かって、最後の指拳を構えるミロ。

十五発目に撃ち込む一撃は、スカーレット・ニードル最大の致命点であるアンタレス。

アンタレスとは蠍座の中にあつて、蠍の心臓の位置にある星だといふ。

赤く燃えるその星のように、アンタレスを撃たれた者は、全身から血を吹き出して絶命するのだ。

「この勝負、俺の勝ちだ。せめて苦しませぬよう最後の―撃をくれてやる。スカーレット・ニードル最大の致命点、このアンタレスをな！」

小宇宙が弾けミロの指先が紅い光に染まる。

そしてカミュにその指先を向けた。

しかし、ミロの指拳がまさに放たれようとした、その時、カミュが小さく呟いた。

「…その体勢でアンタレスを放つことが出来るのか、ミロ。」

一瞬カミュが何を言っているのか分からないといった、怪訝な顔をしたミロだったが、即座に己の足元の異変に気が付いた。

「……これは!？」

ミロの下半身が足首の辺りまで氷漬けにされ、宝瓶宮の床に縫い付けられている!

「私が一体何発ダイヤモンドダストを撃ったと思っている。闇雲に放っていた訳ではないのだぞ。」

それまで特にダメージも無いと思っていたカミュの凍気が、知らぬ間にミロの足元を侵していた。

何重にも渡って凍気を受けたミロの足は、信じられない程の強度の氷によって、ミロの動きを阻んでいる。

動きの取れないミロに向かってカミュが手を組み両腕を高々と掲げた。

「行くぞ、ミロ。受ける!この水瓶座のカミュ最大の拳!」

高く掲げた両腕を覆う聖衣が、水瓶の形を成した!

「オーロラエクスキュージョン!!!!!!」

細く絞られた凍気の奔流が、今までの拳とは一線を画す圧倒的な威力でミロの身体に迸る!

しかし直撃を受け吹き飛ばされたミロは、全身を覆う凍気で倒れそうになりながらも、何とかギリギリのところまで踏み止まった。

己の最大の凍気を受けて尚、倒れることを拒否するその姿に驚愕するカミュ。

それどころか……

「な……なにい！」

逆にカミュの身体に刻まれたスカーレット・ニードルの傷口から大量の血が一気に吹き出した。

そして血が流れ出すに連れて、カミュの意識が段々と薄れていく。意識が朦朧とする中、カミュの目にはミロが自分の方へゆっくり近付いてくるのが見えた。

「…凍気で傷の痛みを無理矢理抑えていたのだろうが、ここへ来てスカーレット・ニードルの傷口が開いたようだ。その血と共にお前の五感は失われていく。今度こそ、勝負あったな。」

そう言うミロも、既に聖衣に覆われていない部分は重度の凍傷にかかり、常人なら立つことさえ出来ないであろうダメージを受けている。

凍気にかじかむ指を構えて、拳を放とうとするミロ。

しかし、カミュは残る力を振り絞って再びミロの前に氷壁を作り出した。

ミロの攻撃を弾いたものではない、人馬宮で足止めを図った時のような、宮全体に広がる巨大な氷壁。

満身創痍のカミュに、未だにそれほどの力が残っていたことは、ミロの顔に僅かに驚きを浮かべた。

だが、それはもはやカミュ自身にミロを倒すことが出来ないという証。

氷壁を砕くことが可能なミロにとっては、所詮は多少の足止めにはかならないのに、敢えてそうするのは他に手段が無いからだ。

それが分かっているミロは、カミュの思惑を砕くように、一瞬で壁を粉碎した。

強固な氷壁とはいえ、大きなものになればなるほど、その緩みも大きくなる。

故に、その隙さえ衝くことが出来れば、万全とは到底言えない今のミロでも打ち破るのは容易いのだ。

そして、壁を砕くとすぐに、ミロはカミュに向かってスカーレット・ニードルを放とうとしたが、大量の氷による蒸気の先にカミュの姿が……見当たらない！

「クッ……どこだ！」

「ここだ。」

声が聞こえたのは、背後。

突然ミロの後ろに現れたカミュが、背後からミロの身体に組み付いた。

「何のつもりだ!？」

正直に言っつて、今更至近距離から凍気を撃つたところで、カミュには黄金聖衣は突破出来ない。

流石に聖衣以外は凍りつくだろうが、そこは既にかなりのダメージを受けているため、大して変わらないのだ。

それを告げると、カミュは微かに笑った。

「フッ……ミロよ、凍らせるだけが凍気ではない。お前を止めるためだ、許せ。」

すると、カミュの手から凍気が放出されミロの身体が氷に覆われ

ていく！

その瞬間、ミロもカミュの狙いに気が付いた。

「カミュ、よせっ！」

ミロの身体を覆う氷はどんどん大きくなり、既にカミュ自身にまで広がっている。

ミロはそれを必死で振りほどこうとするも、酷い凍傷に侵されている手足ではそれは出来ない！

その時、己の最期を悟ったのか、カミュがミロに向かって静かに言った。

「…済まんミロ。私の手で、せめてお前を封じよう。」

「お前……死ぬ気か！？」

ミロは後ろを振り返ろうとしたが、ほぼ全身に広がった氷のせいで、カミュの顔を見ることは……出来なかった。

「さらばミロ！この氷の棺で、永遠に！」

カミュとミロ、二人の周囲に凄まじい凍気が放たれる！

「フリージングゴフィン……！」

二人の身体は……黄金聖闘士数人がかりでも砕けず、永久に溶けることはないと言われた氷の棺に、閉ざされた。

第十六話 氷の聖闘士（後書き）

今回はミロVSカミュ

割りど、というか結構ミロが優勢なのは四人の中で最もダメージが少なかったことと、カミュの凍気は絶対零度に達してないことからです

後二話で十二宮篇には決着が付く予定ですが、思った以上に自分が書くのが（ケータイだから打つのが？） 遅いことが良く分かった

一応夏休み中に終わらせるつもりだったのに……

第十七話 薔薇の舞う双魚宮（前書き）

アフロディーテやシユラやデスマスクって、黒サガのことは知ってたのかな？

第十七話 薔薇の舞う双魚宮

宝瓶宮を越え、宮を繋ぐ道を駆け抜けていく二つの人影、ムウとアイオロス。

彼らが最初に白羊宮を抜けてから既にどれほどの時間が経っているのだろう、辺りはすっかり暗くなっている。

もはや教皇の間も目前に迫り、残す宮もあと一つとなったこの時、二人は言葉を交わすことも無く、ひたすらに走り続けていた。

無言で先に進む二人。

そして遂に、黄道十二宮最後の宮の姿が見えてきた。

双魚宮に到達したアイオロスとムウを待ち構えていたのは、口に薔薇をくわえている、まるで女性かと思紛うような姿の聖闘士。

この男こそ、十二宮最後の守護者、その名も魚座ピスケスのアフロディーテ！

双魚宮の入口で、真っ向から二人を迎撃しようとする意志を見せるアフロディーテに、アイオロス達の足が止まる。

だが、次の瞬間ムウがアイオロスにそつと囁いた。

「アイオロス、あなたはアフロディーテを無視して先に行って下さい。」

そのムウの提案に、アイオロスは難しい顔をした。

「…あのアフロディーテをかわして先へ抜ける、か…。」

アフロディーテの小宇宙や殺気は、完全に二人を同時に相手にする気でこの場に臨んでいる。

そんな相手を前に、攻撃を掻い潜っていくのはそう簡単にはいかないだろう。

そう考えたアイオロスは、それを伝えたが、ムウはそれでも言った。

「大丈夫です、私が何とかしましょう。それに…：…教皇の間で待ち受けているあのサガの相手は、やはりあなたでなければ出来ないのでしょうから。」

最後の最後にムウは、聖域での十三年の永きに渡る混乱に決着を着けるために、その始まりを知るアイオロスに全てを託した。

「そうか。…分かった、私は先へ行く。後は頼んだぞムウ。」

「ええ、任せて下さい。」

ムウはそう言って微笑むと、アフロディーテの方に向き直った。アイオロスはそれを見て、一人アフロディーテに向かって走り出す。

向かってくるアイオロスに、アフロディーテは、くわえた赤い薔薇を手に取り構えて、叫んだ。

「まずはあなたか！アイオロス！」

手に持つ薔薇にアフロディーテの小宇宙が行き渡る。そして、その薔薇が小宇宙と共に投げつけられた。

「ロイヤルデモン・ローズ！！！」

アイオロス目掛けて、勢い良く薔薇の花が殺到した。その結果……

「なにー！」

なんと！それらの薔薇が、アイオロスの前で見えない壁に弾かれるかの如く、方向を変えてアフロディーテへと跳ね返る！

結局、自らの技をくらう羽目になったアフロディーテ。

その際にアイオロスはアフロディーテの傍を素早く駆け抜け、あつという間にその姿は見えなくなってしまった。

「フフ………今のは君の仕業か？おかげで彼を仕留め損なつたではないか。」

薔薇が跳ね返されたことでアイオロスを取り逃がしたアフロディーテが、今度はムウへと問いかけた。

その問いにムウは無言で以て応える。

「黙っているつもりか。ならばその身体に聞いてやろう！」

アフロディーテの手に、再び血のように赤い薔薇が現れた。

「このロイヤルデモン・ローズの香りに包まれた者は、ゆっくりと五感を失い死に至るのだ。さあムウよ、陶酔の内に死ぬがいい！ロイヤルデモン・ローズ！！！」

アイオロスに向けられたものと同じ、赤薔薇の花弁が大量にムウへと襲いかかる。

しかしムウは慌てること無く小宇宙を高めた。

「クリスタルウォール！！！」

ムウの眼前に展開する不可視の障壁が、迫り来る薔薇の香気を跳ね返す！

「うおっ！？」

またもアフロディーテは自分の放った技を受けて吹き飛ばされた。ムウはその様子を冷めた目で見つめている。

「クリスタルウォールに攻撃を仕掛けるのは、鏡に映った自分に向けてするようなもの。全ての攻撃は跳ね返り、ことごとく己を傷付けるしかないのだ！」

「クッ！おのれ…！」

アフロディーテはむきになって薔薇を投げるが、クリスタルウォ

ールを突破することは出来なかった。
そこにムウの言葉が突き刺さる。

「分かりましたか、このクリスタルウォールを破壊するなど到底不可能だということが。大人しく負けを認めなさい。」

「何だと…?」

険しい表情でムウを睨み付け、アフロディーテは立ち上がる。

その手には、先程までの赤薔薇とは異なる漆黒の薔薇。

「君程度の相手に遅れをとる私ではない!そんな壁如き打ち砕いてくれよう!」

激昂するアフロディーテの小宇宙が爆発し、その手に持った黒い薔薇へと集約する。

「受ける!触れるもの全てを砕く黒薔薇!ピラニアン・ローズ!
!...!」

一輪の黒薔薇から次々に生み出される黒い花弁。

一斉にそれらが押し寄せ、ムウのクリスタルウォールに触れたその時、まるで脆いガラス細工のように、クリスタルウォールは音を立てて崩れ落ちた。

「なにっ!?!」

驚きのあまり呆然とするムウに対して、勝ち誇ったようなアフロディーテの声が響いた。

「フツ……どうだ、クリスタルウォールといえども黒薔薇の牙を止めることはできないのだ。これで君は身を守る術を失った。」

薔薇を突き付けるアフロディーテの手に力が籠る。

「今度こそ、その身に受けよ！ピラニアン・ローズ！！！！」

漆黒の薔薇がアフロディーテの手元から花吹雪となり吹き荒れる！

それに対してムウは、先程の様子からクリスタルウォールを張つても無駄だと悟り、花卉に包み込まれる前にテレポートによる脱出を試みた。

その姿が一瞬で消失し、代わりに双魚宮の壁がピラニアン・ローズを受け、ボロボロになって崩壊する。

ムウが目の前から消えると、アフロディーテは即座に小宇宙を察知し身構える。

そして数瞬の後、斜め前方に姿を現した相手に向かって言った。

「テレポートなど所詮は時間稼ぎに過ぎん。かわしきれなかった時が君の最期だ。行け、黒薔薇！」

触れたものを噛み砕く、そんな凶悪な力を持った花卉が、渦を巻いて襲来する。

既にその威力を目の当たりにしているムウは、技を放ったアフロディーテに勝るとも劣らぬ位にまで小宇宙を高める。

高く掲げた手を振り下ろすと同時に、手元から尾を引く光の流星と化したあの拳は！

「スターダストレボリューション！！！！！！」

小宇宙を乗せた光速拳が、命を奪わんと迫り来る薔薇の刃に飛来する。

凶器となって宙を舞っていた黒薔薇が、光の拳と衝突しては力を失い落下していく。

互いの身を削り合う、火花の散るような一瞬の攻防。

その末に、遂にムウの拳がアフロディーテの薔薇の威力を抑え込み、それら全てを叩き落とした。

「ま……まさか、こんな教皇に反旗を翻す逆賊如きにここまで押されるとは……。」

顔に滲む悔しさを隠そうともせず、アフロディーテはムウに対して言った。

彼の信じる絶対的な力、まさしくその体現者である教皇に忠誠を誓うアフロディーテにとって、ムウやアイオロスは逆賊でしか無く、彼らを敵として葬ることは己の使命であるとも考えている。

それなのに、自分の方が逆に圧倒されている現状は、アフロディーテには耐えられないことであった。

しかしムウは、そんなアフロディーテの言ったある一言に反応した。

「逆賊……？今の教皇がかつての教皇を殺し、アテナまでも害そうとしたことを承知の上で言っているのか。」

「その通り！少なくとも私とデスマスク、シユラの三人は、教皇の正体を知って、敢えて忠誠を誓っているのだ！」

思わずムウの脳裏に力が全てと言い、同じように教皇に従い立ちはだかったデスマスクの姿が去来する。

あの時程動揺した訳ではない。
だが、胸の内に苦いものが広がるのを抑え切れなかった。

「そもそも考えてみるがいい。この地上の平和を守るためには強大な力は不可欠。ならばこそ、教皇に忠誠を誓うのは当然だろう?」

言葉を続けるアフロディーテの顔には、そのことに対する後ろめたさは微塵も感じられなかった。

教皇への、そして教皇がもたらす平和への揺るがぬ信頼がその表情から見てとれた。

「例えアテナに反することになっても……ですか?」

口をついて出てきたのは、聖闘士としての本分についての問い。

聖闘士とは、アテナの下で地上の平和のために闘う戦士。

果たしてアフロディーテの真意は何処に在るのか、ムウはそれを問い質した。

「フツ……無論だ。」

「何だと!」

「ならば逆に聞くが、君は幼い赤子に地上の平和が保てると思うか?何も出来ない無力な神よりも、強い力で世界を治める教皇にこそ正義がある。それが分からぬはずはあるまい!」

或いは、アフロディーテの考えも正しいのかもしれない。

ただ神に依存するのでは無く、人の力で以て平和を築く、それもまた一つの理想であろう。

それについては、ムウも無碍に否定するところではない、ないの

だが、その考えを認める気は……無い。

「なるほど、確かに神とはいえ、赤子のアテナではなく教皇に従うというのは、分からなくも無いでしょう。」

「ほう…?」

意外そうに声を上げるアフロディーテだったが、ムウは更に続けた。

「だが。」

ムウの声が一際強くなる。

「例えそうだとしても、罪無き我が師を殺め、幼きアテナを害そうとするような者の正義など、私は絶対に認めない！」

その瞬間、ムウの小宇宙が物凄い勢いで膨れ上がった。

双鱼宮の空気が音を立てて震える程の膨大な小宇宙。

その果てしない小宇宙が、ムウの頭上に集中し、光輝く拳と共に降り注ぐ！

「行くぞ！スターダストレボリューション！！！！」

アフロディーテも即座に黒薔薇で光速の拳に応じる。

しかし次の瞬間、流星のような拳がピラニアン・ローズの黒薔薇を突き破った！

「なにぃ！」

そのまま光の渦に巻き込まれたアフロディーテの身体が、天高く舞い双魚宮の天井に激突する。

そして背中に強い衝撃を受け息が止まりそうになった拳句、更に落下して頭から地面に叩きつけられた。

呻き声を上げながらも、ゆっくり立ち上がるうとするが、ふと気付くと自分の周囲に光の輪が広がっている！

「こ……これは!？」

見れば、ムウの小宇宙に同調してその光は更に輝きを増していく。

「私にはあなたを殺す気はありません。ですがデスマスク同様、ここから消え去ってもらいます!」

目の前で牡羊座を背負った小宇宙が激しく燃える。

「受けよ!スターライト……!」

大いなる光の輪が収束し、アフロディーテを呑み込もうとした、刹那、ムウは見た。

彼の手の中にあつた黒薔薇が、いつの間にかその色を白へと変えている。

それに気付いた時には既に、空気を引き裂くような風切り音が、その耳に届いていた。

アフロディーテを取り囲んでいた光輪は既に消え、苦し気に顔をしかめるムウの胸には、さっきまで無かった一輪の白い薔薇が、その茎の半ばまで突き刺さっている。

黄金聖衣さえ貫くその薔薇は、敵を強制転移させる技によって、身体ごと光に吞まれそうな危機に陥ったアフロディーテが、最後の手段として放ったものだった。

しかし、自身もまた肩で息をしながらも、緩慢な動作で薔薇を構えるアフロディーテの顔には、徐々に余裕が戻りつつあった。

「ムウよ、この私に初めて白薔薇を撃たせた君の力は賞賛に値するぞ。」

そう言って、これ見よがしにムウにその白薔薇を突き付けると、アフロディーテの小宇宙が昂り威圧感を増していく。

「そ……その薔薇は……？」

スターライトエクステンションの途中で放たれたにもかかわらず、技を破ってきたことから、何か特別なものであることはムウにもすぐに分かった。

それを確かめようと、力任せに己の胸から薔薇を引き抜く。すると、血で微かに赤く染まった白い花弁が目に残った。

一見すれば、ただの薔薇。

双魚宮に代々伝わる毒を持った薔薇の一種だが、それ以外は普通の花と全く変わらない。

だがそこに黄金聖闘士の小宇宙が込められた時、その威力、その

鋭さは、もしムウの纏っているものが黄金聖衣でなければ、一撃で心臓を貫かれ、絶命していてもおかしくは無かっただろう。

その事実には背を冷や汗が流れるのを感じながら、ムウはアフロディーテと対峙する。

アフロディーテの方は、そんなムウの反応を見透かしたように、更に小宇宙を高めていく。

「先程も言ったがこれを撃つのは君が初めてだ。私の持つ赤薔薇は遅効性のロイヤルデモン・ローズを引き起こし、黒薔薇は即効性のピラニアン・ローズを生み出す。そのどちらも通用しない相手に使うのが、この白薔薇なのだ。」

白薔薇を握り締める指に、一層の力が込められる。

「これは私の手から離れると、一瞬の内に敵の心臓を貫き、息の根を止める。さっきは黄金聖衣に救われたようだが、次はそうはいかぬぞー！」

そう宣言すると同時に、必殺の白薔薇を今すぐにも放たんとするアフロディーテ。

だが、ムウはあくまで構えを崩さない。

それをどう思ったのか、アフロディーテは憐れむように鼻で笑った。

「フツ……君がどう足掻こうと、この薔薇は決してかわせん。テレポートをしても薔薇は追尾し、最後には君を仕留める。覚悟はいいか！」

最も、覚悟したところで見逃したりはせんがな と後に続ける。
すると、黙っていたムウが徐に口を開いた。

「忘れたのかアフロディーテ。聖闘士の勝敗を決めるのは技ではない、小宇宙だということを。」

「何：？」

「例えあなたがどんな技を使おうと、より己をセブンスセンスの限界に近付けた方が、この闘いに勝利するのです。」

その言葉にアフロディーテは美しい顔を歪めた。

「君の小宇宙が私を超えらると言うのか？思い上がりも甚だしい！」

怒鳴り声を上げると共に、その小宇宙が爆発する。

そして再び放たれる、全てを穿つ白薔薇の凶刃！

「戯れもここまでだ！ムウの心臓目掛けて飛べ！ブラッディ・ロズ！！！！！」

急所を狙って投げられた白薔薇が、目にも止まらぬスピードで一直線に飛来する。

その一撃はまさに、光速を誇る黄金聖闘士でさえ回避は不能！

しかし、その瞬間アフロディーテの想像を遥かに超える勢いでムウの小宇宙が激しく燃え上がった！

「な……何だこの小宇宙は！」

「……真の正義を示すため、今こそ燃える私の小宇宙！」

身体から立ち上る小宇宙は黄金聖闘士たるアフロディーテを上回る、驚異的な勢いで爆発した。

「バカな……本当にこの私を超えるというのか!?!」

「申し訳ありませんが、超えさせてもらいます!」

凄まじいまでに膨れ上がった小宇宙と研ぎ澄まされたセブンセンチズが、不可避と言われた白薔薇の一撃を感知する。

「見切った!白薔薇の軌跡!」

その瞬間炸裂する小宇宙、繰り出されたのは、かの教皇シオン直伝のアリエスのムウ最大の拳!

「行け!スターダストレボリューション!……!」

無数の煌めく星の光を纏った拳が、アフロディーテ渾身の薔薇の小宇宙を押し返す!

「なに!」

激突の末に、必殺の白薔薇を突き立てられたのは……アフロディーテ。

遂に勝敗は決した。

「クッ…！わ…私は…まだ闘える。」

心臓に自身の白薔薇を受け、更に最大限に威力の高まったムウの拳を受けたアフロディーテは、指一本動かせない程のダメージを負い倒れ伏した。

だが、それでも尚、立とうとする彼の姿を見たムウは、そのまま双魚宮を立ち去ろうとはせず、アフロディーテに近付いた。

「何を…！？」

不意に近付かれたことに戸惑うアフロディーテ。

それを無視して、傍に膝き小宇宙を高めたムウは、胸の中心にある真央点を突いた。

「なっ！？」

「これで死ぬことは無いでしょう。ただ、しばらくは動かないように。」

驚くアフロディーテを尻目にそれだけを言うと、ムウは双魚宮を後にしようとした。

「待て！」

しかし背後から制止の声が届く。

振り向いたムウの前には、辛うじて、であろう、立ち上がったアフロディーテの姿。

これ以上闘いを続けるつもりか、と再び小宇宙を高めるムウに、思いもよらない言葉が告げられた。

「私も……教皇の間へ行こう。」

思わず目を見開いた。

また闘いになるよりずっとましであるが、その真意が分からない。

「行って、どうするのですか？」

「…教皇の真の姿を見定め、決める。」

二人の視線がぶつかり、やがてムウが折れた。

「そうですか……分かりました。では共に行きましょう、あの二人が居る場所へ……。」

恐らくはこの長かった聖域の戦争でも、最後の闘いとなるであろう二人の所へ、ムウとアフロディーテは進み始めた。

第十七話 薔薇の舞う双魚宮（後書き）

聖闘士についてのちょっととした考察（作中設定）〜その3〜

・デスマスクとアフロディーテ

この二人について、読者の皆様はどう思っていますか？

大抵の人は、悪役とか黄金最弱とか、そんなイメージではないでしょうか

そこで、今回ふと思ってしまった、この二人の強さの可能性について考えてみたいと思います

・スターライトエクステンクション

今回考えるのは、冥界篇についてです

実は作者はデスマスクはともかく、アフロディーテの十二宮篇での闘いには疑問があります

なにせ殆どダメージが無く、黄金聖衣も装備していたアフロディーテを一撃で殺すなんて理不尽過ぎる

そこで冥界篇です

この時、二人はハーデスの尖兵として現れ、二人同時にムウにやられてしまいました

冥界篇で明らかにムウが倒したのはデスマスク、アフロディーテ、ミューの三人

いずれも止めはスターライトエクステイクションです

また星矢にもこの技は使用され、白羊宮からスターヒルに飛ばされました

このことから、スターライトエクステイクションは強制的に相手をレポートさせる技、と考えられます

で、本題

実はデスマスクとアフロディーテはこの技をまともにくらっても死んでません

読むと二人が飛ばされたのはラダマンティスの前、つまり地上です

実際は冥界へ続く穴に落とされたのが、二人の直接の死因なのです

これは何故でしょうか

最初は、元々ムウがそこに飛ばしたのではと考えました

しかし、その後の展開から見ると、ミューはこの技を受けて死亡している可能性が高いです

となると、ラダマンティスが部下を殺す訳ないため、これは違います

次に、ハーデスの配下だったからとも考えましたが、やはりミュー

のことを考えると却下です

そこで作者が考えたのは、二人が実はスターライトエクスティンクションから脱出したのではないかということです

そう考えると、ミューが死亡したのは冥界へ送られたからで、二人が生き延びたのはその直前でそれを回避した、と思えば、納得できるのではないでしょうか

冥界篇で寝返った黄金は、大体が相手を殺すのを避けているように見えます

しかしデスマスク達の技は致死性が高く、加減が利きません

故に二人が最初にわざとやられて監視の目を逃れようとした、というのは美化し過ぎかな？

でもこれも一つの見方だと思います

駄文失礼しました

第十八話 二つの心（前書き）

最近チャンピオンのLC外伝にデジユルが登場したけど……新技と
か出るのかな？と期待してみる

あと、少しネタバレになるかもしれないけど、今週のLC外伝（
10/13）に出てきたあの人は、反則だろ

あの人から見たら童虎でさえ小わっぱなんだろうなあ

第十八話 二つの心

アフロディーテのすぐ傍を抜け、双魚宮の中をアイオロスは走る。不可能とも思われた十二宮の突破、しかし数々の助力を得て遂にその全てを乗り越えた。

もはや教皇の間は目前、アイオロスの歩みを止めるものは存在しないかと思われた。

「うっ……これは！」

しかし、そう呟いて突然足を止めたアイオロスの前には、教皇の間へと続く階段と、それを埋め尽くすように広がっている大量の深紅の薔薇。

「魚座の聖闘士に伝わるという魔宮薔薇^{デモンローズ}か、昔はこんなものは無かったはずだが……」

かつては王宮の守りとして使用されたという、魔宮薔薇の甘い香りが立ち込める花の階段へ、アイオロスは慎重に近付いていく。

この薔薇もまた、黄金聖衣と同様に、神話の時代から魚座に受け継がれてきたものの一つ。

双魚宮に併設された薔薇の庭園では、守護者の小宇宙によって常にこの魔宮薔薇が咲き乱れているのだ。

そして過去における幾多の聖戦で、聖域の防御を担ってきた薔薇の守りが、今教皇の間に向かうアイオロスの行く手を阻む。

しかし、命を懸けてここまで進んできたこの男は、こんなものは止まらない。

「だがこんな薔薇如き吹き飛ばしてくれよう！アトミック・サンダーボルト！！！！」

拳から発生した巨大な光球が、教皇の間へ続く階段を滑るように駆け抜け、空へと消える。

その衝撃で道を塞いでいた薔薇は消し飛び、後には表面が露になった階段だけが残されていた。

そうして階段を上り辿り着いたのは、教皇の間と外界とを隔てるぶ厚い石の扉、その向こうで待ち構えているであろう男の姿が目に見え、思わず拳に力が入る。

そしてその扉が、アイオロスの手でゆっくりと開かれた。

扉の向こうには広間のような空間が広がり、その奥には教皇の法衣を羽織った男の姿があった。

その顔を常に覆い隠していた仮面は、既に外れている。

この男こそ、十三年前の悲劇を起こした張本人にして守護者不在の双児宮の主、その名もサガ！双子座ジミニのサガ！

普段聖闘士達が招集されるこの場には、十二宮を越え、たった今、ようやく教皇の間に辿り着いたアイオロスと、その教皇のみが座することを許された、この部屋にただ一つある椅子から立ち上がり、静かに佇むサガの二人しかいない。

「久しいな、アイオロス。よくぞ私の所まで辿り着いてくれた。お前が赤子のアテナを抱いてここ聖域を去った、あの時から既に十三年か……。やはりお前は真の聖闘士、私はずっとお前が来るを待っていたのだ。」

優しいな微笑を浮かべてそう言ったサガの様子に、アイオロスは意表を突かれた。

それは、今の今までアイオロスが想像していたものとはまるで異なる、それこそかつて神の化身と呼ばれていた頃のサガの姿だった。

「サガ……やはりお前の正体は……」

目の前のサガは十三年前、共に居た頃のまま。

心のどこかでアテナを殺そうとした時のサガは何かが狂っていたのではないか、と思っていたアイオロスはその姿に強い衝撃を受けた。

なぜなら、あの頃と変わらない今のサガが、教皇として聖域に君臨しているのだ、それはつまり、本心からあの事件を引き起こしたということに他ならないのだから。

大きな失望感に打ちのめされながらも、アイオロスはそれを押し殺した。

「……分かっている、私のした事は決して許されることではない。だが私は……いや、今はそんなことを言っている場合ではないな。お前はアテナを救うために来たのだろうか？」

「もちろんだ、下で倒れているアテナの所まで来てもらっぞ、サガ。お前の力でアテナの胸に刺さった矢を抜いてくれ。」

しかし、返ってきた言葉にアイオロスは耳を疑った。

「済まない。あの矢は私には抜くことが出来ないのだ。」

「何だと！そ……それは本当か！？」

自然と言葉に熱を帯びるアイオロス。
それに対してサガの返事は冷静だった。

「ああ、残念だが事実だ。しかし慌てるな、私の話を聞いてくれ。アテナを救うことは可能なのだ。アイオロス、お前はこの先のアテナ神殿へ行け。」

「神殿へ……？なぜだ？」

「忘れたか、アテナ像に捧げられたあの二つの神器を。」

アイオロスは眉をひそめて僅かに思案すると、何かに気付いたように顔を上げた。

「そうか……。あそこには確か……」

「そうだ、そこにあるのは神話の時代よりアテナと共にあったという神具、即ち勝利の女神ニケと楯！」

教皇の間の更に奥に存在する、聖域の象徴とも言うべきアテナの像。

何mもある巨大な像、その右手にニケを左手には楯を持ち、いずれ聖戦の折にはアテナ自身がそれらの武器を身に付け、戦うことになるのだ。

「ニケは聖闘士に勝利をもたらし、楯はこの世のあらゆる邪悪の攻撃を弾くと言われている。かつてお前はアテナと共にニケを持ち出したが、それは今アテナの手にあるのか？」

「ああ、アテナが常に持っている、あの杖がそうだ。」

そう、十三年前アイオロスがアテナを抱いて聖域から逃れた際に、その証としてニケを持ち去っていたのだ。

そしてそれは、今は形を変えて真の持ち主の手にある。

「そうか、お前がここまで進んでこれたのは、そのおかげかもしれない。…だがアイオロスよ、楯はまだここ聖域に残っている。あの楯をアテナの方向へかざすのだ、そうすれば矢は消える！」

「よし、分かった！」

躊躇している時間は無い。

アイオロスは急いで楯が置かれているアテナの像を目掛けて走り出した。

だが教皇の間を抜けようとした次の瞬間、背後からサガの声が聞こえたような気がして、アイオロスは後ろを振り返った。

見ると、サガが胸元を抑えるようにしながら、床にひざまずき息を荒げて呻いている。

「サガ！どうした！？」

咄嗟に駆け寄ると、汗を流して何かに耐えているサガの苦しげな顔が目に入る。

「おい！サガ！」

「うう……私のことは構うな……いいから行け……。」

その時のサガの声は、今まで聞いたことが無い程弱々しかった、まるで息をすることさえも苦痛であるかのよう。

しかし、それでもサガは身体を震わせながら絞り出すように言った。

「は……早くしろ……アテナを救うのだ……。」

「しかし……。」

「急げアイオロス！さもないと……私は……私は……お前を殺してしまう……。」

その瞬間、アイオロスはいきなり身体に凄まじい衝撃を受けて吹き飛ばされた。

突然の攻撃に成す術も無く地面に叩きつけられたアイオロスは、起き上がってサガの方を向いた瞬間、信じられないものを見た。

「何だ…？サガの髪が…黒く変わって……」

なんと、見ているうちに髪 逆立つ程に長く伸びたサガの髪が、本来の金色から黒髪へと変化していくではないか。

それだけではない、身体の変貌と共にそれまでの清らかだった小宇宙が見るものを圧倒するような、言い知れぬ邪悪な小宇宙へと変質する。

アイオロスはそれを黙って見ていることしか出来なかったが、彼はこの小宇宙に覚えがあった。

「どういうことだ。この圧倒的な小宇宙……十三年前のあの時、サガから感じたものと同じだ。一体何が！？」

謎の変化に呆然とするアイオロス。

そして、サガはというと、ようやく身体の震えが治まったのか、ゆっくりと立ち上がっていく。

だが顔を上げたサガを見たアイオロスは驚きを隠せなかった。

その長髪は全て禍々しい漆黒に染まり、狂気を宿したような目は真っ赤に充血している。

優しげな笑みを見せていた顔は、それまでとは似ても似つかない酷薄な表情、そして他人を見下すような冷笑を浮かべていた。

「ククク……お前などに楯を渡してなるものか。ここで貴様を殺せばアテナも息絶える。そうなれば二ヶも楯も私のものだ！」

まるで人が変わったような口調で話し始めるサガ。

全身から立ち上る強大な小宇宙と殺気にアイオロスも拳を構えた。

「その姿と小宇宙、あの時のサガはお前か！」

「今頃気が付いたのか？おめでたい奴だ。」

「黙れ！お前にアテナの命は取らせん！」

言い切るよりも早く、アイオロスの手から閃光が走った。これぞセブンセンスに達した者のみが可能とする、聖闘士としての究極の到達点の一つ、光速拳。

だがなんと！サガはアイオロスが放った光速の一撃を軽々と片手で止めた！

「なににー！」

「何を驚いている。かつての私の力を、お前が知らないはずはあ
るまい。」

恐るべきはサガ！

光速拳の衝撃に纏っていた法衣はズタズタにされたが、その身体はまるで無傷！

「フツ……こんな動きにくい法衣などもう必要ない。来い、聖衣よ！ここへ来て私の身体を覆え！」

サガの小宇宙が激しく燃え上がり、その背後に現れる黄金の光。それを見たアイオロスの顔に緊張が走る。

「あ……あれは、ジヘミニ双子座のゴールドクロス黄金聖衣！！」

光が消え、遂に黄金聖衣がその姿を現した。

四本の腕と二つの顔から成る奇怪な形状の聖衣が、空中でバラバラに分解しサガの身体に装着され、遂に完全なる戦闘態勢となった。

「行くぞアイオロス。異次元の彼方をさ迷い続けるがいい！アナザーディメンション！！！」

巨大な小宇宙が切り開く超常の扉。

遙かなる異次元空間がサガの頭上に展開する。

「クツ…！異次元に飛ばされる訳にはいかん！」

双児宮で受けたものを更に上回る引力に、アイオロスは小宇宙全開で堪える。

だがやがて周囲が異次元にどんどん引き込まれていき、遂に身体ごと空間に呑み込まれそうになった、その時、射手座の翼が大きく羽ばたいた！

そして広がるサガと較べても勝るとも劣らない強烈な小宇宙。

「行くぞサガ！一遍死んで目を醒ませ！」

サガに向けられた拳が激しい光に包まれる！

「くらえ！アトミック・サンダーボルト！！！！！」

光球を纏う拳の威力が、異次元を突き破る！

そしてその衝撃波は消えること無くサガの身体を貫いた。

アナザーディメンションによる異次元は消え失せたが、吹っ飛ば

されて教皇の間を支える柱に激突したサガは何事も無かったかのよう
に立ち上がる。

発せられる小宇宙は微塵も衰えず、大した傷も負ってはいない。
同じ黄金聖衣を纏う者同士、アイオロスもサガが一撃で倒せると
は思っていなかったが、まさかいくらなんでも無傷とは……。
だが、そんなことで気後れするアイオロスではなかった。
更に身体と小宇宙を奮い立たせ、再び放つ渾身の拳。

「アトミック・サンダーボルト！！！！」

「無駄だ！！」

目前に迫る拳は、突き出されたサガの両の掌に止められ、その威
力は四散してしまった。

「バカな！アトミック・サンダーボルトの威力を全て受け止めた
というのか！？」

「何を驚く。私の力は既に黄金聖闘士をも超えた。お前の拳など
涼風ほどにも効かん！」

サガの拳がアイオロスの鳩尾を強打し、そのまま天井に叩きつけ
た。

そして着地すると同時に、反撃の暇も無くまたしても光速拳で殴
り飛ばす。

「ククク……このままお前をなぶり殺しにしてくれる！」

聖衣の上からでもダメージを受ける程の、とてつもない拳の衝撃
に宙を舞ったアイオロスは、それまでの十二宮での傷も相俟って、

遂に地面に倒れ伏す。

「なんとという強さだ……身体に……力が入らない……。」

床に手をつき、それでも立とうとするアイオロスの前に、悠然と近付いたサガは、徐に手刀を構えた。

「止めだ、アイオロス。お前は死に、私は楯も二ヶも手に入れる。そしてこの私こそが地上の支配者となるのだ！」

振りかぶった手刀が猛烈な勢いで首を目掛けて下ろされた。本気の殺意が籠った一撃がアイオロスに迫った……その時！

「クリスタルウォール……！！」

「なに……い……？」

突如二人の間に現れる小宇宙の障壁！

それにより、確実にアイオロスの息の根を止めていたであろう手刀は、その壁を砕くに留まった。

怒気を漲らせたサガが小宇宙の出所に目を遣ると、そこにいたのはやはり……

「お前か！牡羊座のムウ！」

そして、

「……アフロディーテ！お前もか！」

双魚宮での激闘の後、アイオロスを追って教皇の間へ向かったム

ウとアフロディーテが姿を現した。

未だ闘いのダメージが残っているのか、アフロディーテはムウの肩を借りて立っている。

だがふらつきながらも、彼の目はアイオロスと対峙するサガをはつきりと捉えていた。

その、悪魔のような姿を。

それを見たアフロディーテは、心に動揺が広がるのを抑えきれなかった。

知らなかった訳ではないのに。

最も教皇の間に近い双魚宮の守護者である彼だからこそ、時折不安定になるサガの小宇宙を感じ取ってはいたのだ。

しかし初めてその様子を目にして、沸き上がってくる想いを口にせずにはいられなかった。

「…私はあなたをサガとは認めない。私が今まで正義と信じ、仕えてきたお方は断じてお前ではない!」

「何だと…?」

決して私欲からではない。

力で地上を治めるのは、あくまで世界の平和のために。

教皇に扮したサガを容認していた者達は皆、そう考えてずっと長い間彼に従っていたのだ。

あのサガならば世界を平和へ導けると、そう信じて。

だが現状はどうだろう。

神の化身と言われた程の清らかな小宇宙は既に、影も形も無い。

今のサガから発せられる気配、それは平和とはあまりにかけ離れたものだった。

「お前も私に反旗を翻すつもりか、アフロディーテ！」

サガの目付きが険しさを増していく。

つい膝を着いてしまいそうになる程の凄まじい威圧感が、その場にいる全員にのし掛かる。

返答次第では、アフロディーテすら殺すことを厭わないだろう。

その殺気に、歴戦の黄金聖闘士でさえ息を呑んだ。

しかし、その間隙を縫うようにして、ムウが動いた。

アイオロスの傍に駆け寄り、アテナの救出方法について尋ねる。

「…それでは、神殿にある楯をかざせばよいのですね？」

「そうだ。」

「分かりました。ですが、このままではサガに阻まれ誰も神殿へは辿り着けないでしょう。私がサガを食い止めます。その隙にどうか、あなたは先に進んで下さい。」

そう言ってムウはアイオロスに背を向けると、サガの前に立ちほだかった。

全く後ろを振り返ろうとしないその姿に、心中で申し訳無さを感じつつも、弱った足腰に喝を入れて、アイオロスは神殿の方向へと歩み始めた。

「くそっ、神殿へは行かせん！そこをどけムウ！」

それに気付き、神殿へ行かせまいとするサガは、小宇宙を籠めた拳の一撃で、ムウを排除しようと襲い掛かった。

だがそれも、再び現れたクリスタルウォールによってまたしても阻まれる。

これを何度も繰り返されてはいたちごっこになりかねない、そう直感したサガは、それを回避するための方法を探ろうとするが、次に攻撃を仕掛けたのはムウの方だった。

「…アイオロスが神殿に着きアテナを救うまで、お前をこの先へと進ませはしない！」

その瞬間、ムウの小宇宙が急激に膨れ上がった！

「我が師の無念を今ここに！スターダストレボリューション！！！」

煌めく流星のような幾筋もの光弾がサガを大きく吹き飛ばす！

ありつたけの小宇宙を乗せたムウ渾身の拳に、サガの身体が宙を舞う。

その勢いで背後の石柱をも砕き折り、頭から地面に激突した。

この時点で闘いの舞台である教皇の間は、柱は折れ、壁や床には亀裂が走り、大広間は激しく損傷している。

その瓦礫の山と言っても過言ではないような所から、這い出してきたサガには……目立った外傷は無かった。

それを見たムウは驚愕の表情で拳を構える。

だが、そんなムウの姿を嘲笑うかのようにサガは口を開いた。

「フツ、無駄だ……何度やろうがお前の技などこの私には通用しない。」

「クッ…！」

気圧されそうになりながら、もう一度小宇宙を高めるムウ。
しかしその前に、今まで殆ど動かなかったアフロディーテが立ち
はだかった。

ムウではなく、サガの方を向いて。

「もうやめてくれ。そんなあなたの姿は見たくない。」

彼はそう言って僅かに目を伏せる。

ムウは一瞬呆然としてアフロディーテの方を向き、突然横やりを
入れられたサガは、怒りの声を上げる。

「貴様……やはり裏切るか！」

「違う。だが私が心から仕えるのは、あのお方のみ。そのためな
ら私は、敢えてこの拳を向けよう……例え相手があなただとしても
！」

アフロディーテの手に現れた漆黒の薔薇が、サガへと突きつけら
れた。

そして吹き荒れる薔薇色の小宇宙。

その小宇宙によって生み出された黒薔薇の花吹雪が、渦を巻いて
襲いかかる！

「受ける！黒薔薇の牙を！ピラニアン・ローズ……！！！」

触れるもの全てを噛み砕く黒薔薇の猛威！

それがサガの身体に喰らいついた。

だが次の瞬間、下から突き上げるように放たれた拳の衝撃で薔薇はおろかアフロディーテすらも弾け飛ぶ！

サガは着地したアフロディーテを見下ろしながら告げた。

「言っただけだ、お前達の技などこの私には通用しないと！」

そしてサガの小宇宙が高まっていく。

大きく、今までよりも巨大に、いやそれ以上に果てしなく！

「もはや面倒！二人まとめて吹き飛ばしてくれ！」

これまでは圧倒的な力にものを言わせて攻めるだけだったサガの小宇宙が、その両腕に集まっていく。

辺りを覆い尽くす巨大な小宇宙の背景に、宇宙が見えた！

「見るがいい！銀河の星々をも砕くジエミニの真髄を！」

サガの頭上で交差した両腕から凄まじい小宇宙が今、解き放たれる！

「ギャラクシアンエクスプロージョン！！！！！」

まさに銀河爆砕！

究極の小宇宙が織りなす破壊の波動が、途轍もない光の柱となってムウ達二人を呑み込んだ。

大爆発の余韻が止み、教皇の間に立っていたのはサガただ一人。壁に叩きつけられたムウと石畳に激突したアフロディーテはピクリとも動かない。

「やっと片付いたか。これで残りは奴だけだ。アイオロス、貴様に楯は渡さん！」

背筋も凍るような薄ら笑いを浮かべながら、サガもまた神殿への道を走り出した。

神殿を目指すアイオロスは、残り僅かな力を振り絞って進んでいた。

もう時間も体力も限界に達しようとしている中、ただ気力のみで足を動かすアイオロス。

教皇の間からアテナ像のある神殿へ繋がる回廊を走り続ける。セブンセンスズによって既に楯の在処は手にとるように把握出来ている、そこを目指すして走る、どこまでも。

だがおかしい。

行けども行けども神殿に辿り着かない。

まるで、何時間もずっと同じ場所をぐるぐる回っているかのよう

に！

こんなことが可能な人物は、この場に一人しかいない！

「何処へ行くつもりだアイオロス。貴様にもう逃げ道など無いぞ！」

現れたのはやはりこの男、双子座のサガ。

アテナの楯を取るために乗り越えねばならない最後の障害、それを打ち破るための手段はもはやただ一つ。

「受ける！大いなる黄金の矢を！インフィニティ・ブレイク！！！」

無数の輝く閃光と化した光速拳、それはさながら黄金の光矢！

螺旋を描く矢の軌跡が、サガの全身を呑み込み、そして突き刺さる！

しかし……

「バカな……！！」

アイオロスの視線の先には、顔色一つ変えずに必殺技を受けきったサガが傲然と立っているではないか。

あろうことが、全身隈無く攻撃が直撃したにもかかわらず、微動だにしていなない。

「フツ……その弱った身体で何が出来る？今のお前の攻撃などもはや避けるまでも無いわ！」

この世のものとは思えぬ程の強さを発揮するサガに、黄金聖闘士たるアイオロスですら手も足も出ない。

思わず諦めかけたその時、十三年前の敗北が頭をよぎる。赤子のアテナを守るためとはいえ、あの時のサガからは逃げるこゝとしか出来なかつた不甲斐ないかつての自分への憤りが甦る。

「だが今は、違う……かつて聖域を去つた時に誓つたのだ。私は生涯聖闘士として己の命を全うすると……共にここまで闘つてくれた者達のためにも、そして何よりアテナのために！ここで負ける訳にはいかんだ！」

正真正銘最後の力、例え残り僅かだとしても、命ある限り小宇宙は燃える！

「アテナよ……小宇宙よ……私に力を与えてくれ！」

命を懸けて小宇宙を燃やすアイオロス。

しかし、サガとてそれを指をくわえて眺めている訳が無かつた。

「貴様の残り僅かな命の炎など、この私が掻き消してくれよう！」

今度こそ確実な止めを刺そうと、渾身の力と小宇宙を込めて凄まじい勢いで繰り出した拳が……寸前でピタリと止まつた。

「うっ！？こ……これは！」

とても瀕死の身体とは思えない、サガでさえも無意識に拳を止めるような、恐ろしく強大な小宇宙がその場を満たす。

しかし当のアイオロスは、既に意識を失いかけていたのではないかという程ゆっくりとした動作で拳を構えた。

「何だ！？ 奴の背後に浮かび上がるあれは……黄金の翼！？」

小宇宙と聖衣が一体となり、射手座の象徴とも言える翼のオーラが生み出される！

そしてそのアイオロスの全小宇宙が、サガに向けられた拳へと集約されていく。

その圧倒的な小宇宙を感じたサガは、遂に弾かれたように攻撃に打って出た。

「おのれ！ 貴様など、この一撃で葬り去ってやる！ 受ける！ 銀河を砕くこの拳を！」

「私は… 負けない！ 燃え上がれ……… いや、燃え盛れ我が小宇宙！ 我が想いを乗せて、飛べ！！」

お互いが全ての力、全ての小宇宙をその一瞬に爆発させた。

「ギャラクシアンエクスポージョン！！！！」

「インフィニティ・ブレイク！！！！」

あらゆるものを打ち砕く超新星爆発と、なにもかもを貫き通す黄金の光矢が激突する！

二人の技の威力がぶつかり合い、弾け飛びそうな小宇宙が中間地点でくすぶっている。

それぞれが、この一撃が最後だと理解しているのだろう、自身の力の最後の一滴まで振り絞って、相手の技を押し返そうと小宇宙を込める。

そして大爆発の衝撃波と、研ぎ澄まされた光速拳とがせめぎあい、互いに一歩も退かない力比べに突入した。

崩れそうで崩れない、ギリギリの均衡状態で二人の小宇宙だけがどこまでも高まり続ける。

だがその時、サガが何かに気付いた。

「これは！？アイオロスの技の軌跡が変わった！？」

アイオロスの手元から螺旋を描いて放射状に大きく広がる拳の軌跡が、再び渦を巻いて一点に集中していく。

光速拳による光の矢が徐々に中央に集まりつつある、その時！

カッツッ！！

「ッ！これは！？」

そこで見たのは、サガの右足に突き刺さる射手座の矢。

高まる小宇宙が、双児宮で放った黄金の矢を呼び寄せたのだ。

その瞬間、サガとアイオロスの均衡が崩れた。

そして遂に、心の小宇宙が奇跡を起こす！

「なにい！アイオロスの拳が……変化した！？」

無数の閃光が重なり合って生まれたそれは！

「BIG BANG!!?」

宇宙開闢にも似た黄金の光が、ギャラクシアンエクスプロージョンを貫いた!

その衝撃を受けて吹き飛ばさる。

天井さえも突き抜け、夜空に高く舞い上がる。

再び地上へ落下してきた時、彼は既に気を失っていた。

それを見たアイオロスは、一気に身体力が抜け膝を折る。

「ようやく……勝った……!」

噛み締めるようにそれだけを呟くと、フラフラと立ち上がり神殿へと進み始めた。

長かった……十二宮を越えサガをも倒して、そしてやっと辿り着いた、楯を持つアテナの巨像。

その左手にある楯に手を掛けると、まるで待ち構えていたかのようアイオロスの手に収まった。

もう時間が無い、それを十二宮の入口、アテナが倒れている方向を目掛けて高々と掲げて叫ぶ!

「楯よ!アテナを救えー!ー!ー!」

それは光の速さをも超えた出来事だった。

楯より溢れ出した神聖な光が、聖域全体を通り抜けた。

長い長い闘いの末にようやく、アテナの胸に刺さった矢は消え去った!

そしてこの男も……

「サガの小宇宙が元に戻っている。サガの中に巣食っていた……
邪悪な気は…消えたか。」

全ての小宇宙を放出しきったアイオロスは、ゆっくりと地面に倒れた。

第十八話 二つの心（後書き）

やっと十二宮制覇しました

あと一話で十二宮篇は完結です

黒サガは強かった、並の黄金聖闘士を超えていますね
なにしろ

ペガサス流星拳（光速拳） 効かんなあ

ペガサスローリングクラッシュ 無駄無駄無駄ア

ペガサス彗星拳（第七感全開） ちよつと気絶したかな？

強すぎだろう、アフロディーテとかだったら最後の彗星拳で絶対死
んでるって……

第十九話 終結（前書き）

最近、私事で忙しくしばらく更新が遅れるかもしれません

なので、今まで更新時に行なっていた感想への返信は、これからはなるべく早くするようにします

今まで感想を書いてくれた方々には、申し訳ありませんでした

第十九話 終結

白羊宮前の広場、星矢達青銅聖闘士は声も出せないような息苦しさを感じていた。

遙か遠くに見える十二宮を模した火時計の火は、既に最後の双鱼宮に達し、それすらももう小さく消えかかっている。

十二時間のタイムリミットが迫っているのだ。

あの火が消えた瞬間、アテナに突き刺さった矢はその心臓を貫く。そうなれば彼女は二度と目を覚ますことは無いだろう。

「おいっ！アイオロス達はまだか！？もう時間が無いぞ！」

十二宮の彼方にある教皇の間の方を見ながら、星矢が拳を握りしめた。

「落ち着け星矢！ここまで来ればもはや俺達にはどうにもできん。ただ彼らを信じて待つだけだ。」

後ろから紫龍が声をかけたが、そう言う紫龍もまた、火時計を見ては冷や汗を流している。

そしてそれは、この場にいる誰もが実感していることだった。本当にもう、何も出来ない。

皆がそう分かっているからこそ、身を切るような悔しさと焦りの中でも、じつと黄金聖闘士達の帰還を待っているのだ。

と、その時だった。

突如足元が微かに揺れ、遙か遠くの教皇の間から、星矢達がいる

白羊宮まで届く物凄い轟音が響いた。

同時に巨大な小宇宙の柱が立ち上っているのも見える。

「な……何だ、今の天地をつんざくような衝撃は……まさか！」

星矢だけでなく、その場の全員が同じこと　最悪の結末を思い
浮かべるのに、時間はかからなかった。

そして二度目の爆音。

先程より更に大きな衝撃が響き渡る。

「みんな！あれを見て！」

瞬が衝撃の中心を指差す。

そこに見えたのは……羽根。

いくつものキラキラと淡い黄金の光を放つ羽根が、聖域の夜空に
舞っている。

「あの小宇宙は……アイオロス……。」

翼を背に雄々しく立つその姿が目には浮かぶ。

残り僅かな時間で、何人もの相手をしりぞけ、傷付いた身体でそ
れでも諦めること無く闘うその姿が！

「あと少しだ！急いでくれ！」

「もう時間が無いんだ！」

「アイオロス！」

聞こえるはずも無い、だが遙か彼方で闘うその背を押すように星矢達は口々に叫んだ。

そして……

火時計の火が、消える。

しかしそう考える間もなく、十二宮の彼方から放たれた光が、アテナも星矢達も覆い尽くしていた。

それは、まさしく奇跡だった。

後から思い返してみても火が消えたのと、光が到達したのと、どちらが先だったのかは分からない。

消えた、と思った瞬間には既に、光によってアテナの胸の矢は、まるで氷が溶けるように跡形もなく消え去っていたのだから。

「ア……アテナが目を覚ました！」

ゆっくりと目を開け、立ち上がったアテナを見て、星矢達は一斉

に歓喜の声を爆発させた。

心臓に達しようかという程に深く刺さっていたはずなのに、矢があった所には傷一つ無く、その様子はまるで、たった今まで普通に眠っていたかのようだ。

そして、彼女はゆっくりと立ち上がると、涙を流して喜ぶ星矢達に言った。

「星矢…みんな…ありがとう。私がこうしていただけるのも、あなた達のおかげです。そして……」

アテナは、微笑を浮かべながら周りを取り囲む星矢達を見渡し、静かに呟くと、予めそう決めていたかのように、全く迷いの無い足取りで、十二宮へと向かって行った。

魔羯宮

限界まで互いの力と小宇宙をぶつけ合い、未だ激闘のさ中にあるレオのアイオリアとカプリコーンのシユラ。

二人共、既に息が上がり、立つことすら困難な程の傷を負っているが、それでも血の滲む拳を構えて止めようとはしない。

そしてもう何度目になるのだろう、文字通り目にも止まらぬ閃光の拳と、研ぎ澄まされ、聖剣と化した手刀が交錯する。

「ライトニングプラズマ!!!!!!」

「エクスカリバー！！！！」

砕けた拳と折れた手刀が激突した……その瞬間、二人は目も眩むような光に包まれていた。

宝瓶宮

凄まじい凍気を発しながら二人の男を包み込んでいる巨大な氷塊を、大いなる光の小宇宙が通り抜けた。

すると……その氷に、一条の亀裂。

それはどンドン氷全体に広がっていき、やがて氷は音を立てて崩れ去った。

「なん……だ……？俺は、助かったのか？」

氷の中から現れたのは、スコープイオンの三口。

自分が置かれている状況が飲み込めずに、とりあえず辺りを見回すが、何の手掛かりも無く、一体何が起きたのか皆目見当も着かない。

不思議に思っていた、その時、不意に彼は最後の瞬間を思い出した。

道連れで巨大な氷の棺に閉じ込められそうになり、本気で死を覚悟した瞬間……それを思い出して、三口は思わず身震いしていた。

彼の親友が作り出したこの世で最強の氷、それは指拳一つで打ち破ることの出来た薄い氷壁とは強度がまるで違う。

加えて、その時既に手足は凍りついていたので。

巨大な氷塊から自力で脱出するのは、どう考えても不可能だったはず。

なのに現実はどうだろう、今ミロは何も無い宝瓶宮の床に横たわっている。

信じられない思いで立ち上がってみると、身体中を覆っていた凍傷も心なしが軽くなっているようだ。

「一体何が起こったのだ…。」

「目が覚めたかミロ。」

「カミュ！」

いきなり後ろから声をかけられた。

声の方を向くと、そこにはミロを止めるために自分の命すら省みず、共に氷に閉ざされたはずの親友、アクエリアスのカミュが立っていた。

「そうか、この氷を砕いたのは、お前だったのか。」

何事も無かったかのように立っているカミュを見て、ミロは納得した。

自分で作り出した氷を砕くのは容易いことなのだろう、と。

だがカミュの答えはそうでは無かった。

「何故突然氷が砕けたのかは私にも分からない。なにしろ、あの

時私にはそんな力は残されていなかったのだからな。…それに見ろ、お前のスカーレット・ニードルの傷口が浅くなっている。この傷はそう簡単に消えるものではないはず。私には何か、外部からの影響で氷が崩れたように思えるのだが？」

「むっ……確かにそう言われてみれば、氷の中を何かが通り抜けたような気配があった。」

そこまで言っつて、ミロはあることに気がついた。

「…先へ行つたアイオロス達はどうなったのだ？ 教皇の間からは、何も感じられんが…。」

二人して怪訝な表情で顔を見合わせていた、その時だった。

宝瓶宮、いやそれだけではない、聖域全体を包み込む程に圧倒的な、それでいて天地開闢を思わせるような雄大な小宇宙に、思わず二人は振り返った。

するとそこには……

「アテナ！」

ミロが叫んだ先にいたのは、手に黄金の杖を持ち、しっかりとした足取りで宝瓶宮の階段を上るアテナの姿。

そしてアテナの背後には、ミロとも闘った五人の青銅聖闘士、更にはここまでの宮を守る黄金聖闘士達も付き従っていた。

「な……何だと……？ この方が……アテナだと言っつのか、ミロよ……。」

目の前にアテナが立っているということが信じられない、とでも

言うようにカミュが声を上げた。

ずっとアテナは聖域にいと聞かされてきたのだ、無理も無い。ついそれを否定する言葉が口について出そうになるが、それもなんとか抑え込む。

カミュは彼女から発せられる小宇宙が自分達黄金聖闘士のそれを遙かに上回っていることに、既に気が付いていたのだ。

小宇宙の真髄を極め、人として究極のレベルに達しているとされる黄金聖闘士。

それを超越する力など、もはや神以外には持ち得ないというのも事実。

隠れようも無い、真の女神の所在を知ったカミュは、自然と頭を垂れ膝を着いていた。

「我が師カミュ！顔を上げて下さい。」

だがその時、アテナに対して跪くカミュに向かって飛び出したのは、青銅聖闘士の一人、氷河だった。

「おおっ、氷河！」

聞こえてきた声に顔を上げると、傷付いた聖衣を纏う弟子の氷河が、両手を差し出して立ち上がるよう、促していた。

驚いたように弟子を見上げるカミュ。

「そうか……お前はアテナの下で闘い抜いたのだな……。よくぞここまで成長したものだ……私は嬉しいぞ氷河！」

感極まって涙を流す師の姿に、氷河も身体を打ち震わせる。

そして、立ち上がった師弟と、それを見守っていたミロにアテナ

が穏やかに言った。

「今から私は教皇の間に向かいます。あなた達も……ついてきてくれますか？」

「…はっ！」

ミロとカミュは静かにその言葉に頷くと、アテナに従う他の黄金聖闘士達と共に教皇の間に向かって進み始めた。

教皇の間

ピスケスのアフロディーテは覚えのある気配を感じてつつすらと目を開けた。

「お前は……デスマスク？」

「おっ、やっと目覚めたか。」

ボロボロの身体に鞭打って、なんとか上体を起こすと、彼のすぐ傍にキャンサーのデスマスクが立っていた。

見ると、デスマスクだけでは無い。

タウラスのアルデバランやバルゴのシャカ、それに老師を除く黄金聖闘士達が皆この場に集結しているではないか……ただ二人を除

いて。

「サガとアイオロスは……どうなった？」

「知らねえよ。でもアテナが復活してるってことは、サガの方が負けたんだろ。」

デスマスクはそれだけを面倒くさそうに話すと、後は押し黙ってしまった。

アフロディーテは仕方なく口を閉じ、サガの放った爆風によって荒れ果てた教皇の間を見渡してみると、あちこちが砕けていたり、ひびが入っていたりで、ひどい有り様だった。

青銅だけでなく黄金聖闘士にも傷を負っている者が少なくない、彼自身もかなりのダメージを受けているのだ。

それを見たアフロディーテは自嘲するように言った。

「フツ……虚しいものだな……。」

「あん？いきなり何だ？」

「……あの時、私達は教皇に成り代わったサガに従うことが、平和への近道だと信じた。だが……結局はこのザマだ。今まで私達が生きてきたことは一体何だったのだ……？」

そう言って俯くアフロディーテの耳に、デスマスクらしい軽薄そっけな笑い声が響いた。

「ハツハツハ、バカかお前？」

「何だと!」

その言葉はアフロディーテの顔色を変えるには十分過ぎたのか、思わず怒気の籠った声を上げずにはいられなかった。

しかし意外なことに、それを受けてもデスマスクは笑いを崩さず、どこか真剣な表情のまま言葉を続ける。

「俺達が負けたのは、単にあいつらより力が下だった、それだけのことだろ？」

「む……………」

「何より、俺達は負けたとはいえ死んだ訳じゃねえ。少なくとも俺は、このままやられっぱなしでいる気は無いぜ。」

「…相変わらずだな君は。だがその通りだ…………私達にはまだ果たすべき役目がある。それを、私は忘れていたよ。」

言つて、力無く頂垂れていたアフロディーテは、再び不敵な笑みを浮かべると、デスマスクの手を借りて立ち上がった。

教皇の間で聖闘士達が顔を合わせていた頃、アテナは一人その更に奥へと進んでいた。

十三年前からずっと傍で彼女を守ってきた、そして今また再び命の危機から救ってくれた者の所へ。

ここへ辿り着くまでに通過してきた十二宮では、彼や、共に進ん

だ者達と、宮を守る黄金聖闘士達との激闘の跡を、至るところに見ることが出来た。

彼の強さを知りつつも、もしかしたら、という不安感は付きまとう。

そんな気持ちを抱えながらも、進んでいく内にとうとう聖域の最も奥、アテナ像が見える場所まで来た。

そしてその時、彼女の前に現れたのは、思いもかけない人物だった。

「あ…あなたは!？」

大地に両手をついて跪く男に、アテナは少し上ずったような声で問いかけた。

男はそれを聞くと、僅かに顔を上げ、アテナに対して澄んだ眼差しを向けた。

「私の名はサガ。…十三年前、あなたを殺そうとした男です。」

初めて見るその姿に、思わず彼女は目を見開いた。

しかし、サガはそれには構わず、滔々と話を続けた。

「私がずっと積み重ねてきた罪を、せめてアテナの前で一言詫びようと思ひ、こうして参上したのです。」

優しげな表情で表情でそう語るサガの姿は、とても彼がかつての凶行を行った者と同一人物だとは思えない程だった。

そして溢れ出した涙もそのままに、両の拳を握りしめる。

「…この鬪いの咎は、全てこの私にあることは分かっています。ですが…このサガも本当は正義のために生きてかった。どうか、それだけは信じて下さい…。」

次の瞬間、サガが命を断とうと自らの胸を目掛けて手刀を繰り出した。

だがそれは、突如彼の横から伸びてきた手によって掴み取られた。

「お……お前は！」

「アイオロス！」

黄金聖衣さえも貫こうかという程の、渾身の小宇宙を込めた手刀は、手首を取られ、彼の身体のほんの少し手前で止められていた。サガが全力で放った突きを止めたのは、この男、サジタリアスのアイオロス。

「…やめるアイオロス、手を放せ。」

サガがその手を振り払おうとするが、アイオロスの手は微動だに
しなかった。

そしてそのままサガの手刀から手を放すこと無く、アイオロスは
口を開いた。

「やめるのはお前の方だ、サガ。アテナに許しを乞うと言いな
がら、その言葉を聞く前に死を選ぶとは何事か！」

手首を掴むアイオロスの手に力が入る。

「…お前が真に自身の罪を悔いるのなら、改めて裁きを受けよ。
それによってお前が死を選ぶなら、私も止めはしない。」

サガはアイオロスの言葉を聞いて納得したのか、神妙な面持ちに
なった。

「…そうだな、ならば私も改めて問おう。」

そして再びアテナに対して深々と頭を下げた。

「アテナ、今回の事件を起こした罪を償う為、どうか私に死をお
与え下さい。」

「サガ…。」

サガを見つめるアテナの目に強い光が灯った。

そして右手に持った杖を向けて、厳かな声で裁きを述べる。

「サガ、あなたは今まで多くの人々を傷付けました。」

「はっ…。」

「あなたの犯した罪は、死を以てしても消えるものではありません。」

「なっ!！」

「アテナ!！」

これにはさすがの黄金聖闘士二人も驚いたようにアテナの方を向いた。

するとすかさず、アテナは凜とした声で言った。

「ですからサガ、あなたにはこれから先、聖闘士として闘い抜くことで、その罪を償うことを命じます!！」

響き渡ったアテナの声に、あたりが静まり返る。

それを聞いたサガは一瞬呆けたような顔をした後、ハッと我に返り、ゆっくりと、そして力強く言った。

「ありがたく存じます、アテナ。このサガ、命尽きるまで聖闘士として力の限り闘うことを誓いましょう!！」

「ええ、こちらこそお願いします。」

そして立ち上がったサガに微笑むアテナの後ろから、教皇の間になっていた聖闘士達が続々と集まってきた。

黄金聖闘士達だけではない。

青銅聖闘士や白銀聖闘士、雑兵に至るまで、聖域の全ての人間が

集まったかのようだ。

その中から、黄金聖闘士達が一步前へと進み出た。

そしてアリエスのムウが、皆を代表してアテナにその意志を宣言した。

「アテナ……ここに居る者達は、黄金聖闘士から雑兵に至るまで、皆一つの考えで一致しました。」

「アリエスのムウ……！」

「タウラスのアルデバラン……！」

「キャンサーのデスマスク……！」

「レオのアイオリア……！」

「バルゴのシャカ……！」

「スコルピオンのミロ……！」

「カプリコーンのシュラ……！」

「アクエリアスのカミュ……！」

「ピスケスのアフロディーテ……！」

アテナの傍の二人がそれに続けた。

「……ジエミニのサガ……！」

「サジタリアスのアイオロス！！」

「……………我ら黄金聖闘士、アテナに忠誠を捧げることを誓います！！！！」

その声を受けたアテナは、その場にいる者達を一人一人見回すと、全身から雄大な小宇宙が立ち上り、右手の杖が光輝いた。

「分かりました、あなた達の意志を聞いて、私もまたこの先の聖戦を、皆と共に闘い抜くことを決意しました。さあ、今こそ！聖戦の始まりです！」

こうして、十二宮の闘いは終わりを告げ、新たなる聖戦への幕が開けた…！

第十九話 終結（後書き）

やっと十二宮篇・完です

「やっぱりな」と言われようと、黄金聖闘士全員で終えられて、ほっとしています

一応黄金が全員出たので、個人的な強さランクでも書きます

これは全く私的なものなので、異論反論有るかもしれませんが、気にしないで下さい

A、サガ、シャカ、シオン、童虎、カノン、（アイオロス）

B、ムウ、アイオリア、シユラ、カミュ

C、デスマスク、アフロディーテ、アルデバラン、ミロ

A B Cです

アイオロスは原作では闘わないので、ランク外なのですが、イメージ的にこんな感じですね

他には

黄金 >>> 白銀 > 青銅 とか

ちなみに、この話での設定では

黄金 > > 一輝 星矢達 白銀です

第二十話 海皇の目覚め(前書き)

今回はいつも以上に短く、しかもほぼ原作のまま……何か申し訳ないですね

第二十話 海皇の目覚め

ここはギリシャ、スニオン岬を間近に臨むとある豪邸で、今日も世界各国の富豪や財閥を招いた大きなパーティーが開かれていた。

パーティーの主催者であり、この邸の主でもある青年の名は、古くから貿易によって巨万の富を築き上げてきた海商王ソロ家を率いる若き総裁、ジュリアン・ソロ。

華やかな外見とは裏腹に、莫大な資産で以て世界の海を牛耳る男である。

しかし若くして家督を継ぎ、世間に名を知られたジュリアンは、この日、彼の十六歳の誕生日を境にあらゆる経済、社交の表舞台からその姿を消すことになる。

彼もまた、古の時代より続く神々の世界に足を踏み入れてしまったのだ。

「い……一体あの三つ又の鉾は何だ!？」

スニオン岬の先端で目にした物に、ジュリアンは思わず息を呑ん

だ。

時は少々遡る。

それは、パーティーの最中にふと海を見ていた時のことだった。気を紛らわそうとして、何気なく外を眺めていると、やや離れた所で何かが光っているのが見えた。

そこはスニオン岬と呼ばれる場所だった。

海に向かって突き出ている形になっていて、今も古い神殿の跡地が残ってはいるが、他には特に何が有るという訳でも無い、はずであつた。

そんな所から光が射しているのが妙に気になり、ジュリアンは邸をこつそりと抜け出し確かめに行った。

そして辿り着いたスニオン岬で彼が目にしたものは、柄が地面に突き刺さつた見事な三叉の銚であつた。

「これは一体……」

「その銚は、神話の時代からあなた様のものでございます。ジュリアン様。」

「だ……誰だ!」

突然背後からかけられた声に、ジュリアンは驚いて振り返つた。

するとそこに居たのは、見たこともない金属で出来た鎧を身に纏つた、一人の少女だった。

「私の名は人魚姫マーメイドのテティス。海皇ポセイドンの化身たるあなた様を、お迎えに参りました。」

「何だと、君は何を言っているんだ……?この僕が、ポセイドン

だつて!？」

テティスと名乗った少女の言葉に、ジュリアンは当惑した。

海に生きる一族であるソロ家の者にとって、海神ポセイドンは代々守り神として信仰されてきた存在だ。

しかしそれはそれ、所詮は神話に登場する神である。

いくらジュリアンでも、それが本当に実在すると思っていた訳ではないし、まして自分がそのポセイドンだと言われれば、誰だって信じる気にはなれないだろう。

そうであるにもかかわらず、彼はその場から立ち去る気にはなれなかった。

目の前に傳くテティスの表情は真剣そのものであり、到底人をはからかっているような雰囲気ではないというのもある。

だがそれ以上に彼自身が、テティスの言葉を強く否定する声が出てこない、むしろそれがさも当然のことであり、自らの運命であるとさえ感じている。

今までの人生はこの為にあつたのではないか、そう考えてしまう程に。

やがてその感覚は全身へと広がっていった。

そして、そんな心中の動揺を隠しきれないジュリアンの前でテティスは立ち上がると、そつと彼の身体に手を回してがっちり固定し、言った。

「これから私がポセイドン様を海底へとお連れ致します。」

ジュリアンの思考が一瞬停止した。

そしてすぐに頭が追いつく。

「なにい！？ちょっと待ってくれ！このまま海底へ行くつもりなのか！？」

自分を離さずいきなり真下の海に飛び込もうとするテイスに、さすがにジュリアンも肝を潰したのか、咄嗟に待ったの声をかけた。しかし、それが聞き届けられることは……無かった。

「ご安心下さい。海底では海闘士マリナーや海將軍達ジェネラルも首を長くしてポセイドン様をお待ちしております。」

「いや、だから……」

トン、とその瞬間テイスと、彼女に身体をホールドされたジュリアンは、スニオン岬から遙か下の海面に向かってその身を投げ出していた。

「うわあああああ！」

ジュリアンの悲鳴がスニオン岬に響き渡る。

そして、海中に突入したかと思うと、強烈な水圧と呼吸が出来ない苦しさからか、彼は意識を失った。

目を覚ますと、そこには、海。

摩訶不思議な光景だった。

頭上に広がっているのは空ではなく、巨大な水のドームとも言っべきものが覆っている。

そして足元には、存外すっかりした石畳で作られた道がどこかに続いている。

とてつもなく大きな気泡に包まれている、という表現が相応しいかもしれない、そんな世界だった。

「ここは…?」

「海皇ポセイドン様の都、海底都市アトランティスでございます。」

傍に控えていたテイスが、その疑問に答える。

アトランティス、伝説として伝えられる都市が、海の神ポセイドンの治めていた都であり、こうして海底に今も残されていると彼女は言う。

しかしそうと聞いても、彼女と違ってここへ来る途中で意識を失ってしまったジュリアンには、やはり海底へ着いたという実感は薄く、ただ呆然とそれを受け入れるしか無かった。

「本当に、これが海の底なのか…。」

「はい。さあ参りましょう。あちらで皆が集まっております。」

そう言ってテイスは彼の前に立って、海底に敷かれた道を進んでいく。

それに続いてジュリアンも歩いていくと、しばらくして大きな建

物が見えてきた。

古い、とても古い神殿のようだった。

これこそがまさしく海皇ポセイドンの神殿であり、居城でもあるのだらう。

神聖で荘厳な空気が漂うその中で、テティスの鎧と似たものに身を包んだ一見して兵士と分かる者達が集結していた。

彼らは皆一様に、更に神殿の奥へと進むジュリアンに歓声を上げて跪いていく。

「彼らは海鬪士^{マムナ}。ポセイドン様を守る兵士達でございます。」

案内役として一歩先を進むテティスが、海鬪士について説明する。海底のこと、海鬪士のこと、その他にも、いろいろとやり取りをしながら進んでいく内に、ようやく目的の場所に着いたようだ。

そこにあつたのは、やはりジュリアンには分からない金属で出来た、神 間違いないくポセイドンだらう を象った上半身のみの像だった。

その手には、スニオン岬で見たような三叉の鉾が握られていて、雄々しくそれを掲げる様子は、逞しい神の姿を表している。

もっとよく見てみたい、そんな思いがよぎったジュリアンは、吸い込まれるようにその像へ近づいていく。

そして、今まさに触れようとして……… 像が弾けた。

次の瞬間、海神ポセイドンを模したその像は、頭、肩、腕等の細かいパーツとなってバラバラに分解し、それらがまるで自らの意志を持つかのように自然とジュリアンの身体に装着されていた。

海闘士が纏うその鎧の名は鱗衣。スケイル

そして数ある鱗衣の中でも頂点にあるのが、このポセイドンの鱗衣だ。

ジュリアンがそれを身に着けた時、あたかも前世の記憶が甦ったかのように、意識の奥底から沸き上がってくる声が聞こえた。

それは、神としての意志。

「そうだ、私には使命があった

人間によって汚された地上を浄化するという使命が

そう

我が名は

海皇！ポセイドン！」

ジュリアン、いや既に彼は海皇の意志を受け継ぐポセイドン。
その身体には強大な小宇宙を宿す、神の化身。

太古の昔、アテナと地上の支配を巡って争ったという海皇ポセイドンが、今ここに覚醒したのだ。

「テティス、ポセイドン様はどうなさっている？」

「神殿の奥にてお休みになっております、シーテラリン海龍様。」

ポセイドンの覚醒の後、神殿の入口で話し合う二人。
海龍と呼ばれた男は、それを聞いて高笑いして言った。

「そうか。これで地上は我らがポセイドン様が手に入れたも同然。
アテナなど、物の数ではないわ！」

しかし、テティスは僅かに俯いて言い返した。

「海龍様、アテナの下には聖闘士がおります。油断は出来ないの
ではないでしょうか。」

だが、海龍はそれでも余裕を見せたままだった。

「フツ……そのような心配は要らぬ。聖域は少し前の争いで今も
混乱が続いているはず。ポセイドン様の大望の障害になど、なるは
ずが無いではないか。」

「しかし……」

「くどい！」

やはり海龍は聞く耳を持たない。
だが、その時だった。

「テティス、それほど心配ならば、この私自らアテナの元へ赴こう。」

尚も続けようとするテティスの背後から、涼やかな声が聞こえてきた。

「むっ…。」

二人は現れた男に目をやった。

すると、そこに近づいてきたのは……

「お前は！海魔女セイレーンのソレント！」

それは、横笛を手に微笑を浮かべた青年だった。

テティスの発言からするに、ポセイドン配下の中でもトップに立っていると思われる海龍を前にしても、微塵も物怖じしていない。

ソレントはそのまま海龍の傍に近寄ると、軽く頭を下げた。

そして再び海龍に向かって尋ねる。

「それで、いかがですか。あなたが命じるのなら、私が聖闘士共の首を取って参りましょう。」

海龍は一瞬考え込むような仕草を見せた後、はっきりと言った。

「いいだろう。お前ならば、それも容易いはず。見事、聖闘士共を根絶やしにしてくるがいい！」

「ははっ。」

かくして、ソレントの出撃は許可された。

そしてそれを受けたソレントは、海底の神殿から軽やかな足取りで去っていく。

これにより、聖域と海界とが戦争状態に陥り、またしても多くの聖闘士達が巻き込まれていくことになる。

そしてこの闘いが、後に勃発する聖戦にも大きな影響を与えるのだった。

そして、海皇が目覚めるのとはほぼ時を同じくして、中国は五老峰から西に約1000kmの地に聳え立つ、巨大な塔が、轟音と共に崩れ落ちていた。

組み付きしだい絞めまくってやる！！

ギヤラクシ ウォーズ初戦敗退 ベアーの檄だアツ！！！！

素手の殴り合いなら光速の拳がものを言う！！

素手の聖闘士 黄金の獅子 レオのアイオリア！！！！

真の凍気を知らしめたい！！ 水と氷の魔術師 アクエリアスのカ
ミュだア！！！！

必殺技は3種類だが薔薇の花なら全種類私のものだ！！

美の戦士 ピスケスのアフロディーテだ！！！！

青銅対策は完璧だ！！ サトリの法 アステリオン！！！！！！

全聖闘士のベスト・ディフェンスは鎖の中にある！！

冥王の依り代が来たッ アンドロメダ瞬！！！！

タイマンなら絶対に敗けん！！ 聖闘士一のタフネス見せたる 特

攻嚙ませ牛 アルデバランだ!!!

バリ・トウード (裸もあり) ならこいつが怖い!!

五老峰のリア充・ファイター ドラゴン紫龍だ!!!

コキュートスから黄金の翼が復活だ!! サジタリアスのアイオロ
ス!!!

誰もが驚く裏切りがしたいからスペクター (冥闘士) になった
のだ!!

プロの演技を見せてやる!! キャンサーのデスマスク!!!

めい土の土産に私の顔とはよく言ったもの!!

第八感の奥義が今 聖戦でバクハツする!! 最も神に近い男 バ
ルゴのシャカだ !!!

教皇こそが地上最強の代名詞だ!!

まさかこの男がきてくれるとはッ 前教皇シオン!!!

(星矢を) しごきたいからここまで来たッ 素顔一切不明!!!

鷲座の白銀（シルバー） 聖闘士 イーグルの魔鈴だ！！！！

オレは青銅最強ではない聖闘士で最強なのだ！！

御存知聖闘士に同じ技は二度通用しない フェニックス一輝！！！！

ペガサスの聖衣は今や日本にある！！ オレに聖衣はないのか！！

カシオスだ！！！！

弱アアアアアイツ説明不要！！ 聖衣装備で！！！！ 素手に敗北！！！！

サジッタのトレミーだ！！！！

剣道は実戦で使えてナンボのモン！！！！ 剣道三段！！！！

本家日本から辰巳徳丸の登場だ！！！！

アテナはオレのもの 邪魔するやつは思いきり殴り思いきりぶっ飛ばす！！！！

疑惑のロリコン聖闘士 シジフォス

自分を試しに海底へ行っただッ！！

海界全海將軍筆頭 シードラゴンのカノン！！！！

積戸気に更なる磨きをかけ ” 死刑執行人 ” マニゴルドが帰ってきたア！！！！

今の自分にセリフはないッッ！！ やった、初ゼリフ！ ライオネツト蛮！！！！

年齢二百六十一歳の老師が今皮を脱ぐ！！ 五老峰から ライブラの童虎だ！！！！

聖闘士候補生の前でならオレはいつでも全盛期だ！！

燃えた牡牛座 ハスガード 本名で登場だ！！！！

修復師の仕事はどうしたッ 闘士の炎 未だ消えずッ！！

サイコキネシスもテレポートも思いのまま！！ アリエスのムウだ！！！！

特に理由はないッ 白銀聖闘士が強いのは当たり前え！！

星矢にはないしょだ!!! 仮面両断!

オピュクスのシャイナがきてくれた
!!!

デスクイーン島で磨いた実戦小宇宙!!

暗黒聖闘士のデンジャラス・ライオン ジャンゴだ!!!

聖剣だったらこの人を外せない!! 超A級聖闘士 カプリコーンのシユラだ!!!

超一流聖闘士の超一流の肉体だ!! 生を拝んでオドロキやがれッ

神よ私は美しい!! リザドのミスティ!!!

絶対零度はこの男が完成させた!!

シベリア師弟の最終兵器!! キグナス氷河だ!!!

宿命の聖闘士が帰ってきたッ

どこへ行っていたんだッ 主人公ッ

俺達は君を待っていたッッペガサス星矢の登場だ

ツ

第二十一話 出撃！

「今日も雨か……こんなにも長く続くとは、珍しいこともあるものだ。」

教皇の間から外を眺めると、ここ最近降り続けている雨が目に入る。

それを見つめていたサガが、一人静かに呟いた。

聖域のあるギリシャは、地中海に面している国であるため、もともとそれほど雨の多い地域ではなく、どちらかと言えば乾いた気候の国だ。

それなのに、こつも連日雨が続けているのは、何か理由があるのではないだろうか、つい考えてしまう。

「考え過ぎか。よく見れば、雨の勢いも多少衰えてきたようだな……。その内に、止むか。」

教皇に扮したサガが治めていた聖域に、アテナが聖闘士を引き連れ乗り込み、十二宮を守る黄金聖闘士をも巻き込んだのぶつかり合いとなった、あの闘いから数ヶ月。

アテナを亡き者にしようとしたサガは、彼女を守ろうとする聖闘士達の前に敗れた。

あの時、サガは半ば正気を失っていたとはいえ、彼が犯してきた

事を鑑みれば、その罪は死を以て償うしか出来ないであろうということとは明白だった。

それが分かっていたからこそ、最期は潔く、せめて自らの手で命を断とうと急所を目掛けて放った手刀は、かつてサガに聖域を逐われ、そして再びアテナと共にサガに挑んできた親友によって阻まれた。

そしてアテナから告げられた、裁きという名の赦し。

サガは、今まで自分が行ってきた事を心の底から後悔した。

またそれ以上に、アテナの限り無い優しさへの感謝の気持ちだが、熱い涙となつて沸き上がった。

そして悟つた、これから先に、聖闘士として己の成すべきことが何であるかを。

それが例えどれほど辛く苦しい道のりであったとしても、全てを受け入れ、貫き通すだけの覚悟を、サガはその時、心に決めた。

教皇の不在が明らかとなった聖域では、今現在、黄金聖闘士の年長者としてアイオロスとサガが聖域全体をまとめている。

既に聖戦への準備に入っているため、通常教皇が行っていたような業務は減ってきているが、それでも無い訳ではないので、二人は大抵教皇の間にいることにしている。

そうしている内に、聖域での混乱も収まり、緊迫した中でも徐々に落ち着きを取り戻していったのだった。

雨の中、教皇の間の入口近くで何をすることもなく立ち尽くしていたサガの元に、しばらくしてからアイオロスもやって来た。

ちなみに二人は教皇の法衣ではなく聖衣を着ている。すると、唐突にアイオロスが話し始めた。

「こつも雨ばかり続くと、流石に気が滅入るな。世界中でも雨が止まず、各地で洪水も起きているそうだ。」

「ああ、それは私も聞いている。聖戦もまだ始まっていないというのに……。」

世界中を襲う豪雨は止むことも無く、それによって引き起こされた洪水や津波の被害は日に日に増していた。

人智を超えた力を持つ聖闘士といえども、自然が起こす天災を相手にして出来ることなどありはしない。

故に、二人は苦い思いを抱きながらも、聖域を動かすことはしなかった。

だが、もしもそこには何か理由があるのだとしたら……

「アイオロス様！サガ様！五老峰からの知らせでございます！」

雨の降る中静寂を破ったのは、一人の雑兵の声だった。

老師からの知らせという手紙を受け取ったアイオロスは、それを開いた瞬間、すぐに大変な出来事が起きたということを理解した。

思わず手紙を握り潰したアイオロスの表情が一変する。

「サガ、今すぐ黄金聖闘士を教皇の間に集めるぞ！それにしても

……何ということだ……！」

召集をかけられてから間もなく、五老峰に鎮座する老師を除く、九名の黄金聖闘士達が全員教皇の間に集結した。

その誰もが、大なり小なり緊迫した表情で、アイオロスとサガから自分達がここに集められた理由を聞いていた。

「そんなバカな……アテナが、さらわれただと……!？」

全てを聞き終えると、アイオリアが掠れた声で言った。

それは聖闘士にとってあまりにも衝撃的な知らせだった。

アテナの生まれ変わりである少女、城戸沙織には、戦女神としての役割だけではなく、城戸光政が遺したグレード財団の長としての顔もある。

それだけに外での仕事も多く、聖域に常駐している訳にはいかないのが現状だ。

今回の事件では、見事にその隙を突かれてしまった。

これから、今まさに聖戦が始まるうとしているこの時に、聖域の要であるアテナが姿を消すということがどれほどの事態なのか、それを彼らは十分に理解していた。

そして僅かの沈黙を経て、未だ動揺も冷めやらぬままに、二人に向かつて真つ先尋ねたのはムウだった。

「…それで、アテナをさらったというのは何者ですか？」

「敵は海皇ポセイドンの戦士、海闘士マリナーと名乗ったそうだ。」

ムウの問いかけに答えたのはサガ。

そして海闘士の名が出た瞬間、黄金聖闘士達の目つきが鋭くなっ
た。

戦神アテナに仕える聖闘士同様、海皇ポセイドンにも海闘士が存在するのはあまり知られてはいない。

何故なら彼らは、遠い昔にアテナと地上の支配権を争い、それに敗北してから今まで、ずっと息を潜めていたのだから。

だがしかし、その長い雌伏の時を経て、ポセイドンが再び戦いを挑んできたというのだ。

それぞれが今起こっている事態の重さを噛みしめると、アイオロスがそこにいる黄金聖闘士全員に向けて檄を飛ばした。

「皆も事態を把握出来たと思う。そこでだ……アテナを救うために、私達が直接ポセイドンの本拠地である海底へと乗り込む！」

するとその時、黄金聖闘士の中から呆れたような声が聞こえてきた。
た。

デスマスクだ。

「おいおいアイオロス、俺達黄金聖闘士が、つてのは大袈裟じゃ

ねえか？別に白銀や青銅でも十分だろ。」

デスマスクはそんな軽口を叩いたが、それを聞いてもアイオロスは真剣な顔つきを崩さない。

「…敵を侮るなデスマスク。海底には、海將軍ジェネラルという海闘士の中から選りすぐられた七名の精鋭がいるらしい。」

そこでアイオロスは一旦話を切った。

言つべきかどうか、迷うような素振りを見せた後、意を決して続けた。

「その海將軍の一人が、今回アテナを連れ去った張本人なのだが……アテナが聖域の外に出ている時、護衛として常に青銅聖闘士四人が付き添っていた。だがその男は何と、たった一人でその守りを突破したのだ。」

「！…その四人とはまさか！？」

四人の青銅聖闘士、という言葉に最初に反応したのは、ミロであった。

「…星矢達だ。彼らは今、聖域で治療を受けているが、まだ意識は戻っていない。つまり、海將軍とやらの強さはそれほどのものなのだ。」

ミロの顔が驚愕に染まる。

黄金聖闘士達で唯一、星矢達と真つ正面から闘った経験のあるミロだからこそ、彼らを倒したという海將軍の手強さを理解した。

並の青銅聖闘士を遙かに超える力を持つ星矢達でさえ、こつもあ

つさりと倒され、しかもアテナを守り切れなかった程の敵ならば、たとえ何人がかりで行っても白銀や青銅では相手にならないだろう。そう確信したミロは、強い口調でアイオロスに言い放った。

「良かろう……ならばこのミロが海底へ行く！そして海將軍共を叩き伏せてくれる！」

だが、そう言っていていきり立つミロを、サガの一言が制止した。

「待て、ミロ。お前一人を行かせる訳にはいかん。」

「なにい！この俺が、海將軍如きに遅れをとるとでも言うのか！」

今にも海底に向かって飛び出しそうな勢いでいたミロは、それを止めようとするサガを睨み付けた。

まるでミロ一人では不覚を取る、とでも言いたげなサガの言葉が、ミロの癪に障った。

ミロは自分の力が海將軍に劣っているとは思わない。

それだけの自信と、強さを彼は身に付けているのだから。

しかし続くサガの言葉は、ミロだけでなくその場の者全てに衝撃を与えた。

「老師からの連絡はまだある。かつての聖戦で冥王ハーデスの魔星を閉じ込めた塔の封印が……解けたそうだ。」

その一言が出た瞬間、その場の空気が凍りついた。

冥王ハーデス。

神話の時代から地上を狙って戦いを仕掛けてくる冥界の神。

このハーデスを相手に、これまでどれだけの聖戦が繰り返されてきたのだろうか。

何時の時代も、聖戦が起こる度に幾多の聖闘士達が命を懸けて闘い、それこそ全滅寸前にまでなりながらも、その侵攻を食い止めてきた。

そして、前聖戦での死闘の果てに、先代アテナによって施された封印が、遂に解けてしまったのだ。

長きに渡る因縁の宿敵が　今再び甦る！

「百八の魔星が目覚めた今、敵はいつ地上への侵攻を開始するかわからない。故に、聖域の守りは万全でなければならん。」

「ならばどうするというのだ！このままアテナを放っておくとも言うのか！」

サガの淡々とした態度に、言い様の無い憤りを覚えたミロの怒声が教皇の間に響いた。

聖闘士が守るべきアテナを見殺しにするなど、彼には出来るはずもない。

そのまま即座にここから去ろうと、皆に背を向けたミロだったが、次の瞬間、彼の耳にサガの険しい声が届いた。

「どこへ行くミロ。」

「知れたこと！海底へ行きアテナを連れ戻す！」

これ以上の問答は無用、とばかりにミロが声を荒げると、そこに返ってきたのは、彼には予想外の言葉だった。

「…聖域の守りを固める、と言ったはずだ。」

これにはミロも激怒した。

「貴様はそれでもアテナの聖闘士か！もはや聞く耳持たん！たとえ何と言われようと、俺は行く！」

ここまで激昂したミロは、彼の仲間達であっても止める手立ては無いかと思われた。

ミロだけではない、今や他の黄金聖闘士でさえも、サガに対して疑いの念が強くなっている。

しかし、サガはそれらを全く気にも留めず、まるで何事も無かったかのように話を続けた。

「…そのためにはアテナが聖域に居ることが絶対。しかし、アテナの救出のためとはいえ、長時間黄金聖闘士が聖域から離れるようなことは出来ないのも事実。」

ならば一体どうするとか、という疑問を皆が頭に思い浮かべた。

そしてそれに対するサガの答えは、正しく全員の度肝を抜くものだった。

「…七人だ。」

「何…？」

「強敵と思われる海將軍の数は七人。……ならば！必要最小限の守りを聖域に残し、私達黄金聖闘士もまた七人で海底へと攻め入る！そして相手と一対一に持ち込み、全力で海將軍共を撃破！最短時間でアテナを救い、出来うる限りの早さで聖域へと帰還するのだ！」

思わずミロも立ち止まって後ろを振り返った。

そして一息でそう言つてのけたサガに対して、彼に疑惑の目を向けていた黄金聖闘士達も、その気配がついさきほどまでとはがらりと変わった。今やこの場の全員が、闘志と覇気が満ち溢れた顔で頷き合つた。

そう、今こそ アテナのために、そして何より地上の平和のために、我ら聖闘士が一丸となって立ち向かう時！

第二十一話 出撃！（後書き）

さて本格的に海界へ突入

星矢達がチートどころか既にかませと化している……

オルフェ風に言えば「あの白銀聖闘士をも凌ぐと言われた噂の聖闘士！」位の強さかな

そして海將軍相手に本気で潰しにかかるとか、サガまるで容赦無し！

海將軍さんマジ涙目な次回へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4612u/>

もし青銅が黄金だったら

2011年11月27日01時56分発行